熊本県文化財調査報告　第63集

上鶴頭遺跡

熊本県菊池郡七城町十三部地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告

1983

熊本県教育委員会

上鶴頭遺跡

熊本県菊池郡七城町十三部地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告

上鵜頭遺跡航空写真

序　　文

熊本県教育委員会では、十三部地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査として、菊池郡七城町に所在する上鶴頭遺跡の発掘調査を実施しました。

この調査では、平安時代前半の郡衙跡と推定できる建物群を確認することができましたので、ここに遺跡の全容を報告するものであります。

この報告書が文化財保護に対する認識を高め、学術上の一助となれば幸いです。

調査を実施するにあたりましては、県農政部、県菊池事務所、七城町をはじめ、多くの方々から御協力を賜りました。ここに厚く御礼を申し上げます。

昭和58年３月31日

熊本県教育長　外　村　次　郎

例　　言

1．本書は昭和57年度に熊本県教育委員会が調査を実施した、七城町十三部地区県営圃場整備事業に伴う同町大字亀尾字上鶴頭所在遺跡の発掘調査報告書で、熊本県文化財調査報告第63集として刊行するものである。

2．本書の執筆には、橋本康夫（II、III、IV－2・3・4、V、VI）と鶴島俊彦（I、IV－1・5、VI）があたったが、特に「上鶴頭遺跡の性格についての一推論」については熊本大学工藤敬一教授、「上鶴頭遺跡の建築について」は九州芸術工科大学沢村仁教授に執筆をお願いするとともに、御教授を受けたことを明記し謝意を表したい。掲載の実測図の作製および製図は執筆者があたったが、遺構の実測は、橋本、鶴島のほか安達武敏、黒田裕司、古森致次、田尻悦子、西生欣一郎（以上県文化課）、池田栄史（国学院大学助手）、遺物の実測では末本八珠美、藤崎伸子（以上熊本大学生）、特に銅銭に関しては河北毅（県文化課）の諸氏の協力を得た。

3．遺構写真の撮影は橋本、鶴島、黒田があたり、遺物写真は橋本が担当した。

4．熊本大学教授工藤敬一、白木原和美、同大助教授甲元真之、九州芸術工科大学教授沢村　仁、佐賀大学教授日野尚志、肥後考古学会会長三島　格の諸氏には現地で、調査の指導、助言をいただいた。調査終了後、九州歴史資料館技師森田　勉、横田賢次郎、高倉洋彰、高橋　章、倉住靖彦、熊本市博物館学芸員富田紘一、元熊本大学助手板楠和子、国立奈良文化財研究所狩野　久、山中敏之、県文化課島津義昭、松本健郎、野田拓治の諸氏より多くの教示を賜わった。

5．遺構の略記号は次のとおりである。ＳＢ－建物、ＳＣ－火葬墳墓、ＳＩ－竪穴住居、ＳＫ－土坑、ＳＸ－特殊遺構。

6．本書の編集は、熊本県教育委員会文化課で行ない橋本、鶴島が担当した。

本文目次

調査のための組織

第Ⅰ章　遺跡の立地と歴史的環境 …… 1

第Ⅱ章　調査に至る経緯 …… 8

1．調査に至るまで …… 8
2．十三部地区の試掘 …… 8

第Ⅲ章　調査 …… 13

1．調査の経過 …… 13
2．調査区の設定と名称 …… 15
3．遺跡の層位、層序 …… 16

第Ⅳ章　検出遺構 …… 18

1．掘立柱建物跡 …… 18
2．竪穴式住居跡 …… 37
3．火葬墓遺構及び遺物 …… 39
4．地鎮に伴う遺構及び遺物 …… 41
5．方形周溝状遺構 …… 43

第Ⅴ章　遺物 …… 45

1．縄文土器 …… 45
2．墨書土器 …… 46
3．土師器 …… 52
(1)　坏 …… 52
(2)　高台付埦 …… 56
(3)　皿・高台付皿 …… 57
4．須恵器 …… 59
(1)　坏 …… 59
(2)　高台付埦 …… 59
(3)　甕 …… 63
(4)　壺 …… 63
5．土錘 …… 63
6．紡錘車 …… 64
7．土器観察一覧表 …… 66

第Ⅵ章　総括 …… 76

付　論 …… 83

1．上鶴頭遺跡の性格についての一推論 …… 熊本大学教授　工藤敬一 …… 85
2．上鶴頭遺跡の建築について …… 九州芸術工科大学教授　沢村　仁 …… 87

挿図目次

第１図．上鶴頭遺跡付近地形断面模式図 … 1
第２図．周辺の遺跡分布図 …… 2
第３図．上鶴頭遺跡周辺地形図 …… 4
第４図．七城町大字亀尾字北十三部地区
試掘溝配置図…… 9
第５図．七城町大字亀尾字上鶴頭地区試掘溝
配置図 …… 10
第６図．上鶴頭遺跡調査区グリッド設定図… 16
第７図．上鶴頭遺跡標準土層断面図 …… 17
第８図．上鶴頭遺跡遺構配置図 …… 19
第９図．ＳＢ01建物実測図 …… 20
第10図．ＳＢ02建物実測図 …… 21
第11図．ＳＢ03建物実測図 …… 22
第12図．ＳＢ04建物実測図 …… 23
第13図．ＳＢ05－06建物実測図 …… 25
第14図．ＳＢ17建物実測図 …… 27
第15図．ＳＢ08建物実測図 …… 28
第16図．ＳＢ09建物実測図 …… 29
第17図．ＳＢ11建物実測図 …… 30
第18図．ＳＢ12建物実測図 …… 31
第19図．ＳＢ07建物実測図 …… 32
第20図．ＳＢ14建物実測図 …… 33
第21図．ＳＢ16建物実測図 …… 33
第22図．ＳＢ15建物実測図 …… 34
第23図．ＳＢ13建物実測図 …… 35
第24図．掘立柱建物柱間寸法 …… 36
第25図．住居跡カマド実測図 …… 37
第26図．住居跡実測図 …… 38
第27図．第１号墳墓実測図 …… 39
第28図．第１号墳墓蔵骨器実測図 …… 40
第29図．第２号墳墓実測図 …… 40
第30図．第２号墳墓蔵骨器実測図 …… 41
第31図．地鎮具埋納土坑実測図 …… 42
第32図．地鎮具須恵器実測図 …… 42
第33図．隆平永宝実測図…… 43
第34図．方形周溝状遺構実測図 …… 44
第35図．縄文土器実測図 …… 45
第36図．墨書位置図 …… 46
第37図．墨書土器実測図(1) …… 47
第38図．墨書土器実測図(2) …… 48
第39図．墨書土器実測図(3) …… 49
第40図．墨書土器実測図(4) …… 50
第41図．墨書土器実測図(5) …… 51
第42図．土師器坏実測図(1) …… 53
第43図．土師器坏実測図(2) …… 54
第44図．土師器坏実測図(3) …… 55
第45図．土師器高台付埦実測図 …… 57
第46図．土師器皿・高台付皿実測図…… 58
第47図．須恵器実測図(1) …… 60
第48図．須恵器実測図(2) …… 61
第49図．須恵器実測図(3) …… 62
第50図．土錘実測図 …… 64
第51図．紡錘車実測図 …… 64
第52図．掘立柱建物跡桁行方向 …… 76
第53図．掘立柱建物跡平面規模 …… 76
第54図．掘立柱建物変遷図 …… 77
第55図．掘立柱建物変遷模式図 …… 78
第56図．平行型二棟造民家 …… 81
第57図．宇佐福宮本殿立面、平面図…… 81
第58図．東大寺法華堂と …… 82
法隆寺食堂及び細殿

付図　上鶴頭遺跡検出遺構平面図
（Ｓ＝1/300）……

表 目 次

第１表．七城町大字亀尾字北十三部地区
　　試掘溝一覧表…… 9
第２表．七城町大字亀尾字上鶴頭地区
　　試掘溝一覧表…… 10
第３表．掘立柱建物跡の規模と棟方向 …… 18
第４表．竪穴式住居跡内柱穴計測表 …… 39
第５表．銅銭計測値一覧表 …… 43
第６表．縄文土器観察一覧表 …… 46
第７表．墨書土器一覧表 …… 51
第８表．土器観察一覧表(1) …… 66
第９表．土器観察一覧表(2) …… 67
第10表．土器観察一覧表(3) …… 68
第11表．土器観察一覧表(4) …… 69
第12表．土器観察一覧表(5) …… 70
第13表．土器観察一覧表(6) …… 71
第14表．土器観察一覧表(7) …… 72
第15表．土器観察一覧表(8) …… 73
第16表．土器観察一覧表(9) …… 74
第17表．土錘一覧表 …… 75

図･版 目 次

上鶴頭遺跡全景航空写真……1
第１・２・３号掘立柱建物跡……2
第４号掘立柱建物跡……3
第５・６・17号掘立柱建物跡……3
第７号掘立柱建物跡……3
第８号掘立柱建物跡……4
第９・10号掘立柱建物跡……4
第11号掘立柱建物跡……4
第12号掘立柱建物跡……5
第13号掘立柱建物跡……5
第14号掘立柱建物跡……5
第15・16号掘立柱建物跡……6
第１号墳墓出土状況（上）……6
第２号墳墓出土状況（下）……6
地鎮具及び出土状況……7
竪穴式住居跡（西から）……8
竪穴式住居跡カマド部分……8
方形周構状遺構（北から）……8
方形周構状遺構（東から）……8
土器出土状況及び柱穴状況…… 9～10 …… 9
柱穴状況……11
墨書土器（1/2）……12～15 ……12

調査のための組織

発掘調査は熊本県教育庁文化課が実施し、調査組織は下記のとおりである。

調査責任者　岩崎辰喜　文化課課長

調査　総括　隈　昭志　主幹兼文化財調査係長

調査員　橋本康夫　技師（主査）
村井真輝　技師
松本健郎　技師
鶴島俊彦　嘱託

調査事務局　林田茂一　課長補佐
大塚正信　主幹兼経理係長
松崎厚生　参事
横尾泰宏　参事
谷喜美子　主事

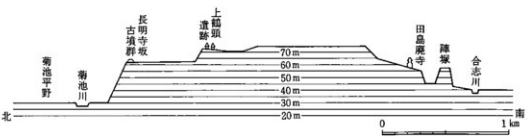
調査指導助言者
工藤敬一　熊本大学教授
白木原和美　熊本大学教授
甲元真之　熊本大学助教授
沢村　仁　九州芸術工科大学教授
日野尚志　佐賀大学教授
三島　格　肥後考古学会会長

調査期間中は下記の機関より調査協力をいただいた。記して謝意を表する。
熊本県農政部耕地第一課
熊本県菊池事務所耕地課
熊本県警察本部警務部警務課航空隊
熊本県菊池郡七城町教育委員会
熊本県菊池郡七城町農業開発課
熊本県菊池郡七城町土地改良区事務所
土地地権者各位
有限会社丸英スカイフォート事業部

第Ⅰ章　遺跡の立地と歴史的環境

本遺跡は熊本県菊池郡七城町亀尾字上鶴頭に所在し、東経130度45分27秒、北緯32度56分52秒に位置する。地形的には阿蘇外輪山西麓から西方に発達した広大な菊池台地の一角、通称花房台地と呼ばれる標高70～100mの洪積段丘（託麻面）上にある。この段丘は、本遺跡付近では標高約75mの上位段丘面と、標高約65mの下位段丘面が形成されており、本遺跡は上位段丘面の北縁部に立地する（第１図）。下位段丘面は菊池平野との比高が30m以上に達し、よく急崖が発達し、段丘縁には古墳や中世城が立地する。

この菊池台地などの阿蘇火山西麓の台地上では、河川の利用ができないため、火山灰性土壌であることとあわせて、無水地帯の低生産性畑地であった。しかし台地下の地下水調査が進展し、揚水技術が進歩した結果、多くの深井戸が堀られ、昭和30年代後半から昭和42年まで畑地の開田ブームが続き、台地上の土地利用は一変することとなった(1)。



第Ⅰ図　上鶴頭遺跡付近地形断面模式図

さて、本遺跡の位置する地域は現在では菊池郡に属するが、明治29年の菊池一合志郡合併以前は、合志郡に属していた。『和名抄』には合志郡内の郷として、合志・小川・山道・鳥鳴・口益・鳥取の６郷がみえる。本調査地付近が、この中のどの郷に含まれていたのかは、郷の比定が困難であるため不明だが、山本郡の郷としてみえる殖生・佐野の２郷は近世期にはすでに合志郡に属しているところから、それ以前に郡境の変動があったものと考えられる。なお、山鹿郡の郷としてみえる箸入・小野・伊智の３郷を各々七城町蓮入・同小野崎・植木町伊知坊に比定すれば、本遺跡付近は山鹿郡の箸入郷か小野郷に属することになる。しかし、菊池川流域に遺存していた条里型地割によって復原された坪並は、七城町橋田（近世期の合志郡）付近と合志川を挟んだ山鹿・山本郡側と異なることが指摘されており(2)、古代の合志郡境は近世期のそれと大差なかったものと考えざるをえない。

合志郡の名は、持統10年（696）に肥後国皮石郡人任生諸石が捕虜として唐の地で久しく苦しんで帰国したため位を授けられたという記事（続日本紀）が史料上での初見である。平城宮出土木簡には、「肥後国恰志郡調綿壱伯屯四両　蚕老七年」、「合志郡鳥鳴匚」があり、天平15年（743）には合志郡井手原の禅房で大般若経が写経されている（奈良東明寺写経）。その後、平安時代になると貞観元年（859）に合志郡の西半を割って山本郡が建郡され、同18年（876）には合志郡擬大領日下部辰吉が奈我神社の河辺で獲た白亀を大宰府から献上している（『三代実録』）。さらに下って、正暦３年（992）には合志荘が玉井名荘と共に安楽寺の荘園として寄進されている（『天満宮託宣記』）。

ところで、本遺跡の周辺地域には、古代山城跡、寺院跡などの奈良、平安時代の遺跡が比較的多くみうけられる（第２図）

鞠智城(3)　白水江の戦（663）の直後に造営されたとみられる鞠智城は、「続日本記」文武２年（698）の修治の記事を初見とし、「三代実録」元慶３年（879）の城内でおこる不吉な事件を最後に史上から消え去る。

1 .上鍋頭遺跡　2 . 東鍋田遺跡　3 . 桜町遺跡　4 . 中村廃寺　5 . 白石遺跡　6 . 方保田東原遺跡　7 . 御宇田成竹遺跡　8 . 笹本遺跡　9 . 高橋神社裏遺跡　10. 津袋大塚遺跡　11. 津袋寺村遺跡　12. 西里敷遺跡　13. 馬の原遺跡　14. 浦大関遺跡　15. 旧伝習農場火葬墓跡　16. 正院遺跡　17. 楠原遺跡　18. 鞠智城跡　19. 十蓮寺廃寺　20. 西寺遺跡　21. 南関遺跡　22. 正観寺磴石群　23. 京福寺蔵骨器出土地　24. 赤星福土・木留遺跡　25. 天城遺跡　26. イシャドン坂遺跡　27. 木槌子遺跡　28. 岩瀬遺跡　29. 梶迫遺跡　30. 四面神社遺跡　31. 岡B遺跡　32. 岡A遺跡　33. 田島廃寺　34. 隈塚遺跡　35. 古閑原遺跡　36村吉遺跡　37. 城山遺跡　38. 飛熊遺跡　39. 北住吉遺跡　40. 伊坂上原遺跡　41. 寺畑遺跡　42. 南住吉遺跡　43. 東駅舟城遺跡　44. 富出分カブト石遺跡　45. 高木原遺跡

●古墳　■布目瓦出土遺跡　◆墨書土器出土遺跡　▲蔵骨器出土遺跡　◇奈良・平安時代の遺跡
赤字は『和名抄』の郡郷の比定地。

第２図　周辺の遺跡分布図

遺跡は本遺跡と菊池平野を挟んだ菊鹿町米原を中心とした丘陵部に位置し、外郭線の延長3.75km、城内の３ヶ所に集中して礎石建物跡があったことが知られている。昭和54年の第５次調査で、百済系単弁軒丸瓦が出土している。

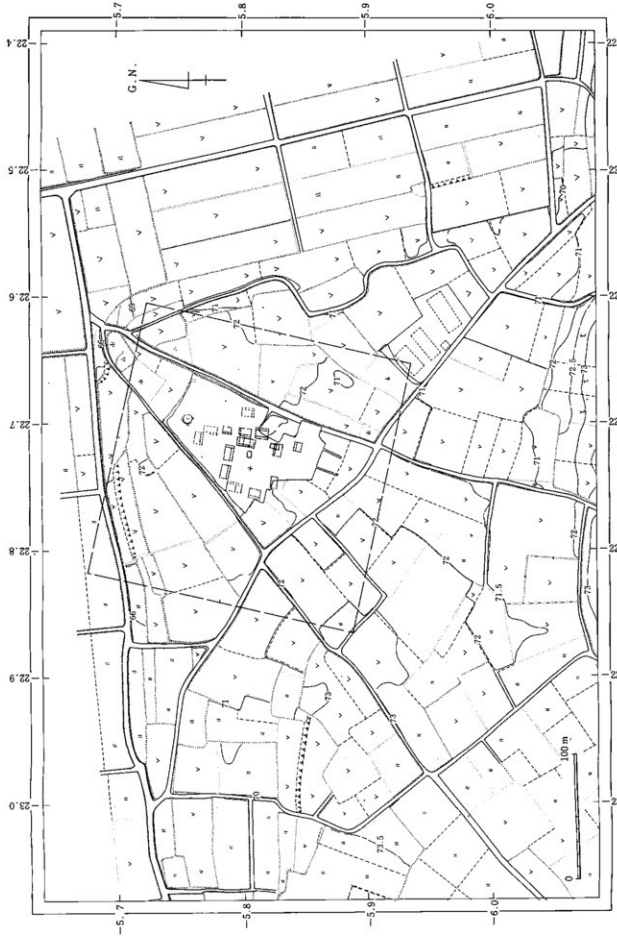
郡衙跡　山鹿・菊池・山本・合志の各郡とも布目瓦の出土や、地名、印鑑社、その他円面硯等の出土によって比定されている。発掘調査されたものは少ないが、菊池郡衙に比定されている西寺遺跡は、東西４町南北1.5町の矩形の土塁線の内に瓦葺き建物跡のあることが発掘によって確認されている[4]。この菊池郡衙については、のちに礎石群がり布目瓦を出土する菊池市正観寺遺跡付近に移転したとする説がある[5]。これと同様なことは合志郡においても想定されており、初期には泗水町北住吉遺跡にあった郡衙が、10世紀末～11世紀初めごろに泗水町田島廃寺付近に移転したと考えられている[6]。なお、山鹿市東鍋田遺跡では、布目瓦や奈良・平安時代の土師器・須恵器が出土するほか、石敷の雨落溝らしき遺構が調査され、付近には礎石らしき石が点在する[7]。山鹿郡の中では偏よった位置にあるが、注意すべき遺跡と考えられる。

寺院跡　本遺跡周辺で最も古い寺院は、菊池市水次の十蓮寺廃寺である[8]。創建の軒先瓦は肥後国分寺系のもので、８世紀後半代に比定される。法起寺式プランをとると想定されている。菊池郡内では、菊池市イシャドン坂遺跡でも焼けた布目瓦の包含地があるが、遺跡の性格は明確でない[9]。

次に古いと見られる寺院跡は、泗水町田島廃寺[10]である。本遺跡とは直線距離で1.6km離れた花房台地の南縁に位置する。法起寺式プランが想定されている。ここから出土する軒先瓦は、単弁八弁軒丸瓦と扁行唐草文軒平瓦で、各々１型式しかなく、10世紀末・11世紀初め頃の平安中期以後に創建され、その瓦葺き堂宇での存続期間は短かかったものと推定されている。この軒先瓦と同笵もしくは同型式とみられる軒先瓦は、熊本市池辺寺・同熊本城二ノ丸で軒平瓦が、同肥後国分僧寺跡で軒丸瓦が出土している。なお、遠く離れた福岡県芦屋町浜口廃寺[11]（筑前国）の軒丸瓦Ⅶ類と軒平瓦Ⅳ類は、拓影をみる限り極めて類似しており、軒丸・軒平瓦がセットで出土していることから同笵品である可能性が強い。田島廃寺の性格を知るためには、今後、肥後国内に限定せず、より広範な瓦の需給関係を把握して、その政治・文化的な背景を究明する必要がある。

このほか、合志郡内には、２ヶ所で軒先瓦が出土する。一つは田島廃寺の北西400mに位置する岡Ｂ遺跡である。地形的に斜面であり、分布が狭いため、瓦窯跡とみられるが、出土する軒丸瓦は田島廃寺のそれとは異なり、植木町正院遺跡や国分尼寺・池辺寺出土の複弁軒丸瓦に似る。もう一つは、七城町内島の四面神社遺跡で、神社の脇が地下げをうけた際に偏行唐草文軒平瓦を含む布目瓦が出土している。この地も斜面上で分布が狭いため瓦窯跡であったかもしれない。

山鹿郡では、平安後期の瓦を出す山鹿市中村廃寺がある。塔心礎付近のみ瓦が出土するため、塔だけ瓦葺きの寺院であったと考えられている[12]。玉東町稲佐廃寺（玉名郡）に類似した軒先瓦が出土し、鬼瓦は同笵



第３図　上鶴頭遺跡周辺地形図（縮尺1/ 3,000）

品とみられるので、両寺間には交流があったことが知られる。

山本郡では、平安中期以降の創建とみられる植木町富応廃寺がある。丘陵の斜面上に塔跡とみられる礎石を配置した基壇が残る[13]。地形的に大きな伽藍は想定できず、中村廃寺同様に塔のみが瓦葺き堂宇であったと考えられる。このほか山本郡では、山本郡衙に想定される植木町正院遺跡で軒丸瓦3種、軒平瓦1種が出土するが、瓦葺き建物が寺院に伴うものか、郡衙に付属するものであるのか断定することができない。また、正院より南東500mの楠原遺跡でも布目瓦が出土するが、斜面上で焼き歪みのある瓦が出土するため、瓦窯跡であろうと思われる。

墨書土器出土地　本遺跡では60点余りの墨書土器が出土した。一つの遺跡でこれだけ多数の墨書土器が出土したのは県内で初めてであるが、周辺にも点々と墨書土器の出土地が知られている。泗水町吉閑原遺跡の竪穴住居跡からは、底外面に「新」「田」と墨書された土師器杯が出土している。菊池市赤星福土遺跡[14]では平安前期の溝状遺構などから、側外面に「上」「田（又は用）」と墨書された土師器が、菊池市十連寺廃寺からは、やはり側外面に「具」と墨書された高台付埦が20枚余り重なった状態で出土している[15]。

また、本遺跡より7.5km西方の台地上に位置する鹿央町駄の原遺跡では30点余りの墨書土器が出土している[16]。この遺跡は、掘立柱建物6棟と、これに先行する縦横に走る4本の柵列と小判形土坑が3基検出されている。掘立柱建物の主軸は東西方向に統一され、2間×5間のプランが多い。墨書銘には、「津」「千大」「屋」「八月」「□舎」があり、この中の「津」は「和名抄」に山鹿郡津村郷があり、「千大」は現在遺跡の近くに千田という地名が残ることから、どちらも地名を表しているものと考えられる。本遺跡と駄の原遺跡は、南北の正位置を意識し、建物の主軸が統一されていること、土器群中に煮沸用甕がほとんどみられないこと、多数の墨書土器が出土していること、いずれも河川からの比高が30mに達する水の便の悪い台地上に位置することなど、共通する点が多い。

蔵骨器出土地　菊池川中流域では、本遺跡例も含めて、現在のところ15遺跡（第2図の図幅外2ヶ所）で蔵骨器の出土が知られている。このうち合志川流域には7ヶ所の出土地があって、県内では蔵骨器が多く出土している地域である。西合志町高木原遺跡の蔵骨器には、「隆平永宝」が副葬されており[17]、また、標高250mの山麓上に位置する旭志村瓢塚の蔵骨器には墓誌銘文は判読できないが、鉄板の墓誌が副葬されていた[18]。

特に、本遺跡より北西500mに位置する梶迫遺跡出土の蔵骨器は、注意する必要がある。身・蓋とも土師器で、身は高台付の短頸壺、蓋には擬宝珠形のつまみがつき、内蓋に使用されたとみられる坏が伴う。蔵骨器は内部に骨粉が残り、そのまわりは木炭で囲んであったという[19]。形態からすると、奈良時代末期頃とみられるが、問題となるのは内蓋とみられる坏に「目代」と墨書されているからである。一般に目代といえば、国司の不赴任もしくは在京のため国司制度が崩壊してゆく過程において発生した留守所（国司の存在しない国衙）において、「不在国司（在京国守）の命をうけてその耳目となって国務の万般を行なうもの」[20]をいう。その留守所の目代は、「言わば国守の私吏であって、不赴任の国守が自己と密接な関係にあるものを私的にその任国に派遣して国務にあたらしめたものである」[20]。墨書銘の目代が、火葬墓の被葬者の性格を示しているものとすれば、官衙的な色彩の濃い本遺跡との関係についても留意する必要があろう。

その他の遺跡　泗水町飛龍遺跡[21]・山鹿市凡導寺跡[22]（第2図では図幅外）では経筒が出土している。前者は青銅製、後者は滑石製である。後者には身の外面に銘文があり、久安元年（1145）に僧慶有の写経を入れたものである。

また、植木町堂付遺跡では、開田工事中に須恵器の壺などと共に伯牙弾琴鏡が採集されている[23]。採集者の話によると、柱穴と思われる穴が等間隔に並んでいたというから、掘立柱建物があったのかもしれない。鏡は踏み返しによって作られたものである。

さらに、菊池市天城遺跡では、昭和49年に発掘調査が行なわれ、奈良～平安時代とみられる掘立柱建物跡1棟と石敷の道路状遺構が検出されている[24]。道路状遺構は条里の方向と一致し、後述する古代官道の車路の推定ルート上にほぼ位置する。

交通路　『延喜式』に記載された駅名によって推定される肥後国北部の西海道は、筑後国境から大水駅（玉名郡大水郷）、江田駅（玉名郡江田郷）、高原駅（山本郡高原郷）、蚕養駅（飽田郡蚕養郷）の諸駅を通過し肥後国府へ至ったものと考えられている[25]。このほかに、国府から豊後国へ向う駅路があるが、木下　良氏は各地に遺る「車路（地）」という地名に着目し、これらが例外なく駅路沿いに位置することから古代官道の遺跡ではないかと考え、肥後においてもその地名や「肥後国誌」に記載された伝説によって託麻国府と鞠智城を連絡する古道の存在を提唱された[26]。しかし、木下氏のあげた「車路（地）」地名のほかに、山鹿市や菊池市にも同様の地名が遺っており、これらを結ぶと大水駅から山鹿郡・菊池郡・合志郡・飽田郡を経て国府へ連絡するルートが復原できる。（第2図参照）。したがって、肥後国の車路も他国の事例と同様に駅路として利用されていたのではないかと考えられ、これが大宰府防衛のための重要な交通路であったがために、通過地の菊池郡に鞠智城が築城されたのではないかと推定される。

8世紀を通じて一応制度として完成されたとみられる駅伝制は、8世紀末から9世紀にかけて全国的に改変、整備が行なわれている。すなわち、延暦～寛平に及ぶ駅の廃止・改置・再興の記事がそれで、この期間は律令体制の実情に即して駅伝制の改変が加えられた時期である[27]。肥後の車路もまた全国的な駅伝制改変の趨勢の中で駅路としての機能を失い、代って最短距離の『延喜式』駅路が新しく成立したのではなかろうか。

註

(1)　古川博恭　「九州・沖縄の地下水」　九州大学出版会　1981

(2)　規工川宏輔　「菊鹿盆地の条里」『熊本県の条里』　熊本県教育委員会　1977

(3)　坂本経堯　「鞠智城址に擬せられる米原遺跡に就て」『地歴研究』10－5　1937。坂本経堯他「伝鞠智城跡」昭和42～44年度埋蔵文化財緊急調査概報　熊本県教育委員会　1968～1970。高谷和生・鶴嶋俊彦「鞠智城跡調査報告書」菊鹿町教育委員会　1981。島津義昭・鶴嶋他「鞠智城跡」　熊本県教育委員会　1983。

(4)　松本雅明　「菊池市西寺の土壁」熊本県文化財調査報告第5集　熊本県教育委員会　1965。西寺遺跡は昭和40年に一部の発掘調査が行なわれている。報告書未刊。

(5)　松本雅明　「正観寺の礎石群」　前掲書(4)所収

(6)　坂本経堯　「住吉日吉神社の木造神猿」　前掲書(4)所収

(7)　松本建郎他　「菊池川流域文化財調査報告書」　熊本県教育委員会　1978。なお、地元の坂本正幸氏からも教示をえた。

(8)　松本雅明　「十連寺の遺跡」　前掲書(4)所収

(9)　坂本経堯　「上代の菊池文化」『菊池文化物語』菊池文化顕彰会　1960

(10)　松本雅明　「田島廃寺調査報告」　泗水町教育委員会　1972

(11)　石松好雄他　「浜口廃寺」　芦屋町教育委員会　1979

(12)　桑原憲彰　「中村廃寺」『九州古瓦図録』　九州歴史資料館　柏書房　1981

(13)　「部報」　第二高校考古学部部報VOL.7 1972

(14)　野田拓治　「赤星狐土・水溜遺跡」　熊本県教育委員会　1977

(15)　富田紘一　「墨書土器」『新・熊本の歴史』2　熊本日日新聞社　1979

(16)　昭和55年に熊本県教育委員会によって発掘調査されているが報告書は未刊である。遺構・遺物については担当者の桑原憲彰・勢田広行氏に教示を得た。

(17)　坂本経堯　前掲書(3)

(18)　坂本経堯　「孤塚の蔵骨器」　前掲書(4)所収

(18) 限　昭志他　「梶道採集の蔵骨器」『チブサン』第15号　1969
(20) 吉村茂樹　「国司制度」　塙選書23　塙書房　1962　P.155
(21) 「泗水町史」　泗水町　1965
(22) 原口長之　「熊本県山鹿市大字鹿生凡導寺蔵の経筒について」『石人』3号　1960
(23) 古財誠也氏の教示による。
(24) 島津義昭　「赤星天城遺跡」『文化財情報』VOL.1　熊本県文化財保護委員会　1974
(25) 木下　良　「肥後国」　藤岡謙二郎編『古代日本の交通路』Ⅳ　大明堂　1979
(26) 木下　良　「日本古代官道の復原的研究に関する諸問題」『人文研究』第70集　神奈川大学　1978
(27) 田名網　宏　「古代の交通」　吉川弘文館　1969

追　記

第2図の図幅外であるが、菊池郡旭志村大字麓の湯舟原遺跡において石製の丸鞆が1個採集されている。遺構については不明だが、県下での銙帯の出土は本例で4例目となる。(斎谷和生「寺尾遺跡出土の青銅製帯金具」『肥後考古』第2号　肥後考古学会1982)

第Ⅱ章　調査に至る経緯

1．調査に至るまで

県文化課では、昭和56年10月26日付で県農政部耕地第一課へ、昭和57年度実施予定の公共事業計画の内、文化財調査を必要とするものについての照会を求めた。その結果、同年10月30日付で同課より、県内34地区の圃場整備予定計画のある旨、回答があった。そこで、県文化課では34地区についての文化財チェックを行った所、七城町十三部地区を含めて数ヶ所の計画予定地内に埋蔵文化財（散布地及び包含地）がある事が確認された。

七城町教育委員会では昭和55年の７～８月にかけて、同町の埋蔵文化財分布の調査を県立菊池高校教諭桑原憲彰氏に依頼して行った。これは同町の今後の公共事業に伴う開発に対して、事前に埋蔵文化財の有無を知るためである。この時に作製された報告書の中に今回の調査対象地が含まれている。桑原氏は同書に「若干の須恵、土師片の散布が見られる。更には試掘の必要あり」と報告されている。

県文化課では上記に基づき、七城町十三部地区に対しては、事前の試掘調査、その結果によっては本調査の必要がある事を県農政部耕地第一課へ連絡する。昭和57年５月、県文化課職員が圃場整備予定計画地20万㎡を踏査し、新たに同町大字亀尾字北十三部の一部に土師器の散布地を発見する。そこで上記二ヶ所、約５万㎡について試掘を行なう事を県農政部耕地第一課、七城町教育委員会、町農業開発課、町土地改良区事務所へ連絡する。町と県文化課では、地元地権者に対し、文化財調査の必要性を説明すると共に協力をお願いする。地権者及び圃場整備世話役の方々も快くこれに応じていただき、係職員一同大いに感謝する。

昭和57年５月下旬には、いよいよ調査計画に基づき現地の試掘調査に入ったが、調査地区が一部メロン出荷最盛期と時期を同じくしたため、再度７月下旬より一部試掘、続いて本調査に入った。

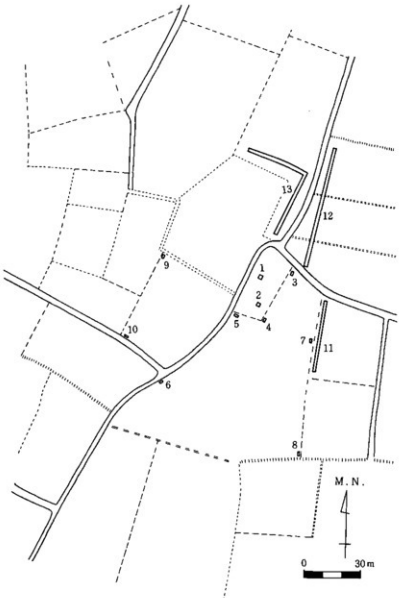
2．十三部地区の試掘

昭和57年度十三部地区県営圃場整備計画地の面積は20万㎡におよび、この広大な土地内における遺跡の分布の状態は定かでなかった。そこで遺跡の広がり、分布の疎密の状態を知り、調査の効率を高めるために本格的調査に先立って試掘をした。

この試掘調査対象地は、昭和55年７月～８月にかけて県立菊池高校教諭桑原憲彰氏が町の依頼を受けて踏査された際、「若干の須恵、土師片の散布が見られる」と指摘された場所と、昭和57年５月、県文化課職員の踏査によって新たに発見された散布地の二ヶ所である。この台地は県下における開田事業の先進地として知られる所で、試掘の際の聞取りでも圃場整備計画地内のほとんどが戦前、戦後開発の波を受けている事が判明した。現在、同所一帯はメロン畑や飼料用畑として使用されているが、以前はそれらの多くが桑畑か山であった場所である。そこで、町農業開発課、同教育委員会と打合せた結果、別図（第4.5図）の地点を撰んで試掘を実施した。試掘溝は遺物散布地の全域を覆う形で設定したが、場所によっては作物の植え付けのため、その支障の少ない場所に設定せざるを得なかった。尚、試掘はメロン出荷最盛期とぶつかったため、一部は出荷後のメロンハウス撤去後に行なった。また試掘にあたり一部バックフォーを使用したが、大部分は手掘りによった。試掘地点は以下の通りである。

七城町大字亀尾字北十三部地区の約1万㎡には計13個所の試掘溝を入れた。各試掘溝の発掘の経過と土層観察の結果は次の通りである。

５月20日本日より試掘に入る。まず土師小片が散布している空地を中心に試掘溝を２ヶ所、その周辺の



第4図　七城町大字亀尾字北十三部地区試掘溝配置図

番号	試掘溝	規　模	備　　考	番号	試掘溝	規　模	備　　考
1	第1試掘溝	2m×2m	出土遺物・遺構なし	8	第8試掘溝	2m×1m	出土遺物・遺構なし
2	第2試掘溝	2m×2m	出土遺物・遺構なし	9	第9試掘構	2m×1m	出土遺物・遺構なし
3	第3試掘溝	2m×1m	出土遺物・遺構なし	10	第10試掘溝	2m×1m	出土遺物・遺構なし
4	第4試掘溝	2m×1m	出土遺物・遺構なし	11	第11試掘溝	38m×2m	出土遺物・遺構なし
5	第5試掘溝	2m×1m	出土遺物・遺構なし	12	第12試掘溝	64m×2m	出土遺物・遺構なし
6	第6試掘溝	2m×1m	出土遺構・遺構なし	13	第13試掘溝	65m×2m	出土遺物・遺構なし
7	第7試掘溝	2m×1m	出土遺物・遺構なし				

第1表　七城町大字亀尾字北十三部地区試掘溝一覧表

第５図　七城町大字亀尾字上鶴頭地区試掘溝配置図

㉙以下は第２次試掘である。

番号	試掘溝名	規　模	番号	試掘溝名	規　模	番号	試掘溝名	規　模	番号	試掘溝名	規　模
1	第１試掘溝	6m×1.5m	16	第16試掘溝	3　m×1　m	㉛	第31試掘溝	2.5m×1.5m	㊻	第46試掘溝	2 m×1　m
2	第２試掘溝	10m×1.5m	17	第17試掘溝	3 m×1　m	㉜	第32試掘溝	2　m×1　m	㊼	第47試掘溝	2 m×1　m
3	第３試掘溝	10m×1.5m	18	第18試掘溝	3　m×1　m	㉝	第33試掘溝	2　m×1　m	㊽	第48試掘溝	2 m×1　m
4	第４試掘溝	4m×1.5m	19	第19試掘溝	3　m×1　m	㉞	第34試掘溝	2　m×1　m	㊾	第49試掘溝	3 m×1　m
5	第５試掘溝	5m×1.5m	⑳	第20試掘溝	3　m×1　m	㉟	第35試掘溝	2　m×1　m	㊿	第50試掘溝	4 m×1　m
6	第６試掘溝	5m×1.5m	㉑	第21試掘溝	2　m×1　m	㊱	第36試掘溝	3　m×1.3m	(51)	第51試掘溝	4 m×1　m
7	第７試掘溝	5m×1.5m	㉒	第22試掘溝	4　m×1　m	㊲	第37試掘溝	3　m×1.3m	(52)	第52試掘溝	4 m×1　m
8	第８試掘溝	8m×1　m	㉓	第23試掘溝	3　m×1　m	㊳	第38試掘溝	3.4m×1.3m	(53)	第53試掘溝	4 m×1　m
9	第９試掘溝	10m×1　m	㉔	第24試掘溝	4　m×1　m	㊴	第39試掘溝	3.5m×1.3m	(54)	第54試掘溝	4 m×1.5m
10	第10試掘溝	1m×1　m	㉕	第25試掘溝	4　m×1　m	㊵	第40試掘溝	3　m×1.3m	(55)	第55試掘溝	4 m×2　m
11	第11試掘溝	10m×1　m	㉖	第26試掘溝	4　m×1　m	㊶	第41試掘溝	2　m×1　m	(56)	第56試掘溝	2 m×2　m
12	第12試掘溝	7m×1　m	㉗	第27試掘溝	4　m×1　m	㊷	第42試掘溝	2　m×1　m	(57)	第57試掘溝	4 m×1　m
13	第13試掘溝	5m×1　m	㉘	第28試掘溝	3　m×1　m	㊸	第43試掘溝	2　m×1　m	(58)	第58試掘溝	4 m×1　m
14	第14試掘溝	3m×1　m	㉙	第29試掘溝	2　m×1　m	㊹	第44試掘溝	2　m×1　m	(59)	第59試掘溝	3 m×1.5m
15	第15試掘溝	3m×1　m	㉚	第30試掘溝	2.5m×1.5m	㊺	第45試掘溝	2　m×1　m			

第２表　七城町大字亀尾字上鶴頭地区試掘溝一覧表

飼料畑隅に６ヶ所、設定試掘する。空地のNo.１、２試掘溝では、表土下に層厚20～30cmのやわらかい茶褐色土層がある。これはビニールシート等が混入する旧耕作土である。以前この付近は山であったということなので、開墾後の耕作土と思われる。この下は固くしまった茶褐色土層、明るく固くしまった茶色土層、ローム層の順になる。この様にして土層観察の結果に判断を加えながら順次散布地周辺部の畑に試掘溝を入れ、調査３日目にはバックフォーを導入し、新たに周辺部４ヶ所に試掘溝を入れた。これで北十三部一帯の散布地のほぼ全域をカバーする形にした。この試掘には４日間を要したが、いずれの試掘溝からも遺物、遺構は発見できず、この地点の調査を打ち切る。この一帯は開墾の際に相当上面を削ったものと思われる。

５月26日本日より宇上鶴頭一帯の散布地の試掘を行なう。面積は約４万㎡である。この付近はメロンハウスが多く建ち並び、空地部分が少なく試掘溝設定に苦労する。飼料用畑に３ヶ所の試掘溝を入れる。No.１、２試掘溝とも表土（耕作土）下は層厚10～20cmのやわらかい茶褐色土層である。順に固くしまった明るい茶色土層、下はローム層である。遺構、遺物は検出されない。地元で土採りを行なった畑の西側に設定したNo.３試掘溝からは、固くしまった明るい茶色土層に切り込む形のピット４個が検出された。試掘調査５日目でやっと探りあてた遺構である。

翌27日より更に周辺部の畑に順次試堀溝を設定し、雨で作業が中断した４日間を除いて、６月８日まで計19ヶ所の試掘溝を掘った。No.４、５、６、９、11、12、13、14、15、16、17、19の各試掘溝は、いずれも表土（現耕作土）下は層厚10～30cmのやわらかい茶褐色土層である。No.７試掘溝の表土下は明るく固くしまった茶色土層で、No.８、10試掘溝の表土下はいずれもローム層であった。

遺物及び遺構は上記No.３の他は、No.５、６、９、13の各試掘溝内の表土層及びやわらかい茶褐色土層より数点の土器片が検出されたにすぎない。付近一帯の畑はメロン出荷最盛期で、キンショウ、コサック、パパイヤメロン等のあま～い香りがたちこめる中での作業である。この結果、試掘箇所もおのずから限定され、約４万㎡の内$\frac{1}{3}$しか調査できず、残りはメロンハウス撤去後に行なう事にした。以上の試掘結果及び、聞き取り等から判断するに、この付近一帯は十数年前まで桑畑で、その後メロン畑へと変っている。判っているだけでも戦後２度の大きな削平を含む開墾が行なわれている。表土下のやわらかい茶褐色土層は、この時の人為的な手が加わった土で、旧耕作土である。この土層内には桑の根、ビニールシート等が混入していた。また、これまで出土した遺物及び、遺構からNo.３試掘溝付近に平安時代頃の集落跡が予想された。

以上の様に調査は一旦中断したが、７月23日より再び残り部分の試掘調査に入る。この間の約１ヶ月間は、下益城郡豊野村の試掘調査、七城町十三部地区本調査のための準備等で忙しい毎日であった。

26日、本日より、去る６月の試掘の際に掘り残した畑の試掘である。午前中はプレハブ小屋の回りの雑草を刈る。約１ヶ月調査を中断した間に1m程も草が伸びている。午後より近世の御蔵払道路の西側畑に４ヶ所の試掘溝を入れる。30日までの間に、計40ヶ所の試掘溝を付近の畑に入れたが、土層観察の結果は以下のとおりである。

前記道路西側の畑約4,000㎡の内、南側部分の畑は段落ちである。約20～30cmの表土層の下は固くしまった明るい茶色土層で、既にこの層の上面まで削平されていた。また部分的に表土下に客土層がある。北側部分の畑は、表土下に層厚10～30cmの黒色土層があり、この下に固くしまった茶褐色土層がある。現代の攪乱は黒色土層内まで及んでいる。遺物は表土層でしか検出されなかった。今回全面発掘をした畑の東側（道路を境にして東側の畑）約7,000㎡は、いずれも削平及び現代の耕作が深く、表土（耕作土）下は固くしまった明るい茶色土層、またはローム層であった。プレハブ小屋の南側畑（竹迫凹道を境に南側）約3,000㎡に設定した試掘溝は道路に近い程、表土下に層厚10～30cmのやわらかい茶褐色土層がある。道路より離れるにしたがってこの層が無くなり、固くしまった明るい茶色土層となる。プレハブ小屋の道路南側は南から北にかけて緩傾斜地となっている所から、南側部分は相当削平されたものと思われる。この付近からは遺物、遺構は検出

されなかった。第一次試掘調査の際、遺構が検出されたNo.3試掘溝の北側畑は段上りの畑で、踏査の時も多量の土器片が表採された畑である。この畑は北側より南に穏やかに傾斜し、畑を南北に区切る様に茶園が東西に走っている。北側部分の畑は表土下に層厚10～20cmの黒色土層が一部にあるが、大部分は表土下は固くしまった茶褐色土層である。南側畑も北側とほぼ同じ様な土層状態であった。なお、遺物は表土層及び黒色土層上面からしか検出されなかった。

以上の様に、5月26日～7月30日までの間、二期に分けておこなった試掘調査は延べ実日数15日を要した。この間、各試掘溝の土層を観察したが、その結果、遺構及び遺物の存在が予想される地点は、No.3試掘溝付近の畑約6,000m²ということになった。そこで本調査にあたり、上記畑周辺を重点的に調査することにした。

第Ⅲ章　調　　査

1．調査の経過

上鶴頭遺跡の試掘の状況および結果は前に述べたとおりで、その結果を参考にして本調査に入った。調査日誌等から、重要な調査経過を略記すれば、次のとおりである。

8月2日　本日よりいよいよ本調査をはじめる。試掘調査の所見を参考にして重機（バックフォーとブルドーザー）による表土剝ぎを行なう。

8月4日　メロン畑一帯の表土が漸次めくれていく。本日、重要な発見があった。町道（御蔵払道）のすぐ東側で表土剝ぎ中、表土直下で火葬骨の入った須恵器の蔵骨器が発見された。蔵骨器はすでに耕作等で破壊されており、底部付近しか残っていなかった。

8月5日　畑を南北に分断する茶園一帯の表土剝ぎ中、昨日に引き続き2基目の蔵骨器が発見される。蔵骨器は上部が壊れていた程度である。

8月9日　重機による表土剝ぎ最後の日である。本日までに蔵骨器2基、無数のピットが発見されている。この一帯からは、踏査の際に土師器や須恵器の破片が多く表採されていたが、これまで桑畑、メロン畑として長年耕作されて土層の攪乱がはげしく、また、開墾の際に削平されるなどして、遺物包含層は失なわれていた。作業員は重機導入日より、ジョレンで精査作業である。

8月10日　磁石による南北線を基本に10m四方のグリッドを組むと共に、各グリッドごとの精査を行なう。

8月16日　先々週出土した2基の蔵骨器の実測をする。蔵骨器の回りには、炭化した木炭が黒褐色土と混り合う形でしきつめてあった。

8月19日　前日まで取りあげた蔵骨器内の人骨の処理について、町教育委員会、土地所有者、板井部落の圃場整備世話役の方々と協議する。人骨は遠慶寺に再埋葬することで話がつく。

8月23日　表土剝ぎ部分が拡く、毎日作業員はジョレンでの精査が大変である。西側に竈（かまど）を持つ住居跡が見つかる。プランは長方形である。

8月24日　本日より文化財指導者研修会である。午前中は七城町教育委員会で講義、午後は遺跡周辺の踏査及び遺跡の説明を行なう。25日は午前中試掘の設定、測量等の実技である。研修には、県内より約40名の文化財関係者が参加している。午後より昨日新たに見つかった蔵骨器を発掘、実測する。土坑の中央部に須恵器の壺　その肩部分の東、西、南の三方に土師器の坏が各1枚ずつ並べてあった。土坑内は親指から小指大の小石が入っている。この小石の間から1枚の隆平永宝が発見される。また、約1m程度離れた場所に同じ作りの2基の土坑が見つかる。土坑内はいずれも小石が副と入っており、1方の土坑より3枚の隆平永宝が発見される。（後に壺内を調べた結果、骨は入っておらず、土坑の製作、距離等から、この三土坑は1セットの物で　地鎮具を納めた土坑と見られる。）この作業は、26日までかかる。

8月30日　精査の際に見つかった住居跡の発掘作業をする。住居跡の東側上面には焼土層があり、埋土中より土師器の破片と土錘が出土、墨書土器数点が混っている。

8月は本当に雨が多かった。毎日といっていい程、雷を伴う夕立があり、遺跡周辺にも相当の雷が落ち、その度に肝を冷やした。また、作業はその度に中断し、遺跡内のジョレンによる精査はその都度やり直しであった。

9月1日　先月末から発掘中の住居跡の実測をする。住居跡内の柱穴は計7個、土質は、砂質の黒褐色土である。住居跡内から出た遺物は、全て埋土中からである。なお、これまで精査の途中で遺跡内より多くの

ピットが見つかったが、明らかに後世の攪乱（イモ穴等）以外のものの中に、建物に関係するピットが見つかる。

9月2日　地元より圃場整備工事の関係上、発掘区の西側部分の早期開け渡しを要望されていたので、ピット等の発掘をこの地区から始める。また、発掘と平行して、平板測量も始める。

9月8日　本日までのピット掘りで、廂を持つ3間×5間の建物が3軒みつかる。ピットの中には、約20㎝程の柱痕跡があるものがある。

9月21日　町土地改良区の緒方氏、町教育委員会松田氏、県菊池事務所青山氏、圃場整備を請け負う荒木組の関係者が現場に来訪し、進捗状況等についての話をする。

9月27日　地元で塚と呼ぶ地点の発掘をする。表土剥ぎの際に見つかったもので、表土直下に約8m四方の方形の黒色土があり、その中央部に後世のものと見られる土がほぼ円形の形で入っている。なお、今日までに9軒分の建物柱穴が見つかっている。

10月2日　先月来の調査で思いもしなかった建物跡が発見され、また、遺跡が南側に伸びると思われるので、その部分の表土剥ぎを行なう旨、係会議で説明報告する。建物の配置、規模から想定して、官衙(郡家)と思われる。

10月4日　肥後考古学会会長三島格氏来訪、調査方法等についての教示を受ける。

10月5日　本日より建物跡の囲りに貫板打ちをする。午後、本庁で農政部耕地課(久原氏)、県菊池事務所長（青山氏)、文化課（横尾、松本、橋本）とで、本日までの経過説明及び今後の対応について話し合う。その結果、調査期日の延長等については、南側の表土剥ぎの結果をみてから再打ち合せときまる。

10月6日　遺跡の南側部分約2,000㎡の表土剥ぎを重機（ブルドーザー、バックフォー）を導入して行なう。

10月7日　重機導入2日目である。新たに3軒分のピット群が見つかる。午後より、熊本大学工藤敬一教授、甲元真之助教授来訪され、遺跡の性格等についての教示を受ける。隈主幹同席する。

10月9日　重機導入して4日目である。今回新たに3軒の建物跡が発見されたが、プレハブ小屋の前まで掘った限りでは、これ以上の発見は望み薄である。

10月13日　本日までの調査で、約15軒分の建物跡が発見される。作業はこれらの建物の未検出柱穴の捜査を行なう。17：00過ぎに地元の地権者約30名が実情視察に来訪。

10月15日　七城現場で農政部耕地課（加納氏)、県菊池事務所（猪野氏、青山氏)、町教育委員会（松田氏)、文化課（横尾、松本、橋本）とで、今回の表土剥ぎの結果について話し合う。その結果調査を11月末日まで延長することにきまる。

10月20日　九州芸術工科大学沢村仁教授、熊本大学甲元助教授、肥後考古学会三島会長の三氏を招き、遺跡の性格、調査方法等についての教示を受ける。

10月21日　本日より建物柱穴の実測に入る。　建物は検出順にＳＢ01、02、03……と呼び、番号順に調査する。なお　平板測量も同時に行なう。

10月22日　佐賀大学日野尚志教授を招き、歴史地理の分野からの教示を受ける。午後、熊本大学工藤教授、松本寿三郎助教授、神戸大学戸田芳実教授来訪。

10月27日　調査は、柱穴の検出と半截作業である。また、これと平行して各建物のピットの実測を行なう。午後、熊本大学工藤教授、甲元助教授来訪、両先生には、調査中度度遺跡に足を運んでいただき、その都度教示を受ける。調査員一同大いに感謝する。

11月1日　月が変り、いよいよ調査も詰めの段階に入る。調査は建物の未検出柱穴の捜査と平行して、柱穴の平面実測→写真撮影→断面半截→断面実測→完掘→実測の順で行なう。

11月5日　調査中、朝起きて一番気になるのが天気である。毎晩テレビの天気予報を見てから寝るのが日課になってしまっている。今日も朝から曇空、今にも泣き出しそうな曇行きである。降らない事を念じて現場に行く。調査開始1時間で、本格的な雨が降り出す。このため、作業は中止である。この時期の雨は本当に憎らしい。

11月16日　今月はどういう訳か雨が多い。それも曇のち雨だから始末が悪い。調査はその都度中断し、なかなか思う様に進まず、精神的に焦ってくる。午前中に植木町文化財専門委員の一行が来訪。

11月20日　いよいよ調査も大詰めである。文化課の松本、高谷両技師、国学院大学助手池田氏が手伝いに来てくれる。この時期の応援は本当に助かる。日一日と調査面積が狭まり、調査完了する建物が増えてきた。

11月25日　本日より新たに2人の応援が来る。文化課の田尻女史、西住君である。調査員一同最後の気力を振り絞って実測調査をする。調査期日も、後僅かしかない。

11月27日　新たに北東の隅で16軒目の建物跡が発見される。しかし、町道及び土採り等で残存部分は少ない。

昭和57年11月30日　本調査もいよいよ本日で終了である。午前中に最後のＳＢ16の調査が終了する。午後より後片付けである。遺物などの調査資料、調査資材については12月1日、2日の両日に分散して撤収する。

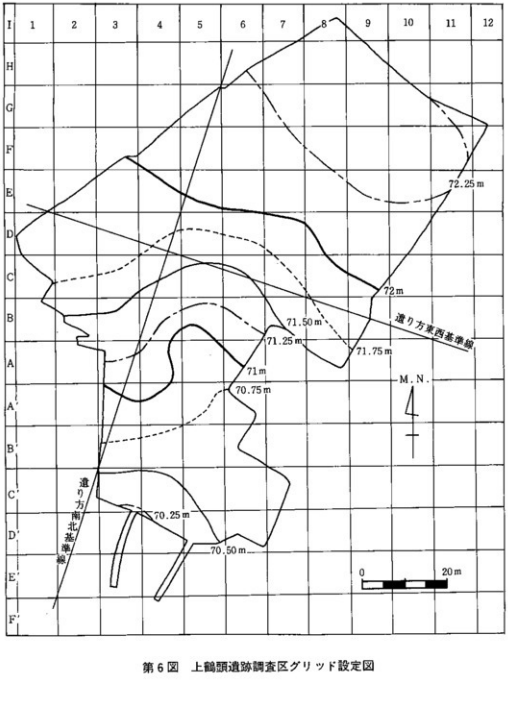
12月3日　午前中に有限会社丸美スカイフォート事業部の好意で、気球による遺跡の写真撮影を行なう。同社には10月にも1度お願いしており、度重なる好意に感謝する。

本遺跡（上鶴頭遺跡）調査にあたり、広域な圃場整備計画予定地の調査に対応して、遺跡の拡がり等を確認するために、年次当初延べ15日間の試掘を実施した。8月に入り、遺構の存在が予想される地区について発掘に着手した。この結果、火葬骨が入った蔵骨器、地鎮に関係すると思われる遺構、次いで住居跡が発見された。9月に入り、表土剝ぎ中発見された多数のピット群の中に、建物遺構と考えられる物が出てきた。更には、地元で塚と呼んでいた場所より、方形の周溝遺構も発見された。10月には、建物遺構が南側の末剝ぎ地区まで伸びる事が予想されたので調査範囲を拡げた。その結果、15軒の建物跡が発見された。規模、構造からして官衙（郡家）と推定される。11月の調査終了直近になって、新たに1軒の建物が発見された。この結果、本調査では16軒の建物が発見されたが、調査終了後、報告書作成のために図面の整理中新たに17軒目の建物が発見された。ＳＢ05、06付近には意味不明のピットが多数あるが、この中よりＳＢ05と重複する形で発見されたものである。

8月及び季節外れの長雨が続いた10月～11月は、しばしば発掘作業を困難にした。特に、8月の雷雨や米の収獲時の長雨で、作業員の人達の日程遣り繰りがつかずに作業を中断する事も少なくなかった。5月20日に試掘に入ってより、12月3日現地より撤収するまで延べ113日間、時に雨に祷いされての調査であった。

2．調査区の設定と名称

調査地約6,000㎡の表土剝ぎ後、磁石による南北線を基本として割りつけていった。10m×10mをグリットの単位として南北をＡ～Ｉ、東西を1～12。しかし、調査中に遺構の範囲が広がったため、新たに約2,000㎡の表土を剝ぎ、南にA′～F′分追加した。その結果、全体で99ヶ所のグリットを設定した。（第6図）

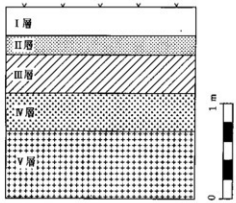


第6図　上鶴頭遺跡調査区グリッド設定図

3．遺跡の層位、層序

調査区一帯は長年耕作された畑である。更に、戦前、戦後の開墾及び削平等の開発の波を受けており、調査区面積の大部分が地山の面まで削平、または耕作されていた。そこで試掘の結果を元に、調査区の層位、層序の概略図をつくり、第7図に示す。

Ⅰ層は耕作土で約0.1～0.3m前後の厚さである。Ⅱ層は黒色土で約0.1～0.2mの厚さで粒の小さい粘性の少ない土である。この層は調査区内の一部にしかなく、大部分はすでに削平または耕土化されていた。なお、土器片はこの層の上面で検出されている。Ⅲ層は固く締った茶褐色土層で約0.2～0.4mの厚さである。調査



第7図　上鶴頭遺跡標準土層断面図

区内の大部分がI層の下はこの層であった。南側部分の畑は、ほとんどIII層の中まで耕作している状態であった。IV層は明るい茶色土層で粘性も強く、約0.2−0.4mの厚さである。V層はローム層である。

各層の出土遺物のうち、I層では縄文、歴史時代にいたる各時代の土器が細片となって出土し、これらの土器片は摩滅が著しい。I層は現代の土層である。II層は平安期に比定される土師器、須恵器がこの層の上面で出土している。

上鶴頭遺跡出土の柱穴群、方形周溝状、火葬墳墓、住居跡などの遺構は、III、IV層において確認され、方形周溝状遺構や柱穴の深く掘り込まれたものではV層にまで達している。

第Ⅳ章　検出遺構

本調査で検出された遺構には、掘立柱建物跡17棟、竪穴住居跡１棟、火葬墳墓２基、地鎮に係る土坑３基、方形周溝状遺構１基がある。いずれも平安時代前期の遺構で、この他これと同時代とみられるが建物に直接関係しないピット群や土坑がある。縄文時代の遺物がいくらか採集されているが、遺構については検出できなかった。発掘区全体を縦横に走る複数の溝は、いずれも近世以降の畦畔と関係するもので、これに絡むようにして掘られている直径1.0～1.5m前後の円形土坑は、サツマイモを貯蔵するためのイモ穴である。

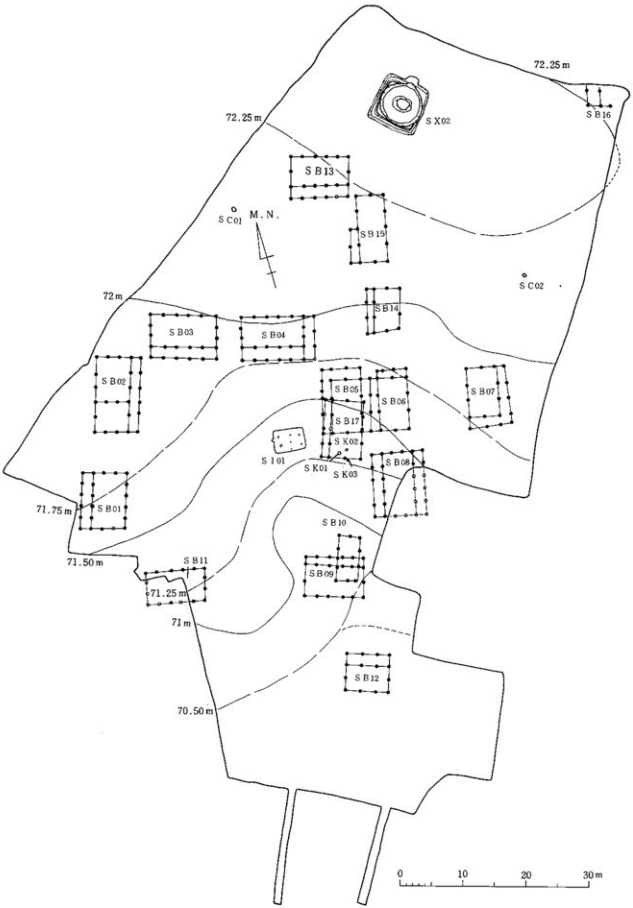
１．掘立柱建物跡

本遺跡の中心的遺構となっている掘立柱建物跡は、合計17棟が検出されている。これらはその占地の様相によって、約30m（100尺＝10丈）四方の広場を囲むようにして建つ、ＳＢ01、02、03、04、05、06、08、09、10、11、17の11棟（Ａ群）と、その背後に建つＳＢ07、12、13、14、15の５棟（Ｂ群）、さらに発掘区の北端に建つＳＢ16（Ｃ群）に分けられる。基壇・雨落ち・壁下地覆などの地表面の工作物は検出されなかったが、ＳＢ05・06付近を除くと、柱穴のあり方が単純で、しかも柱痕跡を残すものが多かったため、柱穴の組合せは容易であった。建物はＳＢ10・11を除いて一面～二面の廂を有する。なお、倉庫と考えられるような総柱の建物は全く検出されていない。建物の柱穴は、いずれの場合も平面形が円形ないし、やや不整な円形を呈しているが、柱が抜取られた建物においては、その平面形に突出部がみられた。柱穴の大きさは、直径40～80cmで、概してＡ群の建物には柱穴が大型で、柱穴の深さもこれに比例して深いものが多い。ただ、ほとんどの建物に共通して、身舎の四隅の柱穴については、他の柱穴よりも深く掘られていた。廂の柱穴は身舎に較べて小型で、深さも格段に浅い。柱穴は、黒褐色土・暗褐色土・ロームによって埋められており、これらが互層となっている例が多い。柱痕跡は直径18～24cm（６寸～８寸）の円形で、Ａ群の建物に柱穴と同様に大型のものが多い。

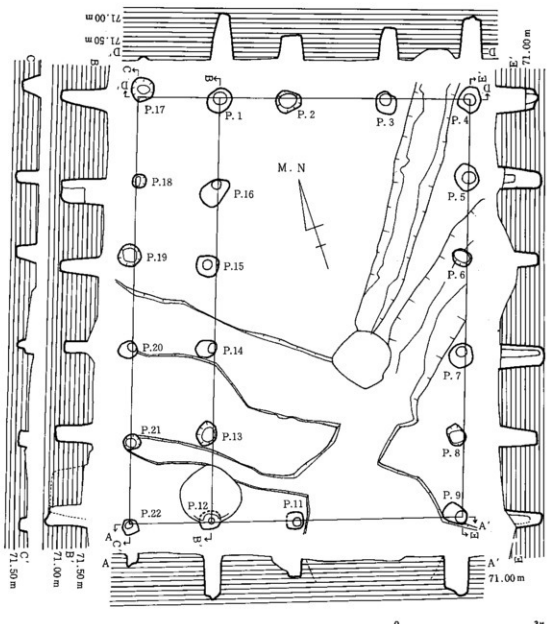
旧地表面は地拵しや耕作によって失われてはいるが、長い間畑地として利用されても水田には利用されていない。そのため、発掘区の東南部の土採取場を除けば、遺跡は大きな地形的改変はうけていないと考えられる。耕作土を除去した後の遺構検出面（地山）での微地形は、ＳＢ03・04付近から南へゆるやかに傾斜しはじめ、最南に位置するＳＢ12付近からまた平坦面となっており（高度差1.25m、傾斜角約１度）、さらにこ

建物跡	桁　　行	梁　　行	廂	棟方向	備　　考
SB01	5間 8.95 m(30 尺)	4間 7.1 m (24 尺)	西　面	N20° E	
SB02	5間 12.00 m(40 尺)	4間 7.1 m (24 尺)	東　面	N20° E	南側柱より２間目に間仕切柱あり
SB03	5間 10.5 m(35 尺)	4間 6.8 m (23 尺)	南　面	E20° S	柱抜取穴あり
SB04	6間 11.55 m(38.5尺)	4間 6.8 m (23 尺)	南・東面	E16° S	
SB05	4間 10.2 m(34 尺)	3間 6.3 m (21 尺)	西・北面	N16.5° E	柱抜取穴あり
SB06	4間 9.8 m(32.7尺)	2間 4.8 m (16 尺)	無　し	N14° E	柱抜取穴あり
SB07	4間 9.6 m(32 尺)	3間 6.6 m (22 尺)	東・南面	N14° E	作業用柱穴あり。柱抜取穴あり。
SB08	5間 10.1 m(33.7尺)	5間 8.25m (27.5尺)	東・西面	N14° E	東南部は土取りによって削平される。
SB09	5間 9.6 m(32 尺)	3間 6.3 m (21 尺)	北　面	N20° E	柱抜取穴あり
SB10	4間 7.2 m(24 尺)	2間 3.6 m (12 尺)	無　し	N21° E	ＳＢ09の建替
SB11	5間 9.6 m(32 尺)	3間 5.1 m (17 尺)	無　し	N12° S	一部発堀区外
SB12	3間 6.9 m(23 尺)	3間 6.0 m (20 尺)	北　面	N18.5° S	
SB13	5間 9.3 m(31 尺)	3間 6.6 m (22 尺)	南　面	E15.5° S	
SB14	3間 6.9 m(23 尺)	3間 5.4 m (18 尺)	西　面	N15.5° E	
SB15	5間 10.5 m(35 尺)	3間 6.0 m (20 尺)	西　面	N13° E	
SB16			西　面	N13° E	大部分発堀区外
SB17	4間 9.0 m(30 尺)	3間 6.15m (20.5尺)	西　面	N20.5° E	ＳＢ05－06の建替

第３表　掘立柱建物跡の規模と棟方向



第 8 図　上鶴頭遺跡遺構配置図　（縮尺1/ 600）

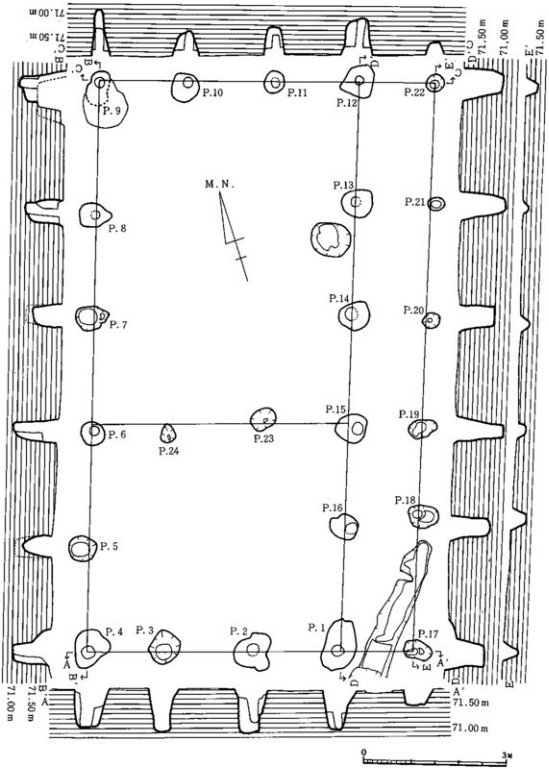


第９図　ＳＢ01建物実測図（縮尺1/80）

の傾斜面には、ＳＢ12付近からＳＢ04の前面に達する谷状の徴地形となっている。この徴地形とＡ群の建物群との関係をみると、谷部は広場として利用され、その周囲の高所に建物が占地している。すなわち、建物の占地については、こうした徴地形を考慮に入れて行っていたことが窺い知られるのである。因みに、多量の墨書土器が包含されていた黒色土層は、ＳＩ01の竪穴住居跡周辺において検出されている。この包含層が耕作による削平をまぬがれたのは、この付近がちょうど谷部にあたるためであろうと考えられる。

第１号掘立柱建物跡（ＳＢ01）（第９図、図版２）

広場の西側に建つ桁行５間＝8.95m（約30尺）、梁行４間＝7.10m(約24尺)の南北棟西面廂付建物で、桁行行方向は、N20°Eである。直径35～55cmの円形の柱穴には、直径25cm前後の柱痕跡が認められた。身舎の東・西側柱列の柱穴は深さが100cmほどあるのに比較して、北・南妻梁行の柱穴の深さは50～70cmと浅く、廂の柱穴では、40cm前後とさらに浅くなっている。柱間寸法は、桁行・梁行とも６尺等間の建物跡とみられる。身

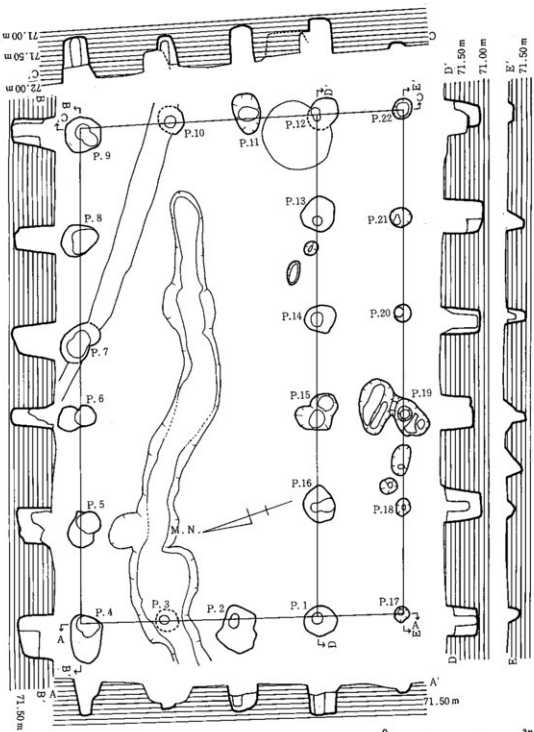


第10図　ＳＢ02建物実測図（縮尺1/80）

舎の両側柱列は、北に6.3m離れて建つＳＢ02の両側柱列と柱筋を揃えている。身舎の両側柱列は、北に6.3m離れて建つＳＢ02の両側柱列と柱筋を揃えている。

第２号掘立柱建物跡（ＳＢ02）（第10図、図版２）

ＳＢ01と同様に広場の西側に建つ建物跡である。桁行５間＝12.00m（40尺）、梁行４間＝7.10m（約24尺）の南北棟東面廂付建物で、南側柱より２間目に間仕切の柱がある。桁行方向はN20°Eである。身舎の柱穴は直

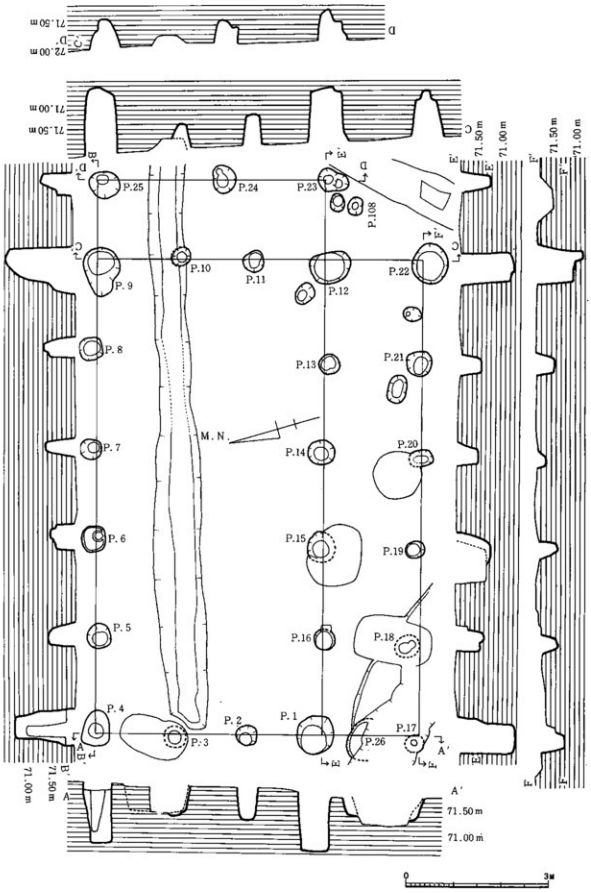


— 第11図　ＳＢ03建物実測図（縮尺1/80）

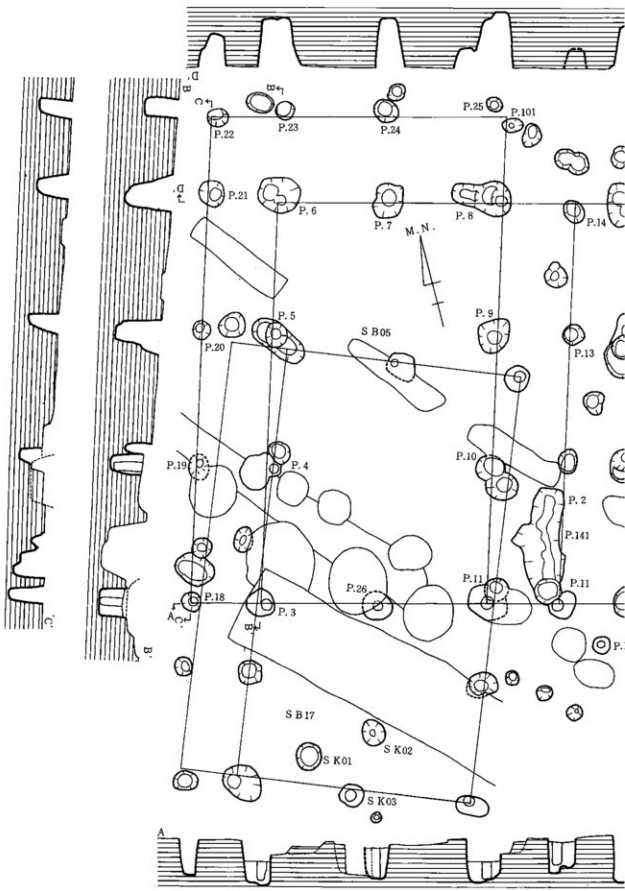
径50～100cmで深さが100cmほどを測り、廂の柱穴は直径35～65cm、深さ10～30cmを測る。柱間寸法は、桁行では両側柱列・入側柱列とも異なるが、入側柱列で北から（8＋8＋8＋7＋9）尺。梁行では東から（5＋6＋6＋6）尺である。この建物の北妻柱列は、1.5m（5尺）離れて広場の北側に建つＳＢ03の南側柱列（廂）と柱筋が揃えられている。Pit16の掘方埋土から土師器の坏（第42図35）が出土している。

第3号掘立柱建物跡（ＳＢ03）（第11図、図版3）

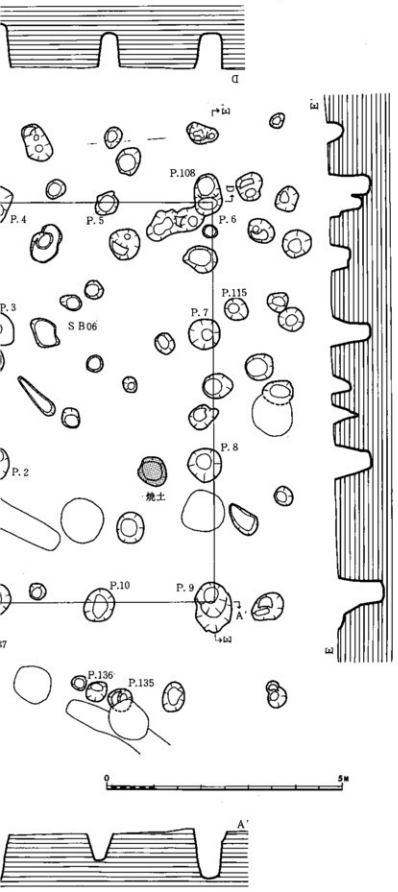
広場の北側に建つ桁行5間＝10.5m（35尺）、梁行4間＝6.8m（23尺）の東西棟南面廂付建物である。桁

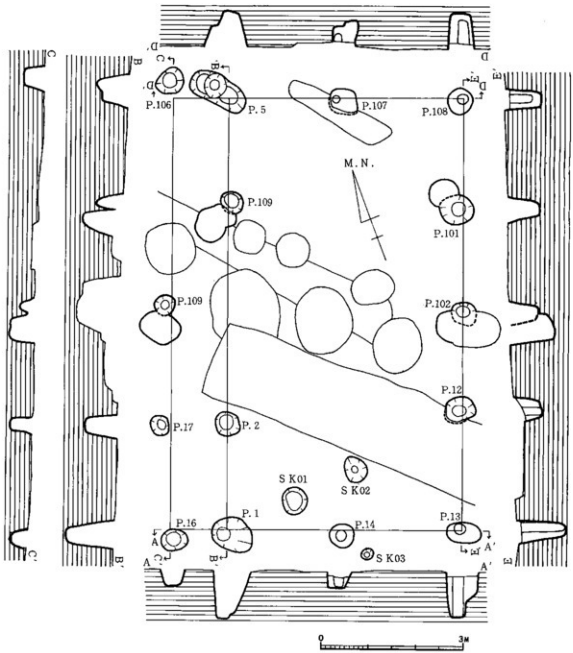


第12図　ＳＢ04建物実測図（縮尺1/80）



第13図　S B05－06建物実測図（縮尺1/ 80


D
E'
P.108
P. 4
P. 5
P. 6
P.115
P. 3
S B06
P. 7
P. 8
P. 2
焼土
P.10
P. 9
A'
P.136
P.135
E
0
5M
A'

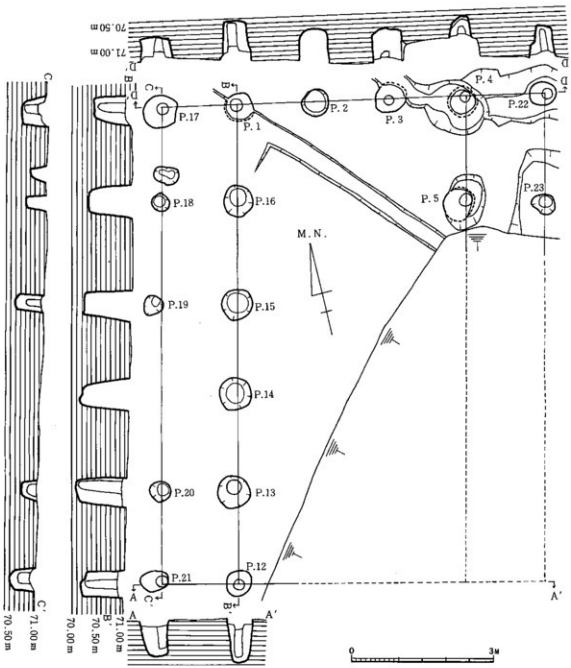


第14図　ＳＢ17建物実測図（縮尺1/80）

行方向はＥ20°Ｓを測る。身舎の柱穴は直径70cm前後・深さ80～90cmで、柱抜取り穴が認められた。廂の柱穴は直径35cm前後、深さ10～50cmである。柱間寸法は、桁行では両側柱列・入側柱列とも異なるが、南側柱列が７尺等間、入側柱列で東から（７＋７＋７＋６＋８）尺。梁行でも両妻で異なるが、東妻梁行で南から（６＋５＋６＋６）尺となっている。

第４号掘立柱建物跡（ＳＢ04）（第12図、図版３）

広場の北側にＳＢ03と4.2m（14尺）離れて建つ東西棟で、桁行６間＝11.55m（38.5尺）、梁行４間＝6.8m（23尺）の南・東面廂付建物である。廂の東南隅には柱穴がなく、隅欠きである。ＳＢ03と並んで建つが、桁行方向はＥ16°Ｓで柱筋は揃えられていない。この建物では身舎の四隅の柱穴が特に大きく、直径80～100cm、深さ110～150cmを測る。柱間寸法は、桁行では北側柱列と入側柱列・南側柱列（廂）とで異なるが、入側柱列で東から（5.5＋７＋６＋７＋６＋７）尺。梁行では南から（７＋５＋５＋６）尺である。この建物では、



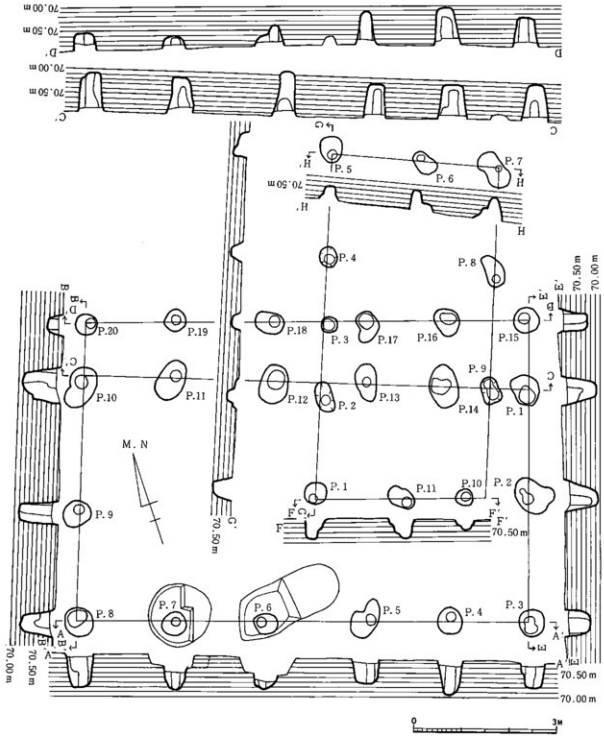
第15図　ＳＢ08建物実測図（縮尺1/80）

身舎の北東隅の柱穴で掘方埋土より、「大正」の墨書銘がある須恵器（第47図4）が出土している。

第5・6号掘立柱建物跡（ＳＢ05―06）（第13図、図版3）

広場の東側に建つ並双堂型式の建物である。ＳＢ05は桁行4間＝10.2m（34尺）、梁行3間＝6.3m（21尺）の南北棟北・東面廂付建物。ＳＢ06は桁行3間＝8.4m（28尺）、梁行2間＝4.8m（16尺）の南北棟建物である。ＳＢ05では後出のＳＢ17が重複する。桁行方向はＳＢ05がN16.5°E、ＳＢ06がN14°Eとなっている。ＳＢ05の身舎の両妻柱列が、隣のＳＢ06のそれに柱筋を揃えてあるため、ＳＢ05は若干歪な平面形をとる。2棟の中間には樋の支え柱のためとみられるＳＢ05の東側柱列と柱筋を揃えた柱穴がある。

柱穴は直径70～90cm、深さ100cm前後と大型である。発掘の際は確認できなかったが、攪乱されていない柱穴には平面形が歪なものが多く、後出のＳＢ17との関係からも柱が抜取られていると考えられる。2棟の身舎の柱間寸法は同一で、桁行で南から（10＋9＋9）尺、梁行が8尺等間に整えられている。ＳＢ05には、

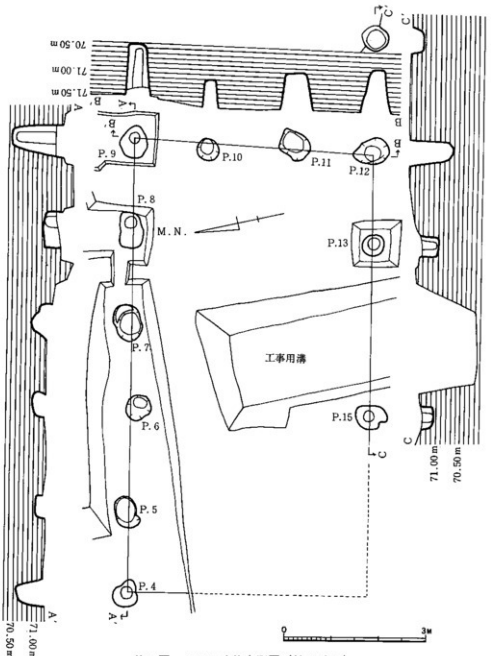


第16図　ＳＢ09・10建物実測図（縮尺1/80）

身舎の柱間寸法に対応する位置に廂のための柱穴があり、身舎との柱間寸法は、西面廂で５尺、北面廂で６尺を測る。ＳＢ06の北妻には柱穴群があり、簡単な廂または縁がつくことも考えられる。両棟は３m（10尺）離れて建つが、ＳＢ05の東側柱列より５尺のところに樋の支え柱列があり、その柱間寸法は両棟の桁行柱間寸法と対応する。樋の支え柱によって、両棟の軒の出は５尺ほどであったことがわかる。

第17号掘立柱建物跡（ＳＢ17）（第14図、図版３）

広場の東側でＳＢ05に後出して建てられている建物で、桁行４間＝９m（30尺）、梁行３間＝6.15m（20.5尺）の南北棟西面廂付建物である。桁行方向はN20.5°E。柱穴は身舎で直径50～90cm、深さ30～100cmを測

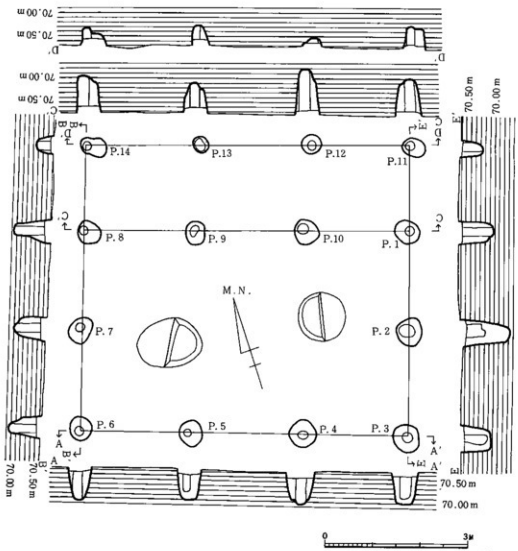


第17図　ＳＢ11建物実測図（縮尺1/80）

り、両妻の中間の柱穴は特に浅い。西側柱（廂）の柱穴は直径45～60cm、深さ50cm前後である。攪乱によって消滅した柱穴もあり、各柱列で寸法が異なるが、柱間寸法は桁行が東側柱列で南から（８＋７＋７＋８）尺、梁行が南妻柱列で西から（４＋８＋8.5）尺とみられる。この建物の南妻付近には、地鎮に関係する土坑が３基（ＳＫ01～03）ある。ＳＫ03は建物外、他の２基は建物内となる。

第８号掘立柱建物跡（ＳＢ08）（第15図、図版４）

広場の東側に建つ桁行５間＝10.1m（33.7尺）、梁行５間＝8.25m（27.5尺）の南北棟東・西面廂付建物である。南東部が土取りにより壊されている。桁行方向はN14°Eで、西入側柱列は、3.6m（12尺）離れて、北側に建つＳＢ06の西側柱列と柱筋が揃えられている。身舎の柱穴は直径60～70cm、深さ70～110cm、廂では直径40～70cm、深さ40～70cmを測り、比較的大型である。柱間寸法は、桁行で2.02m（6.73尺）等間、梁行で1.65m（5.5尺）等間とみられ、桁行では整数尺となっていない。



第18図　ＳＢ12建物実測図（縮尺1/80）

第９号掘立柱建物跡（ＳＢ09）（第16図、図版４）

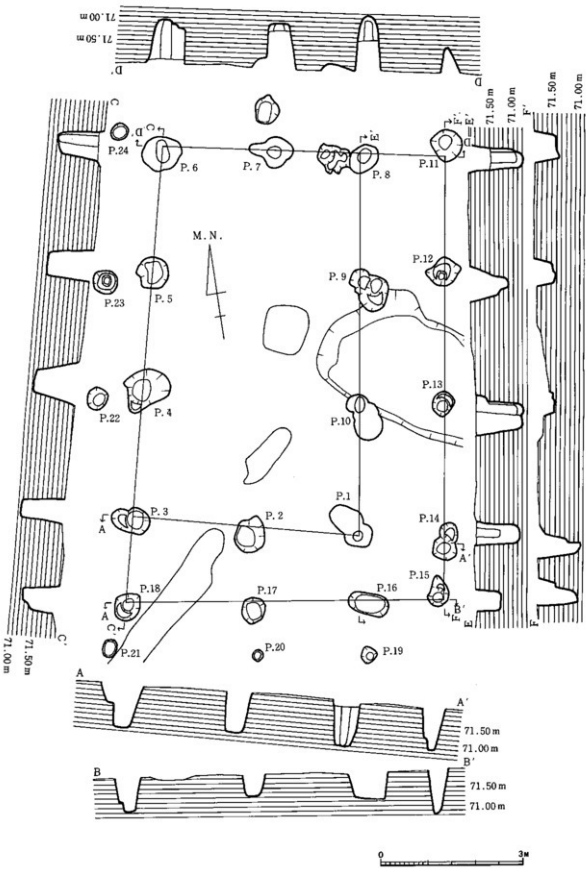
広場の南東部に建つ桁行５間＝9.6m（32尺）、梁行３間＝6.3m（21尺）の東西棟北面廂付建物である。後出のＳＢ10に切られる。桁行方向はＥ20°Ｓで、この建物の北側柱列とＳＢ04の南側柱列との距離は31.5m（105尺）を測る。柱穴は、身舎で直径55～80cm、深さ50～95cm、廂で直径50cm前後、深さ25～80cmを測り、柱の抜取り穴がある。柱間寸法は、桁行では北側柱列（廂）・入側柱列と南側柱列とで異なるが、前者で東より（６＋５＋７＋７＋６）尺とみられる。梁行の場合も両妻柱列とでは異なるが、東妻柱列で北より（５＋８＋８）尺とみられる。

第10号掘立柱建物跡（ＳＢ10）（第16図、図版４）

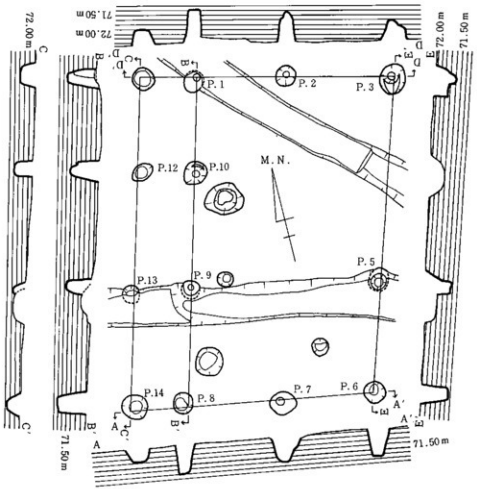
広場の南東部にＳＢ09を切って建てられた桁行４間＝7.2m（24尺）、梁行２間＝3.6m（12尺）の南北棟建物である。平面形がやや歪であるが、桁行方向Ｎ21°Ｅを測る。柱穴は直径35～80cmで小型のものが多く、深さも25～50cmと浅い。柱間寸法は、桁行が西側柱列で北より（７＋５＋５＋７）尺、東側柱列は３間で北より（７＋８＋８）尺とみられる。梁行では北妻柱列が東より（5.5＋６）尺、南妻柱列が東より（６＋６）尺とみられる。

第11号掘立柱建物跡（ＳＢ11）（第17図、図版４）

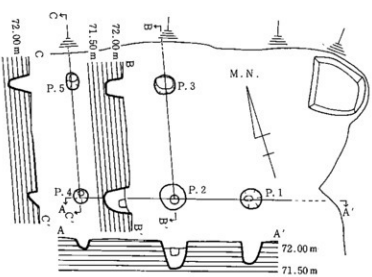
広場の南東部に、ＳＢ03と広場を挟んだ対称的な位置に建つ、桁行５間＝9.6m(32尺)、梁行３間＝5.1m



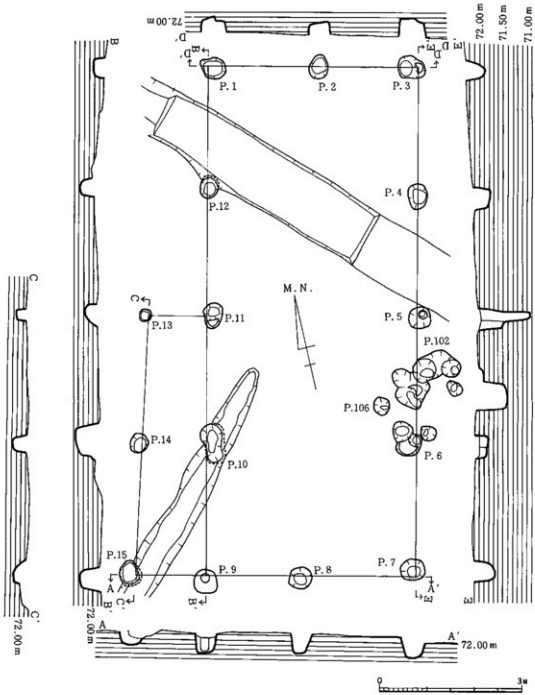
第19図　ＳＢ07建物実測図（縮尺1/80）



第20図　ＳＢ14建物実測図（縮尺1/80）



第21図　ＳＢ16建物実測図（縮尺1/80）

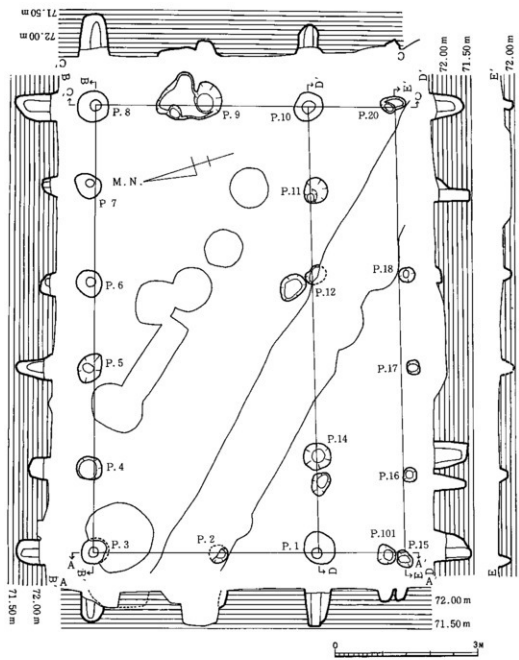


第22図　ＳＢ15建物実測図（縮尺1/80）

（17尺）の東西棟建物である。南西部は発掘区外となっているが、桁行方向はＥ12°Ｓを測る。柱穴は直径50～80cm深さ60～130cmで、四隅の柱穴が特に深く掘られている。柱間寸法は、桁行が北側柱列で東より（６＋６＋６＋８＋６）尺、梁行が東側柱列で北より（５＋６＋６）尺とみられる。南側柱列の東延長上2.4m（８尺）に、直径60cm深さ20cmの柱穴があるが、その性格は不明である。

第12号掘立柱建物跡（ＳＢ12）（第18図、図版５）

ＳＢ09の南側柱列より南へ９m（30尺）のところに建つ、桁行３間＝6.9m(23尺)、梁行３間＝６m（20尺）の東西棟北面廂付建物である。桁行方向はＥ18.5°Ｓを測る。柱穴は、身舎で直径50～60cm深さ70～110cm、廂で直径35～65cm深さ20～50cmを測る。柱間寸法は、桁行が東より（７＋８＋８）尺、梁行が北より（６＋７＋７）尺とみられる。



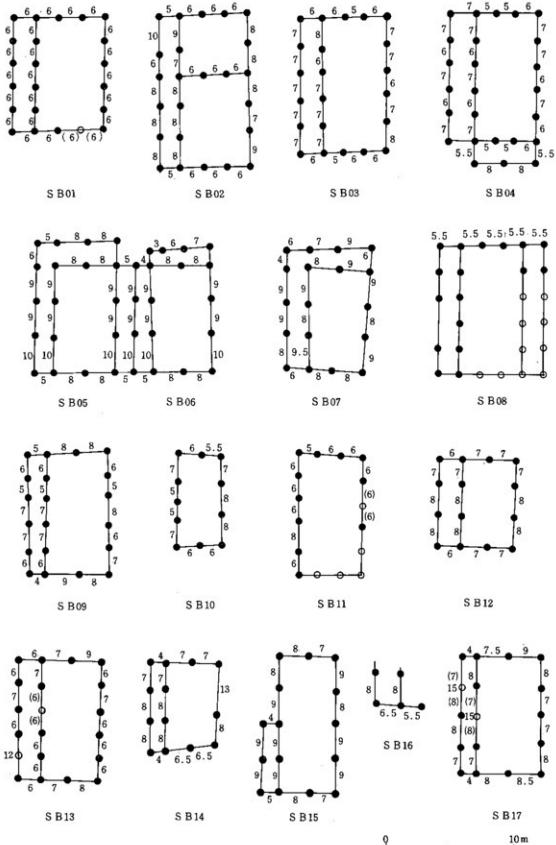
第23図　ＳＢ13建物実測図（縮尺1/80）

第７号掘立柱建物跡（ＳＢ07）（第19図、図版３）

ＳＢ06の東方９ｍ（30尺）に建つ桁行４間＝7.2ｍ（24尺）、梁行３間＝6.6ｍ（22尺）の南北棟東・南面廂付建物である。平面形は歪であるが、西側柱列で、桁行方向はN14°Eを測る。柱穴は、身舎で直径65cm前後深さ90～115cm、廂で直径50～70cm深さ35～90cmを測り、柱は抜取られている。柱間寸法は、桁行が西側柱列で南より（６＋９＋８＋９）尺、梁行が北側柱列で東より（６＋６＋８）尺とみられる。この建物の西側柱列と南側柱列の外側には、これらの柱列と90～120cm離れて並ぶ柱列がある。柱穴は直径22～50cmで、深さ3～60cmと浅く、建物の柱筋と若干ずらして掘られており、ＳＢ07構築の際の足場柱の柱穴と考えられる。

第14号掘立柱建物跡（ＳＢ14）（第20図、図版５）

ＳＢ06の北側に約7.2ｍ（24尺）離れて建つ、桁行３間＝6.9ｍ（23尺）、梁行３間＝5.4ｍ（18尺）の南北棟西面廂付建物である。建物の平面形が歪であるが、桁行方向は入側柱列でN15.5°Eを測る。柱穴は、身舎で直径45～65cm深さ50～70cm廂で直径50cm前後深さ30～40cmを測る。柱痕跡は直径16cm前後で、柱穴ととも



第24図　掘立柱建物柱間寸法（尺＝30cm）

に小型である。柱間寸法は、桁行が入側柱列で北より（7＋8＋8）尺、梁行が北妻柱列で西より（4＋7＋7）尺とみられる。

第15号掘立柱建物跡（ＳＢ15）（第22図、図版6）

ＳＢ14の北側約4.2m（14尺）に建つ、桁行4間＝10.5m（35尺）、梁行3間＝6m（20尺）の南北棟西面廂付建物である。廂は西側柱の南妻側の2間につく。桁行方向はN13°Eで、北妻柱列は北西に建つＳＢ13の南側柱列と柱筋が揃うようにしてあり、2棟の間隔は1.2m（4尺）を測る。柱穴は、身舎で直径55cm前後を測り、深さは30～110cmで40cm前後のものが多い。廂では直径25～50cm深さ20～30cmを測る。身舎の南東隅柱穴の柱痕跡は18cmを測る。柱間寸法は、桁行が入側柱列で北より（8＋9＋9＋9＋9）尺、梁行が南妻柱列で西より（5＋8＋7）尺とみられる。東側柱列にあるピット群から土師器の杯（第43図47）が出土している。

第13号掘立柱建物跡（ＳＢ13）（第23図、図版5）

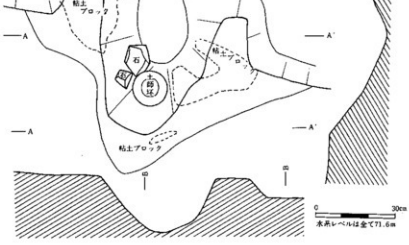
ＳＢ04の北側18.8m（約63尺）に、ＳＢ15に軒を接するように建つ、桁行5間＝9.3m（31尺）、梁行3間＝6.6m（22尺）の東西棟南面廂付建物である。桁行方向は入側柱列でE15.5°Sを測る。柱穴は、身舎で直径60～70cm深さ30～90cm、廂で直径25～50cm深さ20cm前後を測り、身舎の四隅の柱穴が他の柱穴に較べて深く掘られている。柱痕跡は直径12～22cmを測る。建物の平面形がやや歪であるが、柱間寸法は、桁行が北側柱列で東より（6＋6＋6＋7＋6）尺、梁行が西妻柱列で南より（6＋7＋9）尺とみられる。

第16号掘立柱建物跡（ＳＢ16）（第21図、図版6）

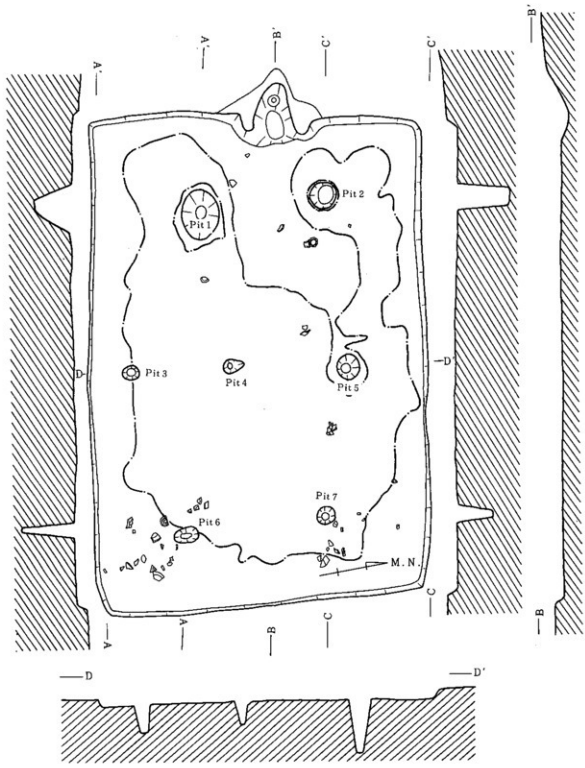
発掘区の北端に位置し、一部が検出されるのみで建物の全容は知ることができない。一応、桁行方向N13°Eの南北棟西面廂付建物と考えられる。柱穴は、身舎で直径45～65cm深さ35～60cm、廂が直径30cm深さ15～45cmで、柱痕跡は直径18cmを測る。柱間寸法は、桁行が8尺、梁行が西より（6.5+5.5）尺になる。

2．竪穴式住居跡　（第24．25図．図版8）

重機（バックフォー）で表土剥ぎ後、ジョレンでの精査中に発見されたものである。西壁側に竈（カマド）を持つ長方形プランの住居跡で、主軸方位はN－81°－Wを測る。



第25図住居址カマド実測図



0 1 m

水系レベルは全て71.6mである

第26図　住居跡実測図

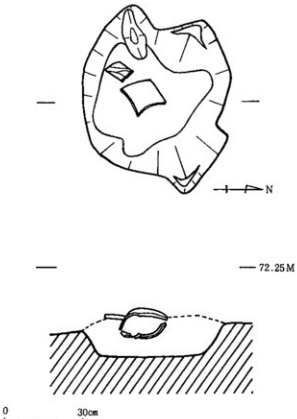
住居跡の平面プランは5.6m×3.5mの長方形であり、現存壁高は約10cm程である。全体的に住居跡の遺存は悪い。住居跡内の床面からは、柱穴と考えられる大小7個のピットが検出された。形状は大半が円形で、直径15cm～53cm、深さ24cm～56cmである。床面は一部に凸凹があるがほぼ平坦であり、水平である。なお、床面には踏み締められた様な固い部分が認められる。

竈は西壁側中央部にあり、両袖を有している。奥行き61cm、幅44cm、焚口幅48cm、深さ約20cmで、楕円形の凹地をなし、中央部よりやや東側が一番深く凹む。竈は粘土で固めてあり、南側袖がやや北側袖に対して細い。焚口付近の粘土塊に喰い込む形で茶褐色土があり、明らかに部分的に修復した形跡が見られる。

住居跡内からは、土師・須恵器の破片と共に墨書のある土器片が、竈内からは完形の土師器坏が出土している。これらは全て、埋土中からである。

第 4 表　住居跡内Pit 計測表

Pit	Pit				備　考
番号	長　径　cm	短　径　cm	深　さ　cm	埋　土　色	
1	53 cm	40 cm	40	砂質で粘りのない粒の小さな黒褐色土である。	
2	29	27	56	〃	
3	27	15	30	〃	
4	23	15	24	〃	
5	28	25	55	〃	須恵器破片出土
6	27	15	56	〃	
7	20	18	39	〃	



第27図　第1号墳墓実測図

3．火葬墓遺構及び遺物

(1)第1号墳墓（SC01）(第27図、図版6)

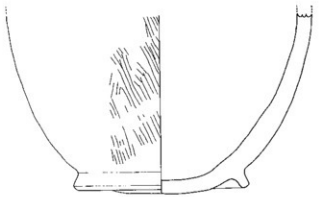
埋葬状況

発掘前の表面観察及び聞きとり調査時には何も確認できず、重機（バックフォー）で表土剥ぎ中に、偶然に発見されたものである。発見された畑はメロン畑として使用されており、長年の耕作及び開墾の際の削平等で撹乱を受けている。発見時にはすでに蔵骨器の上部はなく、表土直下でほとんど破壊された状態で検出された。

蔵骨器は、現存上面で径75cm×65cm、深さ約15cmの墓坑内に埋置されている。墓坑の床面はほぼ平坦であり、破壊された蔵骨器の底部は、床面より約7cm程浮いた状態であった。埋土は木炭が混った黒褐色土で、蔵骨器の周囲には、火葬骨と木炭片が見られる。蔵骨器、墓坑内に副葬品は見出せない。

蔵骨器（第28図）

須恵器壺形土器で高台が付き、胴部上半をほとんど欠いているが短頸壺形土器と思われる。現存器高14cm、底径13.1cm、高台の高さ1.4cmである。高台は底部貼り付けで、底部より大きく外反して下りる。底部は丸く、底部より胴部にかけて丸味を持ち、最大胴部へ達し大きく内傾していくものと思われる。底部は高台の端部よりも0.3cm程下り、安定感が悪い。胎土は小砂粒、黒色小粒を多く含んでいるが全体的に密であり、焼成はやや軟質で、内外ともに灰白色から暗灰色の色調を呈している。胴部外面は縦方向の刷毛目調整があり、高台は貼り付け後、横ナデ調整している。外側貼り付け部に一条の凹線が見られる。内面は不整方向の雑なナデが施されている。



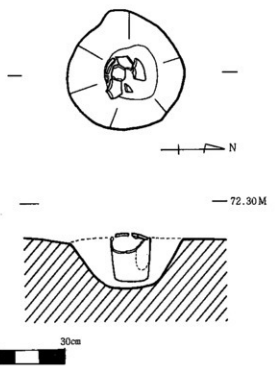
第28図　第１号墳墓蔵骨器実測図

(2)第２号墳墓（ＳＣ02）（第28図、図版６）

埋葬状況

第１号墳墓発見の翌日、同じメロン畑の東側茶園（畑の境界線用）の表土剝ぎ中に発見。第１号墳墓から約50m離れた所である。蔵骨器は表土直下で発見されたが、同所が茶園であったために１号墳墓よりは保存が良く、蔵骨器の上面のみが破壊されていただけである。

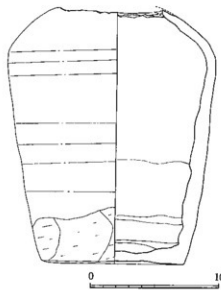
蔵骨器は、現存上面で径45cm四方の円形で深さ約20cmの墓坑内に埋置されている。蔵骨器は墓坑内の中央部に直立して安置してあり、周りを木炭が混った黒褐色土で埋めて固定している。蔵骨器内には火葬骨と木炭片が充満しており、火葬骨が多量に埋納されている。蔵骨器内や墓坑内よりの副葬品はない。



第29図　第２号墳墓実測図

蔵骨器（第30図）

須恵器長胴壺形土器で口縁部を欠く。器高19.3cm、底径11.2cm、最大胴部は底面より15.4cmで径7.7cmである。胎土は密であり、焼成はやや軟質、色調は灰色を呈す。外面は横ナデの後、肩から頸部にかけての部分と、胴部下半を箆削り調整している。内面は横ナデを施し、頸部に指頭押圧痕が見られる。



第30図　第２号墳墓蔵骨器実測図

4．地鎮に伴う遺構及び遺物

(1)地鎮具埋納土坑（第31図、図版7）

埋納状況

重機（バックフォー）で表土剝ぎ後、ジョレンによる精査中に発見。蔵骨器検出と同じメロン畑である。

現存上面で径60cm×55cmのほぼ円形に近く、深さ17cmの土坑内に、須恵器の壺、土師器の坏、皇朝十二銭（隆平永宝）が埋置されている。（ＳＫ01）土坑の床面はほぼ平坦で、その中央部に須恵器の壺が直立して安置してあり、土師器の坏は、壺の肩付近（東、西、南の三方）に各１枚ずつ、壺の北側胴部付近に１枚の皇朝十二銭（隆平永宝）が埋置されていた。土坑内は、親指大～小指大の小石が坏の底部付近から床面一杯にかけて、副と黒褐色土と混り合う形で埋められていた。

上記土坑より東へ約１mの所に、現存上面で径36cm×32cmの歪な円形で深さ約10cmの土坑がある。（ＳＫ02）土坑床面は西側より東側が凹み、土坑の中央部よりやや北側、床面より約５cm程浮いた所から３枚重りあった状態で皇朝十二銭（隆平永宝）が出土した。土坑内には小石が副と入っている。

更に、上記土坑の南西約1.5mの所に、現存上面で径28cm四方のほぼ円形で、深さ約10cmの土坑がある。（ＳＫ03）床面は北側よりは南側が凹む形である。土坑内には、上記土坑と同様に黒褐色土と混り合う形で小石が副と入っている。

上記３土坑は、いずれも固く締った茶褐色土層に切り込む形で造られており、距離的、製作（同様の小石を詰める）上からも、１つのセットと考えられる。なお、壺及び銅銭が出土した土坑はＳＢ17の南側柱筋上からの検出であるが、小石だけの土坑はＳＢ17の外になる。

地鎮具（須恵器壺）（第32図）

須恵器長胴壺形土器で口縁部の一部を欠く。この壺形土器は器高18.9cm、底径10.6cm、最大胴部は底面より10.7cmで径7.9cmを測る。

底部は平坦で、底部より直線的に最大胴部へと伸びて丸くゆるやかに頸部へ続き、口頸部より口縁部へは外反するように立ち上がる。胎土は小砂粒、黒色小粒を多く含んでいるが密であり、焼成は良好で、色調は灰白色を呈している。調整は外面を格子目のタタキ、内面は胴部を横ナデ、底部にはナデと同心円タタキが見られる。

銅銭（第33図）

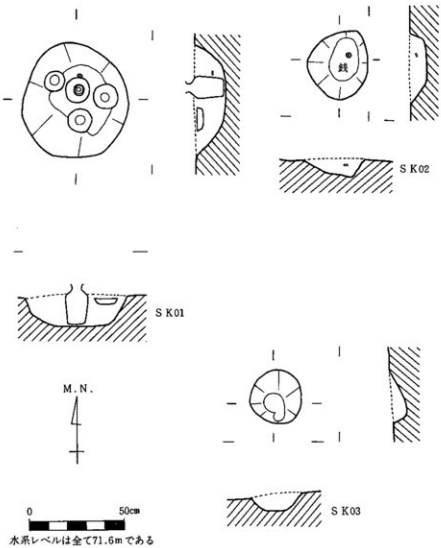
銅銭は隆平永宝４点を数え、３分類した。尚、No.１はＳＫ01、No.２．３．４はＳＫ02からの出土である。

Ⅰ類（１・４）

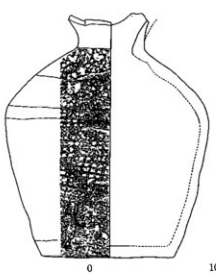
種類は中字で、１は、面文字「隆」の部分が欠損する。外縁外径25.0mm、内郭内径7.90mmを測る。背輪幅に広狭が見られる。４は、面文字「永」の部分が欠損し、外縁外径25.0mm、内郭内径8.30mmを測り、輪・郭はやや厚肉。１、４の文字面書体及び銭范は同類と思われる。

Ⅱ類（２）

２の種類は大字と思われ、郭の一部が欠損し、面文字「隆」が「隆」となっている。外縁外径24.9mm、外縁内径7.90mmを測る。肌面厚さはやや薄く、郭は面より背が幅広で細郭をなす。



第31図　地鎮具埋納土拡実測図



第32図　地鎮具須恵器壺実測図

Ⅲ類（3）

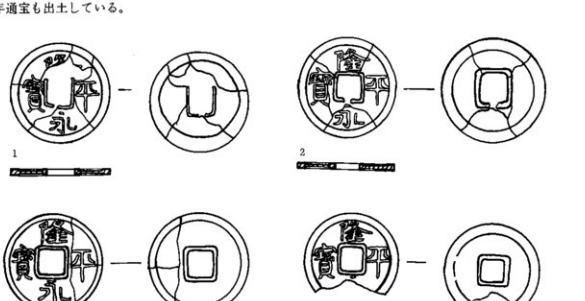
3の種類は大長頭永と思われ、面文字の「隆」は「陸」となっている。外縁外径24.7㎜、外縁内径8.30㎜を測る。若干細縁をなし、面、背郭の幅は均衡しており、やや広郭を呈する。書体は「楷書」で描かれている。

隆平永宝の種類は「大様・大長頭永、大巨字・大字・中字・小字・広穿長平・二水」などがあり、本遺跡出土の隆平永宝は、Ⅰ類・小字、Ⅱ類・大字、Ⅲ類・大長頭永に分類した。Ⅰ類の1、4については同范と思われるが、背面の輪部が、1では広狭があり、4では均衡しているが、皇朝十二銭の鋳造技術は、同一銭貨でも大小軽重不同で、一定したものは大変少ないと思われる。

上記で隆平永宝の分類及び特徴を述べたが、隆平永宝は「皇朝十二銭」の中で 4 番目に鋳造されたもので、[1] 平安時

代の初期、796（延暦15）年に初鋳された。歴代古銭図説[2]によれば、「日本秘庫器録桓武天皇延暦十五年九月皇帝自製銭文銘隆平永宝十一月始鋳之一当旧銭十……」と、旧銭との交換率まで記されている。

これまで隆平永宝は、九州内では福岡県太宰府市宝満山上宮祭祀遺跡[3]、熊本県菊池郡西合志町高木原遺跡[4]、熊本市健軍町[5]などから出土している。なお、県内からはこの他、玉名郡菊水町の日置氏墳墓[6]より万年通宝も出土している。

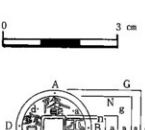


第33図　隆平永宝実測図（原寸）

第5表 銅銭計測値一覧表

No.	銭貨名	初鋳年	西暦	外縁外径	外縁内径	内郭外径	内郭内径	外縁厚	文字面厚	重量	備考
1	隆平永寶	延暦15年	796	25.00	20.10	7.90	6.90	1.36	0.90	1.80	背輪部に広狭有り
2	隆平永寶	延暦15年	796	25.00	21.00	7.95	6.30	1.20	0.80	1.25	
3	隆平永寶	延暦15年	796	25.50	22.60	8.30	6.75	1.28	0.80	1.90	
4	隆平永寶	延暦15年	796	24.30	20.80	7.75	6.65	1.18	0.80	1.55	

（単位mm・g 平均数値）



外縁外径 $G = \frac{Ga + Gb}{2}$　　内郭内径 $n = \frac{na + nb}{2}$

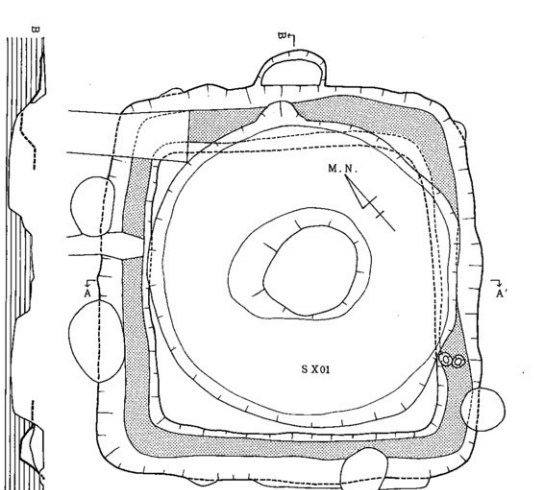
内郭外径 $N = \frac{Na + Nb}{2}$　　外縁厚 $T = \frac{A + B + C + D}{5}$ （A・B・C・D）

外縁内径 $g = \frac{ga + gb}{2}$　　文字面厚 $t = \frac{a + b + c + d}{4}$

※註
銭貨の計測値については上記で行なった。
平城宮発掘調査報告Ⅵ
平城京朱雀大路発掘調査報告
を引用、参行にした。

5．方形周溝状遺構（ＳＸ02）（第34図、図版８）

発掘区の北部で検出された方形周溝状遺構である。中央部を明治以降にドーナツ状に撹乱されている（ＳＸ01）が、周溝部は比較的良好な状態で遺されている。周溝の規模は、東西8.15m南北8.3mで、溝は上場幅１～1.3m、底面幅30～50cm、深さ40～50cmを測る。方向は約Ｎ44°Ｅで、掘立柱建物群の方向とは異なる。溝の埋土からは建物群と同時期の土師器片が出土し、上・下２層に分けることが可能である。上層の黒褐色土層は軟かくしまりがなく、下層の地山のローム粒を含む黒褐色土層は、極めて硬くしまっている。ＳＸ02は地元で塚の伝承地として知られており、ＳＸ01がＳＸ02の中央部を正確に撹乱していることとイモ穴が周溝の縁辺に掘られていることを考慮に入れると、当時までは視覚的に識別可能なマウンドをもった状態であった可能性がある。しかし、現在のところ遺構の性格については特定できない。



第34図　方形周溝状遺構（S X02）実測図（縮尺1/80）

註

(1) 1和同開珎　2神功開宝　3万年通宝　4隆平永宝と続く

(2) 無鍋丁福保、中華民国二十九年上海医学書局初版、「歴代古銭図説」全一冊

(3) 高倉洋彰、1982「九州出土の皇朝十二銭」福岡市埋蔵文化財調査報告書87集、『海の中道遺跡』

(4) 坂本経堯、1979『肥後上代文化の研究』

(5) 註3に同じ

(6) 松本雅郎、1980『「日置氏墳墓」考』<鏡山猛先生古稀記念古文化論攷>

第V章　遺　　物

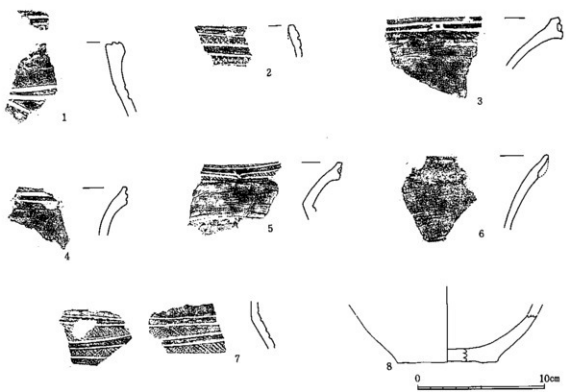
出土遺物

本遺跡からは、縄文時代後期から現代に到るまでの遺物が出土しているが、量は少ない。更には、表土剝ぎ中やその後のジョレンによる精査中に出土したものが大部分であって、遺構に伴うものは少なく、また破片が多い。

1．縄文土器（第35図）

本遺跡からは、約30点の縄文土器が出土しているが、多くは表土剝ぎ後の精査中に検出されたものである。いずれも破片で、このうち実測の可能な8点について図示した。

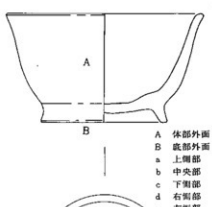
土器はいずれも縄文時代後期中葉から後葉にかけてのもので、辛川式土器[1]とこれに後続する西平式土器[2]と考えられる。[3]



第35図　縄文土器実測図

第 6 表　縄文土器観察一覧表

番号	出土遺構	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	特徴
1	18トレンチ内	縄文	鉢型土器		粒子、細かく砂粒をわずかに含む。	良好	黄褐色	口縁部に2条の沈線がみられる。口縁部下にも、沈線が横方向と斜め方向に施されている。器面は内外ともに良く研磨されている。
2	B－7区	〃	〃		〃	〃	〃	口縁部に横方向の沈線4条とその沈線と沈線との間に縄文が施されている。
3	B－4区	〃	〃		粒子は細かく砂粒、雲母をわずかに含んでいる。	〃	〃	口縁部に2条の平行沈線が施されている。その間に「八」の字状の文様がみられる。内外器面とも、横方向の磨き調整が施されている。
4	C－4区	〃	〃		〃	〃	黄灰色	口縁部は肥厚し、2条の平行沈線と、口唇部に縄文が施されていて、磨消縄文と思われる。内外面ともよく研磨されている。
5	H－8区	〃	〃		粒子は細かい	〃	黄褐色	口縁部と僅かに残っている肩部に文様が施されている。口縁部は3条の沈線と磨消縄文が施されており、肩部に1条の沈線と刺文が施されている。内外器面ともよく研磨されている。
6	B－4区	〃	〃		粒子は細かく混砂も少ない。	〃	黄灰色	口縁部が剥離していて、文様不明。器面はよく研磨されている。
7	B－4区	〃	〃		粒子は細かく砂粒、雲母を僅かに含む	〃	黒褐色	肩部の文様は4～5条の横沈線と縄文で構成されている。磨消縄文である。内外面とも、よく研磨されている。
8	B－6区	〃	〃	平底 底部径 8.0cm	少し大きめの砂を含む。	弱い	にぶい黄橙色	



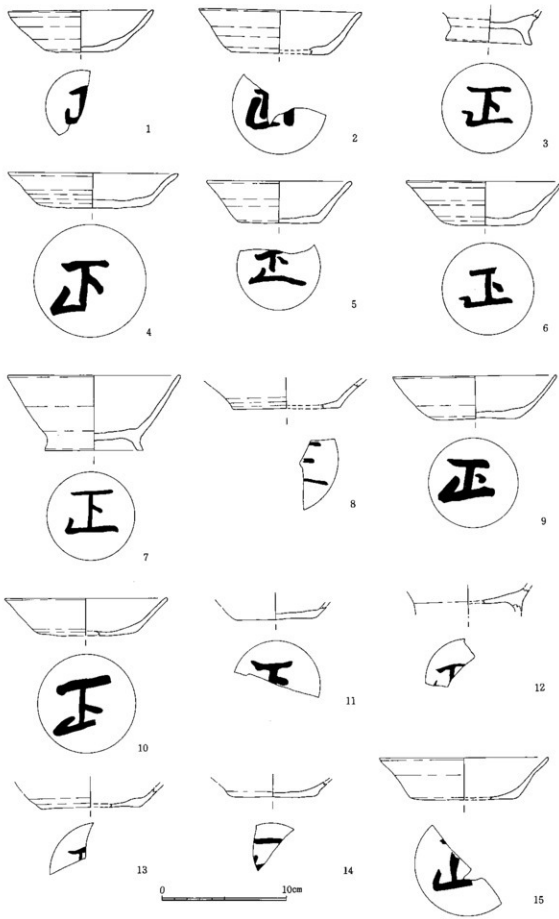
第36図墨書位置図

2．墨書土器

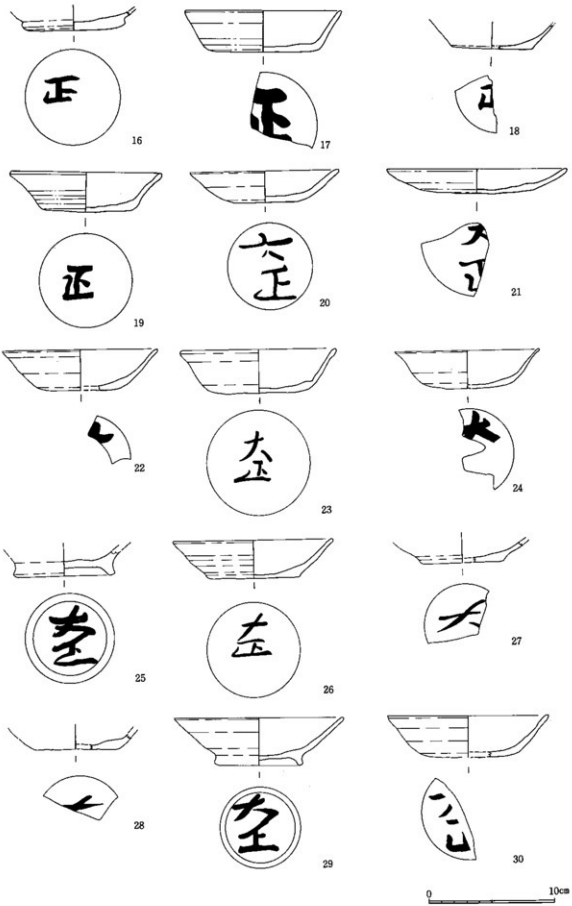
本遺跡からは、文字を墨書した土器が67点出土している。墨書土器は、他の遺物と混在するかたちで調査区内のＳＢ05建物跡付近一帯から多く出土している。墨書された土器の器種は、土師器・須恵器の坏・皿・埦等で、大部分が丹塗りの土器である。

記載される位置は、体部外面(A)の１点をのぞき、全て底部外面(B)であった。底部外面(B)に記載されたものの内、墨書面が中央部(b)にあたるもの41点、上側(a)のもの７点、下側(c)のもの３点、左側(e)のもの12点、右側(d)のもの０点で、圧倒的に器体の中心部に書かれたものが多い。なお、出土した墨書土器は破片部分が多く、器体の欠損及び墨痕が薄い等によって、判読や位置確認が不能なものが11点あった。

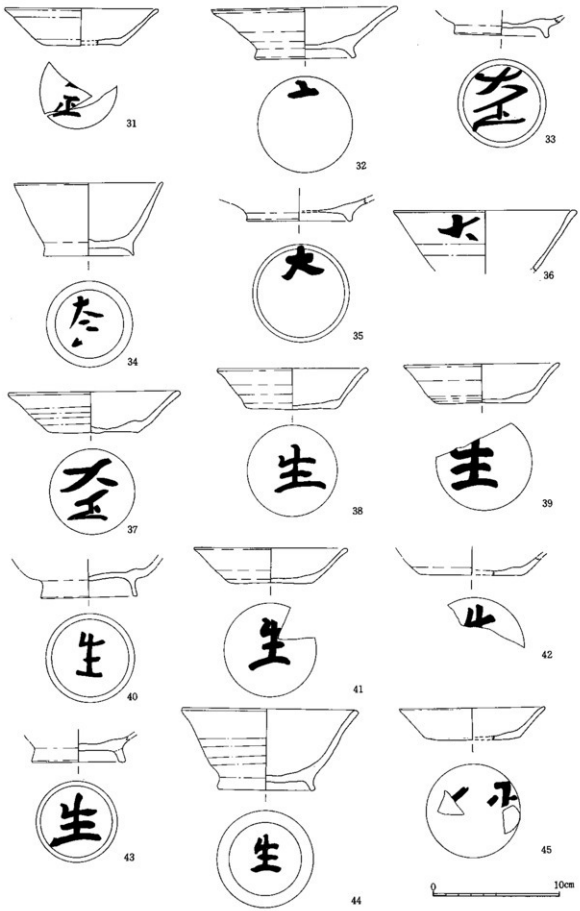
文字は「正」、「大正」の２字が圧倒的に多く、次いで「生」、「西正」、「上」、「坂上」の順になる。墨書銘の意味するものは



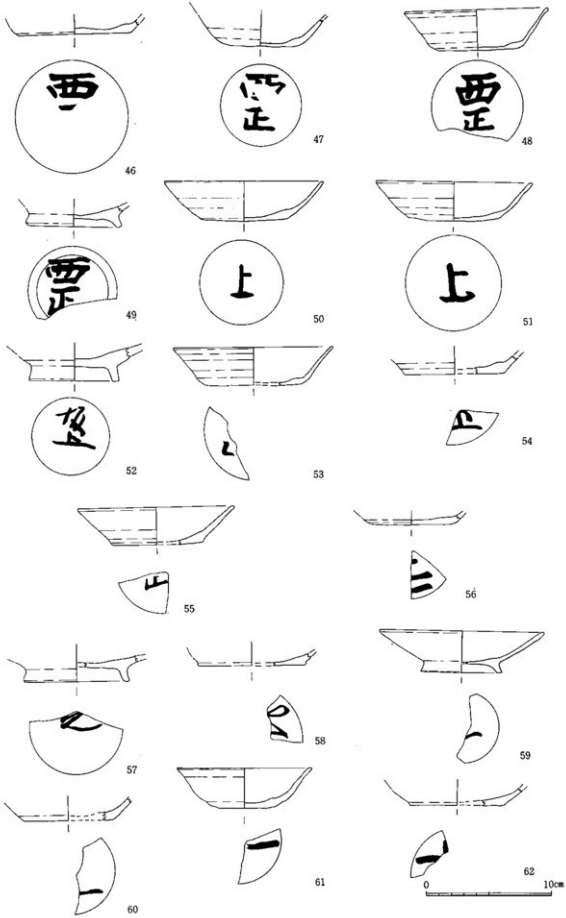
第37図　墨書土器実測図(1)



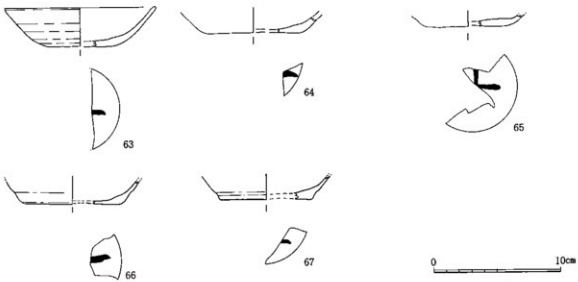
第38図　墨書土器実測図(2)



第39図　墨書土器実測図(3)



第40図　墨書土器実測図(4)



第41図　墨書土器実測図(5)

第７表　墨書土器一覧表

番号	文字	器種	墨書位置	出土地点	備考
1	正	坏	B．b	C－6　黒色土上面	
2	正	坏	B．e	C－6	丹塗り
3	正	高台付境	B．b	C－6　黒色土上面	〃
4	正	皿	B．e	C－5　黒色土上面	〃
5	正	坏	B．b	C－6　黒色土上面	〃
6	正	坏	B．b	〃	〃
7	正	高台付境	B．b	〃	〃
8	正	坏	B．b	C－5　住居跡	〃
9	正	坏	B．b	SB 02 pit 8 掘方埋土内	〃
10	正	坏	B．b	SB 06 pit108	〃
11	正	坏	B．b	SB 06 pit11	〃
12	正	高台付境	B．e	SB 14 pit6	〃
13	正	坏	B．e	SB 09 pit16柱痕跡埋土内	〃
14	正	坏	B．a	掛土内	〃
15	正	坏	B．e	SB 09　pit10柱抜取穴	〃
16	正	坏	B．e	C－5　住居跡	〃
17	正	坏	B．b	SB 06 pit11掘方埋土	〃
18	正	坏	B．b	C－5　住居跡	
19	正	坏	B．b	SB 04　pit108	丹塗り
20	大　正	坏	B．b	C－6　黒色土上面	〃
21	大　正	皿	B．c	C－6	〃
22	大　正	坏	B．b	C－6	〃
23	大　正	坏	B．b	C－5　黒色土上面	〃
24	大　正	坏	B．a	C－5　住居跡	〃
25	大　正	高台付境	B．b	C－5　住居跡	〃
26	大　正	坏	B．b	C－5　黒色土上面	〃
27	大　正	坏	B．b	C－5　黒色土上面	
28	大　正	坏	B．b	C－5　住居跡	丹塗り
29	大　正	高台付皿	B．b	C－5　黒色土上面	〃
30	大　正	坏	B．e	C－6　黒色土上面	〃
31	大　正	坏	B．e	C－5　住居跡	
32	大　正	高台付皿	B．a	SB09 pit7掘方埋土内	丹塗り
33	大　正	高台付境	B．b	掛土	〃
34	大　正	高台付境	B．b	SB 04　pit9 柱穴壁面	〃
35	大　正	高台付皿	B．a	SB 09 pit17柱抜取穴埋土	〃

番号	文字	器種	墨書位置	出土地点	備考
36	大　正	高台付境	A．b	SB15 pit 5 掘方埋土丹塗り	
37	大　正	坏	B．b	SB 05 pit 25南東側pit	〃
38	生	坏	B．b	C－6　黒色土上面	〃
39	生	坏	B．e	C－6　黒色土上面	〃
40	生	高台付境	B．b	C－5　黒色土上面	〃
41	生	坏	B．b	C－5　住居跡	〃
42	生	坏	B．a	C－5　黒色土上面	〃
43	生	高台付境	B．b	表　採	〃
44	生	高台付境	B．b	SB 06　pit 136	〃
45	西　正	坏	B．b	C－5　黒色土上面	〃
46	西　正	坏	B．a	C－5　黒色土上面	〃
47	西　正	坏	B．b	C－6　黒色土上面	〃
48	西　正	坏	B．b	掛　土	〃
49	西　正	高台付境	B．e	掛　土	〃
50	上	坏	B．b	D－6　黒色土上面	〃
51	上	坏	B．b	SB 13pit　14	〃
52	坂　上	高台付境	B．a	㉟トレンチ　表土	〃
53	×　正	坏	B．e	C－5　黒色土上面	〃
54	×　正	坏	B．b	C－5　黒色土上面	〃
55	×　正	坏	B．b	C－5　黒色土	〃
56	×　□	坏	B．c	SB 05 pit 101	〃
57	×	高台付皿	B	C－5　黒色土上面	〃
58	×	坏	B	掛　土	〃
59	×	高台付皿	B	C－5　黒色土上面	〃
60	×	坏	B	B－9　黒色土上面	〃
61	×	坏	B	C－5　黒色土上面	〃
62	×	坏	B	C－5　黒色土上面	
63	×	坏	B	SB 13 pit 101	
64	×	坏	B	SB 05 pit 3	〃
65	×	坏	B	C－5　住居跡　カマド	
66	×	坏	B	SB 07 pit 14	丹塗り
67	×	坏	B	C－5　住居跡	〃

× 欠損して不明　□ 判読不可能　㊀ 文字の推定できるもの

明らかではないが、全国の墨書文字の内容を分類すると、(1) 所属を記したもの、(2) 所有者を記したもの、(3) 使用目的を記したもの、(4) 落書に類するもの、(5) 梵字、(6) その他、一、二字程度でただちにその意味を明解にし難いが、なかには人名の一字を記したものと思えるもの[4]、等に分類することができる。本遺跡出土の墨書土器も上記の(1)～(6)のいずれかに属するものと考えられ、特に、「正」、「大正」、「西正」は所属を記したものではないかと推測される。大漢和事典より上記の三字に関係しそうなものを拾うと次のようなものがある。

「正」に関係しそうなもの。

正堂……表御殿

正殿……儀式を行う表御殿

正廳……正殿

「西正」の西は方位を、「大正」の大は大きさや重要性を表し、よって、所属（建物）を表わすものではないかと考えられる。この他、「上」・「生」・「坂上」等の墨書があるが、「上」の字はこれまで態本高校遺跡（付近に郡家、郡寺推定地がある）等で出土しているが、「上」の字は階級の上下や、尊ぶ、奉つる等の意味があり、本遺跡が官衙という性格から考えて、所有者か、これに関する者の使用目的品と考えてもおかしくない。「生」「坂上」等については、「生」はイカス、イノチ、ウマレル、ナマ等の意味があるが、本遺跡では明解にし難い。「坂上」は人名ではないかと考えられる。

筆跡等を元に比較すれば、25・29・33、38・40・43・48・49、50・51、3・7・21・23、34・52がそれぞれ同一者の筆と思われ、数名の筆者[5]によって記されたものと考えられる。

器形によって年代を推定すれば、42が大宰府政庁出土ＳＥ400に、6・7が同じくＳＫ1800に相当するものと考えられ、9世紀前半から後半にかけての時期である[6]。

3. 土師器[7]

坏、皿、高台付皿、高台付埦等があった。いずれも破片が多く、完形品は少なかった。

器体の底部は回転ヘラ切り離しされたものが多く、体部は横ナデ、ナデ調整が施され、更には器体に丹塗りされたものが多かった。出土した土器の大部分は、器形特徴から太宰府政庁出土ＳＥ400と、ＳＫ1800に類似し、9世紀前半～後半の時期のものである。

(1)土師器坏（第42．43．44図）

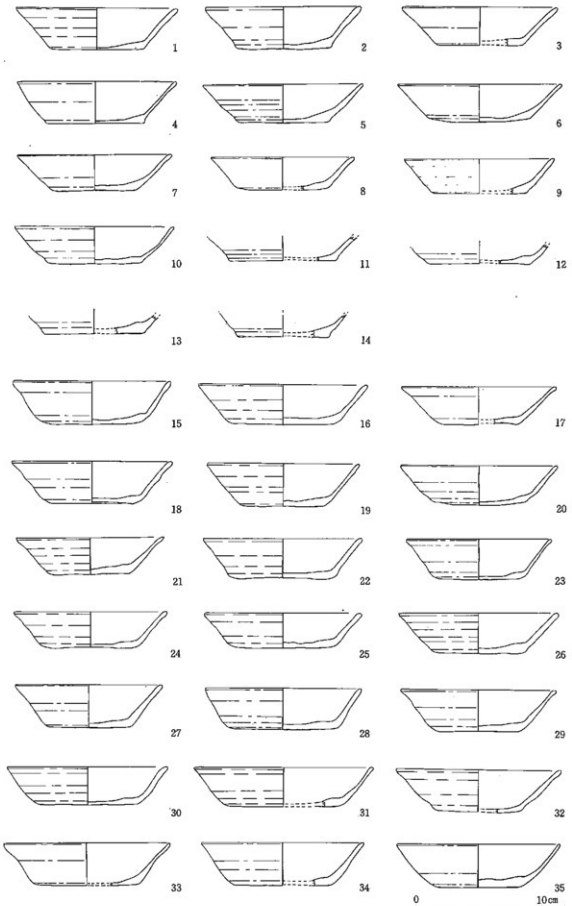
出土した土師器の大部分を占める。坏の形態特徴は、器体の体部は直線的に外上方に延びるが、内側底部と体部との境に明瞭に稜が形成されるもの…Ⅰ類と、形成されないもの…Ⅱ類とに大別され、更に、細部の特徴からⅠ、Ⅱ類とも2つに細分化される。

坏Ⅰ類―1（1～14）

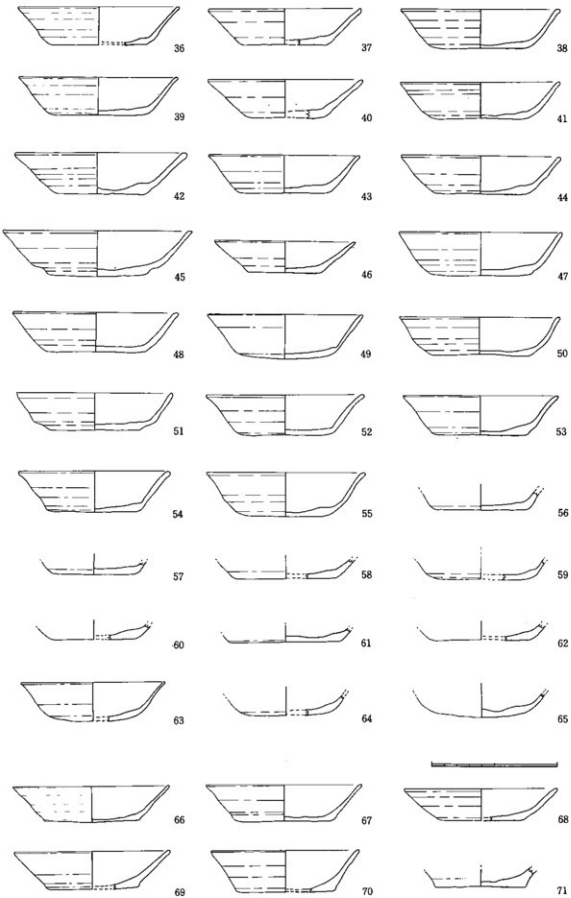
平均口径12.6㎝、平均器高3.0㎝を測る。器体は底部より直線気味に開き、外底部と体部との境が明瞭である。底部はいずれも平底で、2、3、4、6、11、12、13の外底には回転ヘラ切り離し跡が明瞭に残り、5、8、10に板目圧痕、5、6、7、8、11、12、13、14に墨書が認められる。

坏Ⅰ類―2（15～65）

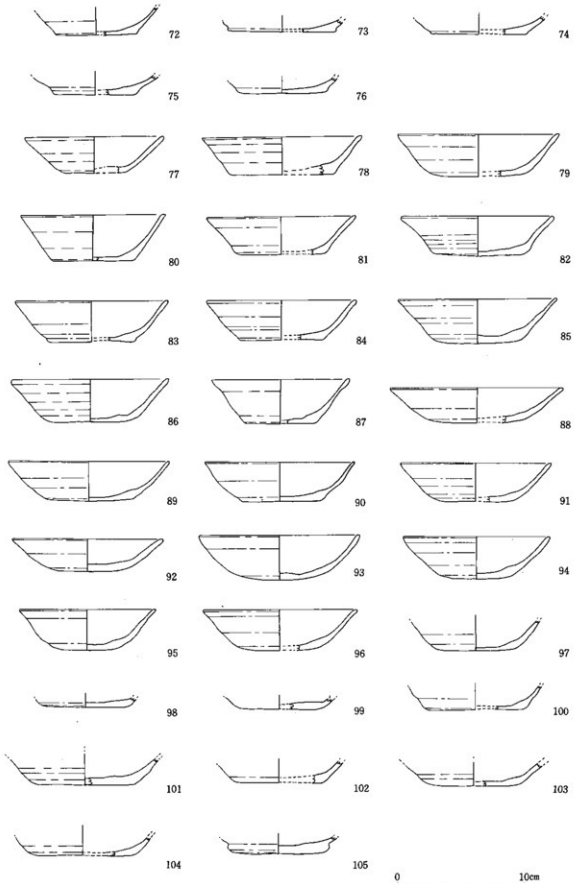
平均口径12.8㎝、平均器高3.2㎝を測る。器体は外底部と体部との境が丸味をもつ。15～50の体部は直線気味に開くが、51、52は内弯ぎみに、53～56は口縁部でわずかに外反する。49、63、64、65の底部は丸味を持つが、他は全て平底である。15、16、17、18、20、21、23、24、25、27、28、29、30、31、36、41、42、43、45、46、53、54、56、57、58、61、63、64、65の外底には回転ヘラ切り離しの跡が残り、18、20、30、37、



第42図　土師器坏実測図(1)



第43図　土師器坏実測図(2)



第44図　土師器坏実測図(3)

38、44、47、48、51、52、55、56、57に板目圧痕、15、17、20、23、27、28、33、34、35、36、42、53、54、57、58、60、61、62、63に墨書が認められる。

坏Ⅱ類－1（66～76）

平均口径12.4cm、平均器高2.9cmを測る。器体は底部より直線気味に外上方に開き、外底部と体部との境が明瞭である。底部はいずれも平底で70、72を除き全て外底に回転ヘラ切り離し跡を残し、67、68に板目圧痕が、69、72、73、74、75、76に墨書が認められる。

坏Ⅱ類－2（77～105）

平均口径12.2cm、平均器高3.2cmを測る。器体は外底部と体部との境が丸味を持つ。77～88の体部は直線気味に外上方へ開き、89～94はやや内弯ぎみに、95～96は口縁部でわずかに外反する。91～95の外底は丸味を持つが、他は全て平底である。105の底部は特に肉厚である。80、81、82、83、84、85、86、90、92、97、101、103、105の外底には回転ヘラ切り離しの跡が残り、79、83、86、94に板目圧痕が、79、82、85、89、91、94、95、96、97、98、99、100、102、105には墨書が認められる。

(2)高台付埦（第45図）

高台付埦の形態特徴は、Ⅰ類（器体は、底部からやや丸味をもって立ち上がるもの）とⅡ類（器体は底部から直線気味に立ち上がるもの）に大別され、細部の特徴から、Ⅰ類は2つに細分される。

高台付埦Ⅰ類－1（1～2）

器体は底部よりやや丸味をもって立ち上がる。1、2の口縁部は欠損して形態が不明であるが、1は残存部より直線的に開くものと考えられる。底部は平底で、高台は、底部端に外反ぎみに貼り付けられている。

高台付埦Ⅰ類－2（3）

器体の特徴は高台付埦Ⅰ類－1と同様で、口縁部のみが外反する。外底に墨書が認められる。

高台付埦Ⅱ類－1（4、5）

器体は底部からほぼ直線気味に立ち上がり、5の口唇部は肥厚する。4の外底と、5の体部外面に墨書が認められる。4の底部は平底で、高台は底部端に外反ぎみに貼りつけられている。

高台付埦Ⅱ類－2（6、7）

器体は、底部から体部にかけての部分が大きく外弯しながらも、直線気味に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。底部は平底で、6の外底には板目圧痕が認められる。高台は底部端にあって外反ぎみに、7の高台は高く、底部端よりやや内側に外反ぎみに貼り付けられている。

器体の上半部が欠損して、形態が不明な底部のみのものをⅢ類とする。細部の特徴から、3つに細分される。

高台付埦Ⅲ類－1（8～13）

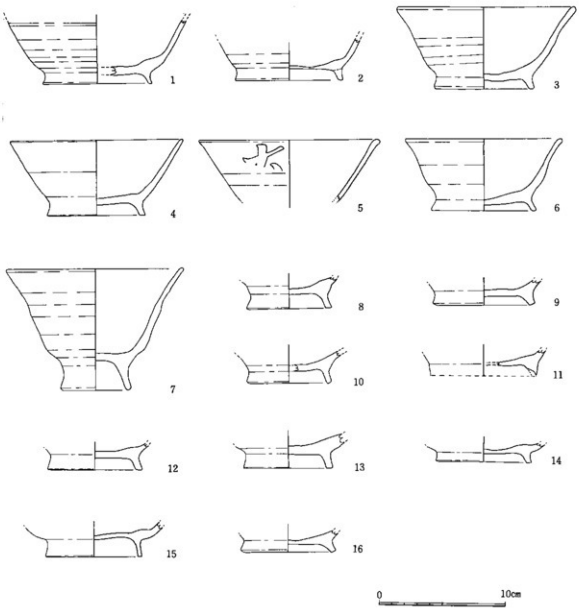
高台付Ⅱ類と同形態の特徴をもつ底部破片である。8、9、11、12、13の外底に墨書が認められる。

高台付埦Ⅲ類－2（14、15）

底部は平底で、高台は底部端よりやや内側に貼りつけられている。底部は回転ヘラ切り離しの後、調整している。15の高台は肉薄で高い。14、15の外底に墨書が認められる。

高台付埦Ⅲ類－3（16）

底部は低く、外底に明瞭に回転ヘラ切り離しの跡を残している。高台は底部端に外反ぎみに貼りつけられており、外底に墨書が認められる。



第45図　土師器高台付椀実測図

(3)皿（第46図）

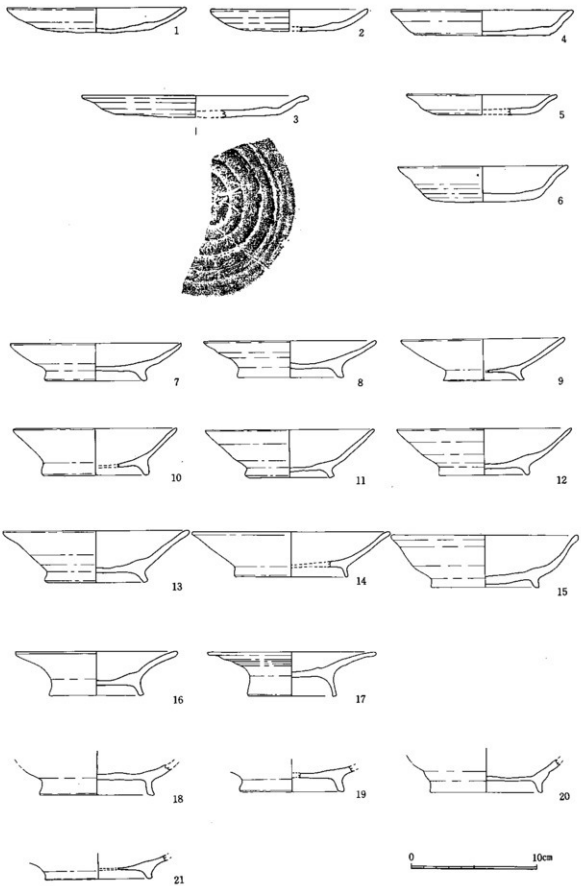
皿の形態特徴はⅠ類（器体は丸味を持つが直線的に開くもの）Ⅱ類（器体は丸味を持つが口縁部が外反するもの）に、高台付皿は、Ⅰ類（器体が丸味を持つもの）とⅡ類（底部から外弯ぎみに立ち上がるもの）に大別され、Ⅰ類は細部の特徴から２つに細分可能である。

皿Ⅰ類（１、２）

平均口径13.6cm、器高1.8cm、平均底部8.25cmを測る。器体は内弯するものの、直線気味に開く。底部は平底で、１の外底に墨書が、２は回転ヘラ切り離しの跡が認められる。

皿Ⅱ類（３～６）

器体は内弯するものの、口縁部は大きく外反する。底部はいずれも平底で、回転ヘラ切り離しの跡が明瞭に残っている。３は出土品の中では大型の皿で、外底にヘラ記号が認められる。４は底部と体部との間が、内側にわずかに屈曲し、外底に板目圧痕が認められる。６は坏に近い形で、外底に墨書が認められる。



第46図　土師器皿高台付皿実測図

高台付皿Ⅰ類－1（7～13）

皿部の器体は内弯するものの、直線気味に大きく立ち上がる。底部は平底で、高台は低く、底部端に外反ぎみに貼り付けられている。9の外底には回転ヘラ切り離しの跡が明瞭に、9、11、13には墨書が認められる。

高台付皿Ⅰ類－2（14、15）

皿部の器体は内弯するものの、口縁部は外反する。底部は平底で、高台は低く、底部端に外反ぎみに貼り付けられている。14の高台は肉薄である。15の外底に板目圧痕が認められる。

高台付皿Ⅱ類（16、17）

皿部の器体は底部から外反ぎみに大きく開く。高台は肉薄で、16は外反ぎみに、17はやや内弯ぎみに底部端に貼り付けられている。底部はいずれも平底で回転のヘラ切り離しの跡が認められる。

高台付皿Ⅲ類

皿部が欠損する高台だけの破片である。細部の特徴により2つに細分が可能である。

高台付皿Ⅲ類－1（18～20）

高台は高く、底部端に外反ぎみに貼り付けられている。底部は平底で、19の外底に墨書、20は回転ヘラ切り離しの跡が明瞭に認められる。

高台付皿Ⅲ類－2（21）

高台は低く、底部に外反ぎみに貼り付けられている。底部は平底で、回転ヘラ切り離しの跡があり、墨書が認められる。

4．須恵器

土師器に比べると少量である。坏、高台付埦、甕、壺が出土しているが、破片が多く図示できるものは少ない。

(1)須恵器坏（第47図）

坏の形態特徴は、土師器坏Ⅰ類－2と同様である。

須恵器坏Ⅰ類－2（1～3）

平均口径12.3cm、平均器高3.2cmを測る。器体の体部は直線気味に開き、内側底部と体部との境に明瞭に稜が形成される。1、2の器体は肉厚であるが、3は肉薄で、口縁部がわずかに外反する。底部はいずれも平底で、1、2の外底に回転ヘラ切り離し跡が明瞭に残り、2、3には板目圧痕が認められる。

(2)須恵器高台付埦（第47図）

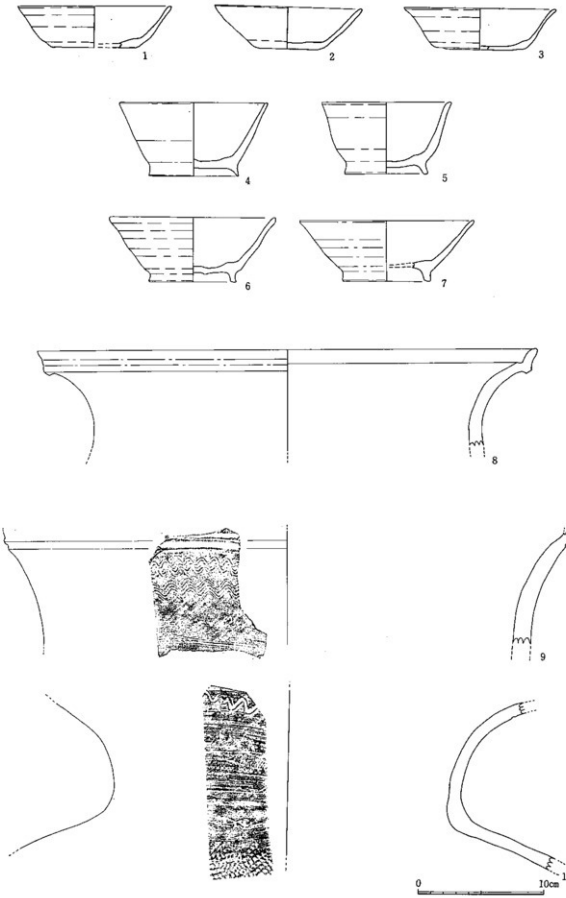
須恵器高台付埦の形態特徴は、Ⅰ類（器体が丸味を持ったもの）と、Ⅱ類（器体が直線的なもの）に大別される。

高台付埦Ⅰ類（4、5）

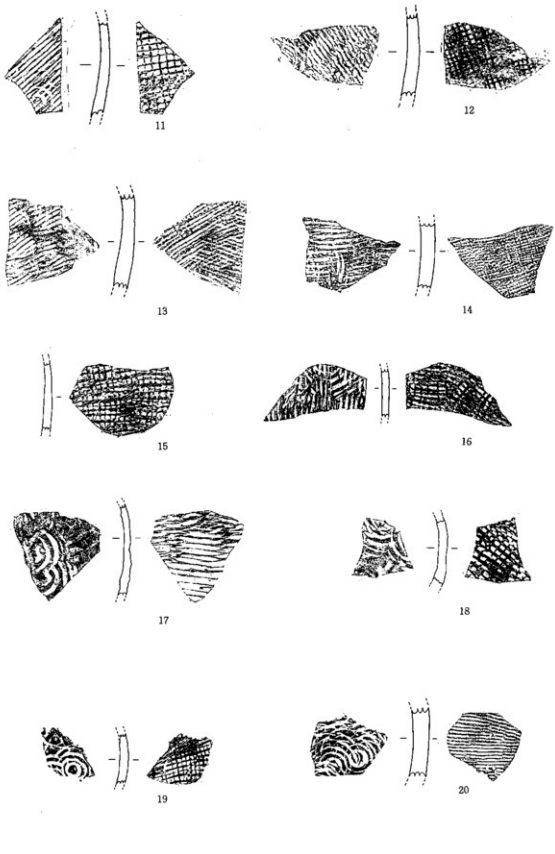
平均口径11.2cm、平均器高5.8cm、平均底径7.0cmを測る。4の器体は内弯するものの、やや直線気味に立ち上る。高台は底部端で、断面は三角形をなし、やや外反ぎみに。5の器体は内弯し、口縁部がやや外反する。高台は底部端に外反ぎみに貼り付けられている。いずれも平底で、器面が荒れている。

高台付埦Ⅱ類（6、7）

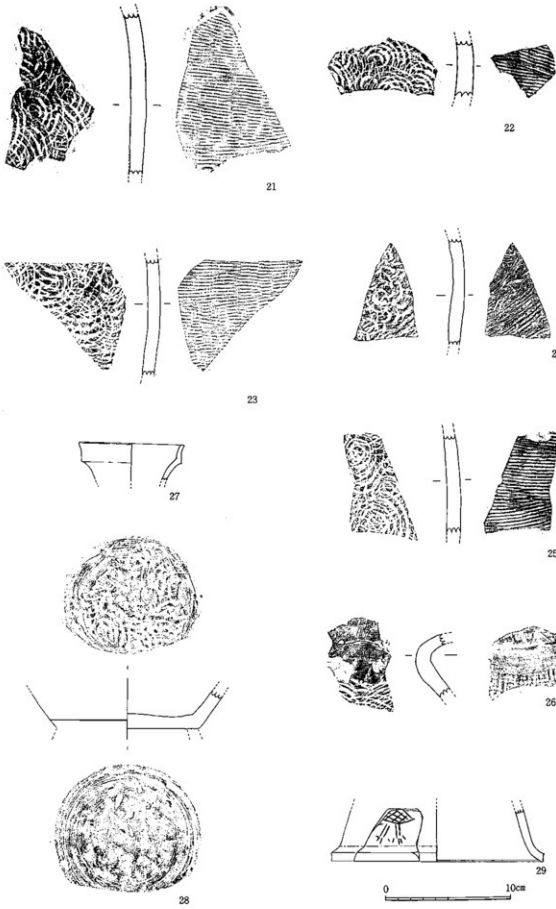
平均口径13.7cm、器高5.1cm、底径7.0cmを測る。高台付埦Ⅰ類よりも器高が低い。器体はやや直線気味に



第47図　須恵器実測図(1)



第48図　須恵器実測図(2)



第49図　須恵器実測図(3)

立ち上がり、口縁部がやや外反する。体部は、横ナデ調整による凸凹が目立つ。高台は底部端で、6は外反ぎみに、7はほぼ垂直に貼り付けられている。

(3)甕（8～26）（第47、48、49図）

8、9は甕形土器口縁部破片である。8の頸部は強くくびれ、口縁部は大きく外反して立ち上がり、口縁端部付近で鋭く屈曲して直立し、口唇部は丸く終る。頸部内外面ともハケ目調整し、口縁端部は横ナデ調整を施す。頸部外面に暗褐色の釉がみられる。9は撫肩で口縁部は外考気味に開く。口縁端部は欠損していて不明であるが、一部残存部の口縁部外面に3条の沈線がめぐらしてある。口縁部外面は平行タタキの後、ハケ目調整し、4本単位の櫛描波状文を2条めぐらしている。内面はハケ目調整が施されている。

10は甕口縁部から胴部にかけての破片である。頸部は強くくびれ、口縁部は大きく外反して立ち上がるが、口縁端部は欠損している。頸部から口縁部にかけての外面は格子目タタキの後、ナデ調整し、口縁近くに3㎜程度のヘラ状工具による波状沈線が描かれている。頸部と肩部のつぎ目付近はナデ調整で、肩部から胴部にかけては格子目タタキを施している。頸部から口縁部にかけての内面はハケ目調整され、頸部と肩部のつぎ目付近は指による調整後、ハケ目調整されている。肩部から胴部にかけての内面は、同心円タタキが施されている。

26は頸部破片である。頸部は強くくびれる。頸部内外面ともに横ナデ調整で、体部外面は格子目タタキ、内面は同心円タタキにより整形している。外面には褐灰色の釉がみられる。

11～25は胴部破片である。11の外面は格子目タタキ、内面は平行タタキで一部に同心円タタキが見られる。12の外面は格子目タタキ、内面は平行ナナキ。13の外面は平行タタキを主に、一部格子目タタキが見られる。内面は平行タタキである。14～16の外面は格子目タタキ、内面は平行タタキで、15の内面には黒色付着物が見まれ、16の内面は平行タタキの後、一部に同心円タタキが施されている。17の外面は平行タタキ、内面は同心円タタキと指圧痕らしきものが見られる。18～19の外面は格子目タタキ、内面は同心円タタキ調整である。20～25の外面は平行タタキで、22の外面は剝離が激しく、24は器面の摩滅が激しい。内面は同心円タタキで21の内面は剝離が激しい。

(4)壺（27、28）（第49図）

27は壺形土器口縁部破片である。口縁部は大きく外反して立ち上がり、口縁端部付近で屈曲して直立し、口唇部は丸く終る。調整は横ナデである。

28は高台付壺の底部である。底部は平底で、高台は剝離している。体部外面はヘラ削り調整で、内面は横ナデ調整である。内底部は同心円タタキ、外底はナデ調整を施している。

29は調査区外からの表採品であるが、円面硯の可能性があるので図示した。

脚部外面に鳥と思われるヘラ描があり、頭部は欠損して不明であるが、左向きと考えられる。脚台はやや外方に開き、裾部近くで外方に屈曲し、口唇部は角ばり終る。内外面とも横ナデ調整である。

5．土錘（第50図）

総数で27点出土しており、全て土師質で小型粘土筒状をしたものである。形態や若干の調整の違いによって3分類（Ⅰ～Ⅲ類）することができる。

Ⅰ類（1）

径と長さの比率を大きくもち、両端を筒切りしたものである。外面に、握った状態の指痕を残している。胎土は密で、焼成も良い、色調は赤褐色である。

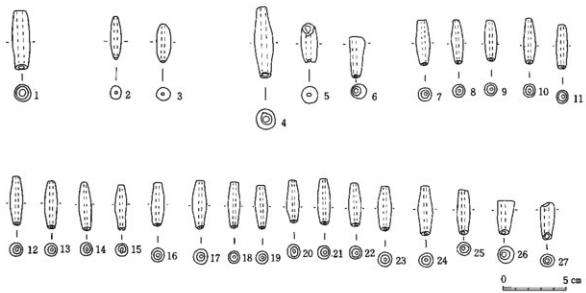
II類（2、3）

胴部の中央に最大幅をもつが、両端部に篦切り痕がなく細くすぼまる。胎土は密で、色調は暗灰色である。

III類（4～27）

胴部の中央に最大幅をもち、両端を篦切りし、径に対して長さをもつものである。量的に一番多く、さらに形の大小によって2種に分けられる。長さ55cm、直径1.4cm（平均）の大型品（4、5、6）と、長さ3.5cm（平均）直径1.0cm（平均）の小型品とがあり、とくに小型品の数が21点とまとまっている。いずれも胎土は密であるが、焼成、色調は一定していない。

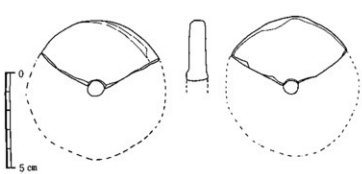
土錘の多くは、住居跡埋土内及びE－10区内のピット内からの出土であった。



第50図　土錘実測図

6．紡錘車（第51図）

直径約7.4cm、表裏ともよく研磨され褐灰色を呈し、中央に径8mmの孔を見る。胎土は粒子が細かく混砂も非常に少ない。焼成も良好である。



第51図　紡錘車実測図

註

(1) 菊池郡菊陽町辛川の辛川遺跡出土の土器を標式とするもので北久根山式土器の後続である。

(2) 八代郡竜北町の西平貝塚出土の土器を標式とするもので辛川式土器の後続である。

(3) 富田紘一氏の御教示による。

(4) 大川清　新版考古学講座「７」有史文化〈下〉雄山閣

(5) 福岡県立九州歴史資料館倉住靖彦氏の御教示による。

(6) 福岡県立九州歴史資料館森田勉氏の御教示による。

(7) 福岡県立九州歴史資料館森田勉氏の御教示による。
「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」第１～８集(下) 福岡県教育委員会。
大田幸博「肥後国分僧寺跡Ⅰ」熊本県教育委員会。

番号	出土遺構	層位	層類	器種	法量	胎土	焼成	色調	特徴
No. 1	C－7	土師		坏	口径 13.0cm 器高 3.3cm 底部径 7.5cm	粗 2～3mmの小石少 々混入	良好	にぶい黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ 底部はヘラ切り
＊ 2	C－5 黒色土 上面	土師		坏	口径 12.6cm 器高 3.3cm 底部径 7.6cm	粗	普通	橙色	内外ともに横ナデで底部は回転ヘラ切り、器面があれているに体部を中心に約4欠損
＊ 3	C－6 黒色土 上面	土師		坏	口径 12.4cm 器高 3.0cm 底部径 6.7cm	密	良好	にぶい橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ 底部は回転ヘラ切り
＊ 4	C－5 黒色土 上面	土師		坏	口径 12.6cm 器高 3.4cm 底部径 7.8cm	密 1mm前後の小砂が 微量混入	良好	にぶい橙色	内外ともに横ナデ 底部は回転ヘラ切り
＊ 5	C－5 黒色土 上面	土師		坏	口径 12.9cm 器高 3.0cm 底部径 7.2cm	密	良好	丹塗り （にぶい橙色）	内外ともに横ナデ 底部はヘラ切り 底部に墨書あり「大正」 外底部に板目圧痕あり
＊ 6	S B06 Pit135 堀方埋土	土師		坏	口径 13.0cm 器高 3.0cm 底部径 8.0cm	粗 0.1～1mm前後の 小砂が多く混入	良好	にぶい黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	底部は回転ヘラ切り 内面下端部はおまわりである 底部に「正」の墨書あり
＊ 7	C－6 黒色土 上面	土師		坏	口径 12.5cm 器高 2.8cm 底部径 6.7cm	密	良好	橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ 底部はヘラ切り 外底部に墨書あり「生」
＊ 8	C－5 黒色土 上面	土師		坏	口径 12.2cm 器高 2.6cm 底部径 7.5cm	密	良好	丹塗り （浅黄橙色）	内外ともに横ナデ 底部はヘラ切り 底部に墨書あり「正」 外底部に板目圧痕あり
＊ 9	C－6 黒色土 上面	土師		坏	口径 12.0cm 器高 2.8cm 底部径 7.6cm	密	良好	丹塗り （橙色）	内外ともに横ナデ 底部はヘラ切り
＊ 10	C－6 黒色土 上面	土師		坏	口径 12.8cm 器高 3.0cm 底部径 7.5cm	粗 2～3mmの小砂が 混入	良好	橙色	内外ともに横ナデ 底部はヘラ切り 外底部に板目圧痕あり
＊ 11	C－5	土師		坏	底部径 8.7cm	密	良好	丹塗り （浅黄橙色）	底部は回転ヘラ切り 底部に墨書あり「正」
＊ 12	SB09 Pit16 柱痕跡 埋土	土師		坏	底部径 8 cm	密	良好	浅黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ 底部は回転ヘラ切り 外底部に墨書あり「正」
＊ 13	C－5 黒色土 上面	土師		坏	底部径 8 cm	密	良好	丹塗り （橙色）	底部は回転ヘラ切り、内外共に横ナデ 底部の約ⅰ/₄が欠かない 外底部に墨書あり「正」
＊ 14	C－5 住居跡内	土師		坏	底部径 7.6cm	密	良好	にぶい橙色	内外ともに横ナデ 底部に墨書あり字不明（欠損のため）
＊ 15	C－5 黒色土 上面	土師		坏	口径 12.6cm 器高 3.6cm 底部径 8.0cm	密	良好	丹塗り （浅黄橙色）	内外ともに横ナデ、底部は回転ヘラ切り 口縁部約ⅰ/₄欠損 底部に墨書あり「大正」
＊ 16	C－6 黒色土 上面	土師		坏	口径 13.7cm 器高 3.2cm 底部径 8.1cm	密	良好	橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ 底部は回転ヘラ切り 約ⅰ/₄欠損
＊ 17	C－5 住居跡	土師		坏	口径 12.3cm 器高 3.0cm 底部径 6.0cm	密	良好	にぶい黄橙色	内外ともに横ナデ、底部は回転ヘラ切り 約ⅰ/₄しか欠い 底部に墨書あり「正」
＊ 18	C－5 住居跡 カマド	土師		坏	口径 12.8cm 器高 3.3cm 底部径 6.6cm	密	良好	橙色	内外ともに横ナデ 底部は回転ヘラ切り 外底部に板目圧痕あり
＊ 19	C－6 黒色土 上面	土師		坏	口径 12.4cm 器高 3.4cm 底部径 6.7cm	密	良好	浅黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外面ともに横ナデ調整 底部はヘラ切り 口縁部の2ヶ所約ⅰ/₄欠損
＊ 20	SB13 Pit14 堀方埋土	土師		坏	口径 12.4cm 器高 3.1cm 底部径 7.4cm	密	良好	丹塗り （橙色）	内外ともに横ナデ 底部は回転ヘラ切り 底部に墨書あり「上」 外底部に板目圧痕あり

第 8 表　土器観察一覧表

番号	出土遺構	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	特徴
No. 21	C－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 11.8cm 器高 2.9cm 底部径 6.5cm	密	良好	浅黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ 底部は回転ヘラ切り
＊22	B－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.8cm 器高 3.1cm 底部径 8.5cm	粗	普	によい黄橙色	内外ともに横ナデ 底部はヘラ切り
＊23	排土内	土師	坏	口径 12.6cm 器高 2.7cm 底部径 7.0cm	密	良好	褐色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ 底部は回転ヘラ切り 外底部に墨書あり「西正」
＊24	C－5 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.2cm 器高 2.9cm 底部径 7.0cm	粗	良好	橙色	内外ともに横ナデ 底部は回転ヘラ切り 底部から口縁部にかけて，黒色のススらしき付着物がある。 底部内部に指圧痕あり，約十欠損
＊25	SK01	土師	坏	口径 12.8cm 器高 2.8cm 底部径 8.0cm	密	良好	によい橙色	内外ともに横ナデ，底部は回転ヘラ切り 口縁部約十欠損
＊26	SK01	土師	坏	口径 12.8cm 器高 3.2cm 底部径 7.2cm	密	良好	橙色	内外ともに横ナデ 底部はヘラ切り　り
＊27	C－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 11.8cm 器高 3.4cm 底部径 6.6cm	密	良好	浅黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	底部は回転ヘラ切り 外底部に墨書あり「正」 内外ともに横ナデ
＊28	SB06 Pit11 南方埋土	土師	坏	口径 12.0cm 器高 3.3cm 底部径 8.0cm	粗 1mm前後の小砂を含む	良好	橙色	内外ともに横ナデ 底部は回転ヘラ切り 外底部に墨書あり「正」
＊29	SK01	土師	坏	口径 12.4cm 器高 3.3cm 底部径 6.4cm	密	良好	橙色	内外ともに横ナデ，底部は回転ヘラ切り 口縁部約十欠損
＊30	B－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.8cm 器高 3.0cm 底部径 8.0cm	密 0.1～4mmの砂粒を少々含む	良好	橙色	底部外面は回転ヘラ切り 内外ともに横ナデ 口縁部一部欠損 外底部に板目圧痕あり
＊31	C－5	土師	坏	口径 14.5cm 器高 3.1cm 底部径 9.0cm	密	普	によい黄橙色	内外ともに横ナデ 底部は回転ヘラ切り 器面が荒れている
＊32	C－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 13.1cm 器高 3.4cm 底部径 6.8cm	密	良好	丹塗り (によい橙色)	内外ともに横ナデ 底部はヘラ切り
＊33	SB09 Pit10 桂住取穴埋土	土師	坏	口径 13.4cm 器高 3.4cm 底部径 8.2cm	密	良好	によい黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ 底部はヘラ切り 外底部に墨書あり「正」
＊34	C－6	土師	坏	口径 13.4cm 器高 3.4cm 底部径 7.7cm	粗 2mm前後の小砂少々混入	良好	橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外両面ともに，横ナデ・底部はヘラ切り約十現存 外底部に墨書あり「正」
＊35	SB02 Pit16 南方埋土	土師	坏	口径 13.0cm 器高 3.3cm 底部径 6.5cm	密	良好	橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ 内部底部は，右回転 底部はヘラ切り 外底部に墨書あり「正」
＊36	C－5 黒色土 上面	土師	坏	口径 13.0cm 器高 3.0cm 底部径 8.0cm	密 0.1～1mm程の砂粒少々混入	良好	丹塗り (によい黄橙色)	内外ともに横ナデ 底部は回転ヘラ切り 外底部に墨書あり「正」
＊37	SB06 Pit141 南方埋土	土師	坏	口径 12.4cm 器高 2.9cm 底部径 7.0cm	密	良好	丹塗り (によい橙色)	内外ともに横ナデ，底部はヘラ切り 外底部に板目圧痕あり
＊38	B－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.8cm 器高 3.1cm 底部径 7.0cm	密 1mm前後砂粒混入	良好	によい橙色	内外両面とも横ナデ 底部外面はヘラ切り 口縁部一部欠損 外底部に板目圧痕あり
＊39	B－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.8cm 器高 3.0cm 底部径 7.5cm	粗	良好	橙色	内外ともに，横ナデ 底部はヘラ切り
＊40	SB09 Pit10 桂住取穴埋土	土師	坏	口径 12.6cm 器高 3.1cm 底部径 6.3cm	0.1～0.2mmの小砂が多く混入	良好	丹塗り (によい橙色)	内外ともに横ナデ 底部はヘラ切りと思われる

第 9 表　土器観察一覧表

番号	出土遺構	種類	器種	法量	粘土	焼成	色調	特徴
No. 41	B－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.8cm 器高 3.0cm 底部径 7.0cm	粗	普	橙色	内外ともに、横ナデ 底部は、回転ヘラ切り
42	SB 05 Pit 101	土師	坏	口径 13.8cm 器高 3.3cm 底部径 7.0cm	密	良好	橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外とも横ナデ 底部は回転ヘラ切り 外底部に墨書あり「大正」
No. 43	C－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.3cm 器高 3.0cm 底部径 7.0cm	密	良好	浅黄橙色	内外ともに、横ナデ 底部は回転ヘラ切り
＊44	B－5 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.8cm 器高 3.0cm 底部径 7.5cm	密	良好	橙色	内外ともに、横ナデ 底部はヘラ切り 外底部に板目圧痕あり
＊45	C－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 15.2cm 器高 3.7cm 底部径 8.0cm	密	良好	丹塗り （にぶい橙色）	内外ともに、横ナデ 底部は回転ヘラ切り
＊46	C－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 11.4cm 器高 2.5cm 底部径 5.9cm	密 1mm前後の砂少々混入	良好	丹塗り （橙色）	内外ともに、横ナデ 底部は回転ヘラ切り
＊47	SB 15 Pit 106 掘方堀土	土師	坏	口径 13.1cm 器高 3.4cm 底部径 8.1cm	粗 1mm前後の小砂を多くふくむ	良好	丹塗り （にぶい橙色）	内外ともに、横ナデ 底部はヘラ切り 外底部に板目圧痕あり
＊48	C－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 13.3cm 器高 3.1cm 底部径 8.0cm	密 1mm前後の小砂混入	良好	橙色	内外ともに横ナデ 底部はヘラ切り 外底部に板目圧痕あり
＊49	C－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.5cm 器高 3.5cm 底部径 7.8cm	密 2mm程の砂少々混入	良好	丹塗り （にぶい橙色）	内外ともに横ナデ 底部外面は、ヘラ調整あり
＊50	B－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.8cm 器高 3.0cm 底部径 7.8cm	密 0.1～3mmの砂粒混入	良好	橙色	内外ともに横ナデ 底部はヘラ切りで そと脇と思われる3点あり 口縁部一部欠損
＊51	C－5 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.4cm 器高 3.0cm 底部径 7.2cm	密	良好	浅黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに、横ナデ 底部はヘラ切り 外底部に板目圧痕あり
＊52	B－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.8cm 器高 3.2cm 底部径 7.5cm	密	良好	橙色	内外ともに、横ナデ 底部はヘラ切り 外底部に板目圧痕あり
＊53	C－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.4cm 器高 3.1cm 底部径 7.3cm	密	良好	丹塗り （橙色）	内外ともに、横ナデ 底部は、回転ヘラ切り 底部に墨書あり「生」約十現存
＊54	C－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.2cm 器高 3.3cm 底部径 7.0cm	粗	普	浅黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ 外底部は、回転ヘラ切り 底部に墨書あり「生」 口縁部は約十欠損
＊55	C－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.8cm 器高 3.5cm 底部径 6.4cm	密	良好	丹塗り （橙色）	内外ともに、横ナデ 底部はヘラ切り 外底部に板目圧痕あり
＊56	B－9 黒色土 上面	土師	坏	底部径 7.3cm	密	良好	橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外両面ともに、横ナデ 底部は、回転ヘラ切り 底部十欠損 外底部に板目圧痕あり
＊57	SB 06 Pit 11 掘方堀土	土師	坏	底部径 6.8cm	密	良好	にぶい黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	底部は、回転ヘラ切りである 外底部に墨書あり「正」 外底部に板目圧痕あり
＊58	C－5 黒色土 上面	土師	坏	底部径 8.2cm	密	良好	丹塗り （浅黄橙色）	内外ともに横ナデ 底部は回転ヘラ切り 約十しかない 外底部に墨書あり「生」
＊59	SB04内	土師	坏	底部径 7.5cm	粗 0.1～1mmの小砂少々混入	良好	丹塗り （にぶい黄橙色）	底部はヘラ切り
＊60	C－5 住居跡内	土師	坏	底部径 7.0cm	密	良好	丹塗り （橙色）	底部はヘラ切り 外底部に墨書あり「大」

第 10 表　土器観察一覧表

番号	出土遺構	種類	番種	法量	胎土	焼成	色調	特徴
No. 61	C－5 黒色土 上面	土師	坏	底部径 9.0cm	密	良好	にぶい黄橙色	底部は、回転ヘラ切り 底部に墨書あり「四ヶ」 底部が約そしかない
＊ 62	SB05 Pit 3 掘方埋土	土師	坏	底部径 8.0cm	密	良好	丹塗り （橙色）	手法不明 底部はヘラ切りと思われる 底部に墨書あり、字不明
＊ 63	C－5 住居 内	土師	坏	口径 11.6cm 器高 3.0cm 底部径 6.0cm	密	良好	にぶい橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに、横ナデ 底部は、回転ヘラ切り 約そしかない 外底部に墨書あり「大」
＊ 64	SB09 Pit 12 掘方埋土	土師	坏	底部径 7.4cm	密	良好	丹塗り （橙色）	底部は、回転ヘラ切り 横ナデと思われる
＊ 65	C－5 黒色土 上面	土師	坏	底部径 6.9cm	密	良好	丹塗り （橙色）	底部は、回転ヘラ切り
＊ 66	C－5 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.5cm 器高 2.9cm 底部径 7.6cm	密	良好	淡黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに、横ナデ 底部は、回転ヘラ切り
＊ 67	B－5 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.6cm 器高 2.9cm 底部径 8.1cm	密	良好	にぶい橙色	内外ともに、横ナデ 底部は、回転ヘラ切り 外底部に板目圧痕あり
＊ 68	E－10 Pit 111 掘方埋土	土師	坏	口径 12.2cm 器高 2.6cm 底部径 6.6cm	細 1mm程度の小砂が多く混入	良好	にぶい橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに、横ナデ 底部は、回転ヘラ切り 外底部に板目圧痕あり
＊ 69	C－5 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.6cm 器高 3.0cm 底部径 7.3cm	密	良好	にぶい橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに、横ナデ 底部は、回転ヘラ切り 外底部に墨書あり「正」
＊ 70	掛土内	土師	坏	口径 12.0cm 器高 3.3cm 底部径 8.0cm	密	良好	橙色	内外ともに、横ナデ 底部は、摩滅が激しく、不明
＊ 71	SB06 Pit 6 掘方埋土	土師	坏	底部径 7.2cm	密	良好	淡黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	底部は、回転ヘラ切り
＊ 72	C－5 住居址内	土師	坏	底部径 6.7cm	密	良好	にぶい黄橙色	調整、横ナデ 底部はヘラ切り 外底部に墨書あり「正」
＊ 73	掛土内	土師	坏	底部径 8.8cm	密	良好	橙色 外底部をのぞき丹塗り	手法不明 底部は、回転ヘラ切り 外底部に墨書あり「宇」不明
＊ 74	C－5 黒色土 上面	土師	坏	底部径 7.6cm	密	良好	淡黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	底部は回転ヘラ切り 約そしかない 外底部に墨書あり「宇」不明
＊ 75	C－5 黒色土 上面	土師	坏	底部径 6.5cm	密	良好	にぶい赤橙色 外底部をのぞき丹塗り	底部は、回転ヘラ切り 外底部に墨書あり「大」
＊ 76	掛土内	土師	坏	底部径 7.2cm	密	良好	橙色 外底部をのぞき丹塗り	手法不明 底部は、回転ヘラ切り 外底部に墨書あり「正」
＊ 77	SB06 Pit 3 柱痕跡内	土師	坏	口径 11.2cm 器高 2.9cm 底部径 5.0cm	密	良好	橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに、横ナデ
＊ 78	C－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 13.0cm 器高 3.0cm 底部径 8.3cm	粗	良好	橙色	内外両面とも、横ナデで外側は器面が荒れており、茶褐色の付着物あり 底部は、ヘラ切り 約そ現存
＊ 79	C－5 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.8cm 器高 3.3cm 底部径 6.6cm	密	良好	丹塗り （橙色）	内外とも、横ナデ 底部は、ヘラ切り 外底部に墨書あり「大正」 外底部に板目圧痕あり
＊ 80	C－5 黒色土 上面	土師	坏	口径 11.6cm 器高 3.6cm 底部径 6.5cm	密	良好	丹塗り （にぶい橙色）	内外ともに、横ナデ 底部は、回転ヘラ切り 約そしかない

第 11 表　土器観察一覧表

番号	出土遺構	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	特徴
＊81	C－5 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.0cm 器高 3.0cm 底部径 7.2cm	密	良好	橙色	内外ともに横ナデ 底部は回転ヘラ切り
82	SB04 Pit106 板方埋土	土師	坏	口径 12.1cm 器高 3.2cm 底部径 7.3cm	密	良好	にぶい橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ 底部は回転ヘラ切り 外底部に墨書あり「正」
＊83	排土内	土師	坏	口径 12.3cm 器高 3.3cm 底部径 6.8cm	密	良好	丹塗り (橙色)	内外ともに横ナデ 底部は回転ヘラ切り 底部に板目圧痕あり
＊84	SB13 一括	土師	坏	口径 12.2cm 器高 3.2cm 底部径 6.7cm	密	良好	丹塗り (にぶい橙色)	底部は回転ヘラ切り 内外ともに横ナデ
＊85	C－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.6cm 器高 3.5cm 底部径 6.7cm	粗	良好	丹塗り (橙色)	内外ともに横ナデ 底部は回転ヘラ切り 外側の約⅓にスス付着 外底部に墨書あり「正」
＊86	B－6	土師	坏	口径 12.5cm 器高 3.4cm 底部径 6.0cm	密	良好	橙色	内外ともに横ナデ，底部は回転ヘラ切り 口縁部約⅓欠損 外底部に板目圧痕あり
＊87	C－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 11.2cm 器高 3.4cm 底部径 5.8cm	密	良好	丹塗り (浅黄橙色)	内外ともに横ナデ 底部はヘラ切り，約⅓欠損
＊88	C－6	土師	坏	口径 13.6cm 器高 2.7cm 底部径 6.5cm	密	良好	丹塗り (にぶい橙色)	内外面ともに横ナデ，外側に小石が上下に動いた跡あり 底部はヘラ切り 約⅓現存
＊89	D－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.8cm 器高 3.2cm 底部径 7.0cm	密	良好	橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ 底部はヘラ切り 外底部に墨書あり「上」
＊90	C－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.3cm 器高 3.1cm 底部径 6.3cm	密	良好	丹塗り (にぶい橙色)	内外ともに横ナデ 底部は回転ヘラ切り 約⅓欠損
＊91	SB13 Pit 101	土師	坏	口径 12.0cm 器高 3.1cm 底部径 5.6cm	密	良好	にぶい黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ 底部はヘラ切り 外底部に墨書あり，字不明
＊92	C－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 12.0cm 器高 2.5cm 底部径 5.2cm	密	良好	丹塗り (浅黄橙色)	内外ともに，横ナデ 底部は回転ヘラ切り 約⅓現存
＊93	C－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 13.0cm 器高 3.5cm 底部径 7.0cm	密	良好	丹塗り (浅黄橙色)	内外ともに横ナデ 内外に指圧あり 底部はヘラ切り
＊94	C－6 黒色土 上面	土師	坏	口径 11.6cm 器高 3.3cm 底部径 6.7cm	粗	良好	赤褐色	内外ともに横ナデ，底部はヘラ切り 約⅓現存 外底部に板目圧痕あり 外底部に墨書あり「正」
＊95	C－5 黒色土 上面	土師	坏	口径 11.0cm 器高 3.2cm 底部径 5.5cm	密	良好	にぶい黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに，横ナデ，内側口縁部に黒い付着物あり， 底部はヘラ切り， 約⅓しかない， 外底部に墨書あり字不明
＊96	C－6	土師	坏	口径 12.4cm 器高 3.2cm 底部径 6.0cm	密	良好	浅黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ 底部はヘラ切り 外底部に墨書あり「大×」
＊97	C－6 黒色土 上面	土師	坏	底部径 6.4cm	密	良好	浅黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに，横ナデ 底部は回転ヘラ切り 外底部に墨書あり「西正」
＊98	SB09 Pit 17 桂抜取穴 埋土	土師	坏	底部径 7.2cm	密	良好	にぶい橙色 外底部をのぞき丹塗り	底部はヘラ切りと思われる 外底部に墨書あり「○正」
＊99	C－5 住居跡 カマド	土師	坏	底部径 6.8cm	密	良好	にぶい橙色 外底部をのぞき丹塗り	底部はヘラ切りと思われる 外底部に墨書あり，字不明
＊100	SB07 Pit 14 薬方埋土	土師	坏	底部径 8.2cm	密	良好	にぶい黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	横ナデ 外底部に墨書あり，字不明 (欠損のため)

第 12 表　土器観察一覧表

番号	出土遺構	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	特徴
No.101	SB08内	土師	坏	底部径 8.0cm	密	良好	にぶい褐色 外底部をのぞき丹塗り	外側は横ナデ、内側は底部をのぞいて刺殻（表面）しており手法不明 底部は、回転ヘラ切りである。
＊102	B－9 黒色土 上面	土師	坏	底部径 7.0cm	密	良好	にぶい褐色 外底部をのぞき丹塗り	底部はヘラ切り 内外ともに横ナデ 砂土しかない 外底部に墨書あり、字不明
＊103	SB16 Pit 11 掘方埋土	土師	坏	底部径 7.2cm	粗 2～3mmの小石が混入	普	にぶい橙色	内外ともに器面が荒れている 底部は回転ヘラ切り
＊104	SB16 Pit 11 掘方埋土	土師	坏	底部径 8.0cm	密	良好	丹塗り （浅黄橙色）	底部はヘラ切り 底部から胴部にかけての部分に粘土の固まりがついている 手法不明
＊105	C－5 住居跡内	土師	坏	底部径 8.2cm	粗 6mm前後の小石が混入	良好	にぶい黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	底部は回転ヘラ切りと思われる 底部に墨書あり「正」と思われる 墨書後丹塗り
＊1	SB06 Pit115 掘方埋土	土師	高台付 埦	高台口径 8.8cm ＊高 0.8cm	0.1mm前後の小砂が多く混入している	良好	にぶい褐色 外底部をのぞき丹塗り	底部は回転ヘラ切りの後、貼り付け高台で、貼り付部分は内外ともにナデ調整しているが、外側には貼り付けの線が残っている。
＊2	E－10 Pit 105 掘方埋土	土師	高台付 埦	高台口径 8.8cm ＊高 0.9cm	密	良好	黄灰色	底部は回転ヘラ切りと思われる 高台は貼り付け後、ナデ調整してある。 貼り付け部分に（外側）ヒビがある
＊3	SB06 Pit 136	土師	高台付 埦	口径 14.2cm 器高 6.5cm 高台口径 7.9cm ＊高 0.8cm	密	良好	にぶい橙橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ調整 高台を貼り付け後、接合部をナデ調整している 内部器面に黒色付着物あり（灯明に使用か） 外底部に墨書あり「生」
＊4	C－6 黒色土 上面	土師	高台付 埦	口径 13.8cm 器高 6.0cm 高台口径 7.8cm ＊高 1.0cm	密 2～3mmの小砂、混入	良好	にぶい黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ 底部は貼り付け高台 高台貼り付け後ナデ調整 外底部に墨書あり「正」
＊5	SB15 Pit 5 掘方埋土	土師	高台付 埦	口径 13.6cm	密	良好	丹塗り （にぶい橙色）	調整内外ともに横ナデ 外側器壁に墨書あり「大」
＊6	SB15内	土師	高台付 埦	口径 12.5cm 器高 5.7cm 高台口径 8.4cm ＊高 0.7cm	密	良好	橙色	内外ともに横ナデ 高台は貼り付けで、外側貼り付け部分にヒビが入っている。内側貼り付け部分はナデ調整している。 埦の内側口縁部付近に小さなキンドのかたまりがついている。 外底部に板目圧痕あり
＊7	SB06 Pit 3 柱痕跡内	土師	高台付 埦	口径 14.2cm 器高 9.6cm 高台口径 5.6cm ＊高 2.3cm	密 1～3mm前後の砂粒が多く混入	普	橙色	器面が荒れている 内外ともに横ナデ、底部は回転ヘラ切り後、貼り付け高台があり、貼り付け後、内外とも貼り付け部分はナデ調整している。
＊8	C－6 黒色土 上面	土師	高台付 埦	高台口径 7.0cm ＊高 1.2cm	密	良好	にぶい橙色 外底部をのぞき丹塗り	底部は回転ヘラ切り 高台貼り付けの後ナデ調整 外底部に墨書あり「正」
＊9	C－5 住居跡	土師	高台付 埦	高台口径 8.2cm ＊高 0.7cm	密	良好	褐色 外底部をのぞき丹塗り	底部は回転ヘラ切りの後、貼り付け高台をし、ナデ調整している。 外底部に墨書あり「大正」
＊10	SB06 Pit 11 柱痕跡	土師	高台付 埦	高台口径 6.8cm ＊高 1.1cm	密	良好	橙色 外底部をのぞき丹塗り	内底部は右まわりのナデ跡あり 底部はヘラ切り後貼り付け高台があり、貼り付け後ナデ調整している（内外共）
＊11	SB06 Pit 6 掘方埋土	土師	高台付 埦		密	良好	にぶい橙色 外底部をのぞき丹塗り	底部は回転ヘラ切りで、高台貼り付け後、ナデ調整している。 外底部に「正」の墨書あり
＊12	表採	土師	高台付 埦	高台口径 7.5cm ＊高 0.9cm	密	良好	橙色 外底部をのぞき丹塗り	底部は回転ヘラ切り 貼り付け高台で貼り付け後、内外ともにナデ調整 底部に墨書あり「正」
＊13	18T 表土層内	土師	高台付 埦	高台口径 7.3cm ＊高 1.1cm	密 0.1mm～1mm前後の小砂多く混入	普	浅黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	底部は回転ヘラ切り 高台貼り付け後ナデ調整 外底部に墨書あり「暗上」
＊14	排土内	土師	高台付 埦	高台口径 7.6cm ＊高 0.8cm	密	良好	にぶい黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	底部はヘラ切りと思われる高台貼り付け後、内外ともナデ調整されている。 外底部に墨書あり「大正」

第 13 表　土器観察一覧表

番号	出土遺構	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	特徴
＊15	C－5 黒色土 上面	土師	高台付埦	高台口径 7.8cm ＊高 1.35cm	密	良好	にぶい橙色 外底部をのぞき丹塗り	底部は回転ヘラ切りで貼り付高台をもつ 外底部に墨書あり「生」
＊16	捺土内	土師	高台付埦	高台口径 7.7cm ＊高 0.7cm	密	良好	橙色 外底部をのぞき丹塗り	底部は回転ヘラ切り 高台貼り付後、貼り付け部分はナデ調整 外底部に墨書あり「西正」
＊1	C－6	土師	鼠	口径 14.4cm 器高 1.8cm 底部径 9.0cm	密	良好	丹塗り （橙色）	内外ともに横ナデ 底部はヘラ切り、外底部に墨書あり 「大正」約＋現存 外底部に板目圧痕あり
＊2	C－5 住居跡内	土師	鼠	口径 12.8cm 器高 1.8cm 底部径 7.5cm	粗 1mm前後の小砂が多く	不良	灰白色	内外ともに横ナデ 底部は回転ヘラ切り
＊3	C－5 黒色土 上面	土師	鼠	口径 18.2cm 器高 1.7cm 底部径 13.0cm	粗 0.1～1mm前後の小砂が多く混入	普	灰黄色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ、底部は回転ヘラ切り、底部にヘラ記号ありZ 器面があれている
＊4	C－5 黒色土 上面	土師	鼠	口径 14.6cm 器高 2.0cm 底部径 10.8cm	密	良好	丹塗り （にぶい橙色）	内外ともに、横ナデ 底部は回転ヘラ切り 外底部に板目圧痕あり
＊5	C－6 黒色土 上面	土師	鼠	口径 12.0cm 器高 1.6cm 底部径 7.0cm	粗	普	灰白色	内外両面ともに、横ナデで器面があれている 底部は回転ヘラ切り 約＋現存
＊6	C－5 黒色土 上面	土師	鼠	口径 13.6cm 器高 2.8cm 底部径 8.0cm	密	良好	丹塗り （橙色）	底部は回転ヘラ切り 内外ともに横ナデ 外底部に墨書あり「正」
＊7	C－6 黒色土 上面	土師	高台付鼠	口径 13.6cm 器高 3.0cm 底部径 8.2cm 高台口径 0.8cm	密	良好	橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ 高台貼り付け後接合部をナデ調整 口縁部がクケ所欠損
＊8	C－5 黒色土 上面	土師	高台付皿	口径 14.0cm 器高 2.9cm 高台口径 8.6cm ＊高 0.8cm	密	良好	橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ 底部はヘラ切り、高台貼り後接合部をナデ調整
＊9	C－5 黒色土 上面	土師	高台付皿	口径 13.2cm 器高 3.3cm 高台口径 6.5cm ＊高 0.6cm	密	良好	にぶい褐色 外底部をのぞき丹塗り	底部は回転ヘラ切りの後、高台貼り付けで、つけ根の部分をナデ調整している。外底部に 墨書あり字、不明。
＊10	C－6 黒色土 上面	土師	高台付皿	口径 13.0cm 器高 3.7cm 高台口径 8.6cm ＊高 0.8cm	密	良好	橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ 底部はヘラ切り、高台貼り付けの後ナデ調整 約＋現存
＊11	C－5 黒色土 上面	土師	高台付皿	口径 13.7cm 器高 3.8cm 高台口径 7.2cm ＊高 0.6cm	粗	良好	にぶい黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ 底部は貼り付高台 外底部に墨書あり「大正」
＊12	C－6 黒色土 上面	土師	高台付皿	口径 14.0cm 器高 3.7cm 高台口径 7.2cm ＊高 0.5cm	密	良好	にぶい橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ 底部は高台貼り付で、貼り付け部分にヒビがある。 口縁部を中心に約＋欠損
＊13	SB09 Pit 7 堀方埋土	土師	高台付皿	口径 15.0cm 器高 4.1cm 高台口径 8.2cm ＊高 0.8cm	密	良好	にぶい黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	高台は貼り付けで、外側部分の貼り付け部分に一部ヒビあり、内側は貼り付け後ナデ調整している。 外底部に墨書あり「大×」
＊14	C－6 黒色土 上面	土師	高台付鼠	口径 16.0cm 器高 3.6cm 高台口径 9.3cm ＊高 0.8cm	密	良好	浅黄橙色	器面が荒れていて、よくわからないが横ナデと思われる 底部は貼り付け高台で、貼り付け部分にヒビがみられる 約＋現存
＊15	D－6 黒色土 上面	土師	高台付皿	口径 15.0cm 器高 4.2cm 高台口径 8.7cm ＊高 0.6cm	粗	良好	橙色	底部に貼り付け高台 外側貼付け部分に一部ヒビがある 外底部に板目圧痕あり
＊16	C－6 黒色土 上面	土師	高台付鼠	口径 13.0cm 器高 3.5cm 高台口径 7.6cm ＊高 0.8cm	粗	良好	にぶい橙色 外底部をのぞき丹塗り	内外ともに横ナデ 底部は回転ヘラ切り 高台貼り付け後、ナデ調整 高台貼り付け部分にヒビあり 口縁部を中心に約＋欠損
＊17	SB10 Pit 8 柱痕跡内 埋土	土師	高台付鼠	口径 13.7cm 器高 3.5cm 高台口径 7.2cm ＊高 1.5cm	密 1mm前後の小砂が多く混入	良好	浅黄橙色	内外ともに横ナデ 底部は回転ヘラ切り後貼り付け 高台があり、貼り付け後、ナデ調整している 外側に一条の小さなヒビがみられる

第 14 表　土器観察一覧表

番号	出土遺構	種類	器種	法量	胎土	焼成	色調	特徴
＊ 18	C－7 黒色土 上面	土師	高台付皿	高台口径 9.2cm 高台高 1.35cm	密	良好	具橙色	底部はヘラ切り後、貼り付け高台 貼り付け部分の内側にヒビがある。
＊ 19	C－5 黒色土 上面	土師	高台付皿	高台口径 8.4cm ＊ 高 1.1cm	密	良好	橙色 外底部をのぞき丹塗り	底部に貼り付け高台があり 外底部に回書あり 字不明
＊ 20	SB05 pit 8 掘方埋土	土師	高台付皿	高台口径 9.0cm ＊ 高 1.0cm	密	良好	橙色	器面が荒れている。底部は回転ヘラ切り 貼り付け高台があり、貼り付け後ナデ調整している。
＊ 21	SB09 pit 17 柱抜取穴 堀土	土師	高台付皿	高台口径 8.6cm ＊ 高 0.7cm	密	良好	浅黄橙色 外底部をのぞき丹塗り	底部は回転ヘラ切り後、貼り付け高台がある。貼り付け 後内外ともにナデ調整している。外面にヒビがみられる 外底部に墨書あり「大」
表 1	C－6	須恵	坏	口径 12.4cm 器高 3.2cm 底部径 6.8cm	密 5mm前後の小石 が1個混入	良好	褐灰色	内外ともに横ナデ 底部はヘラ切り 約¼残存
＊ 2	C－5 黒色土 上面	須恵	坏	口径 12.0cm 器高 3.3cm 底部径 5.2cm	粗	良好	褐灰色	内外共に横ナデで底部は回転ヘラ切り 底部は約¼回縁部は欠しか残っていない。 外底部に板目圧痕あり
＊ 3	13トレンチ 内	須恵	坏	口径 12.4cm 器高 3.2cm 底部径 7.5cm	密	良好	褐灰色	内外ともに、横ナデ 底部はヘラ切り調整あり 約¼残存
＊ 4	SB04 pit 9 柱穴壁 密着	須恵	高台付埦	口径 12.0cm 器高 5.8cm 高台口径 7.2cm ＊ 高 0.6cm	密 1mm前後の小砂 が多く混入	不良	灰白色	内外とも横ナデと思われる。 底部は高台貼り付け後、内外ともナデ調整している。 外面（貼り付け部分）にヒビがいっている。外底部に墨書 あり「大足」と思われる。器面が全体的に荒れている。
＊ 5	C－6 黒色土 上面	須恵	高台付埦	口径 10.4cm 器高 5.7cm 高台口径 6.7cm ＊ 高 0.8cm	密	不良	黄灰色	内外ともに横ナデ 底部は回転ヘラ切り、底部に貼り付け高台があり、貼り 付け部分にヒビあり
＊ 6	SB10 pit 7 柱抜取穴 堀土	須恵	高台付埦	口径 13.4cm 器高 5.1cm 高台口径 7.0cm ＊ 高 0.8cm	密	不良	灰黄色	底部は回転ヘラ切りの後、高台を貼り付けている。貼り 付け後、ナデ調整しているが外側にヒビが入っている。 内面に黒色斑点物あり
＊ 7	E－10	須恵	高台付埦	口径 14.0cm 器高 4.8cm 高台口径 7.0cm ＊ 高 1.0cm	密	不良	灰黄色	内外ともに横ナデ 底部はワレていて、不明
＊ 8	SB04 Pit1 柱与埋土	須恵	甕	口径 42cm	密	良好	表は暗褐色の釉 裏は褐灰色	甕の口頸部破片 ハケによるナデ調整（裏） ロクロ使用
＊ 9	SB06 Pit 3	須恵	甕		密	良好	灰白色	外器面、叩きの後ナデ調整、また2列の櫛描波状文が施 されている 内器面、刷毛目がみられる
＊ 10	B－7 Pit12	須恵	甕		密	良好	褐灰色	外器面は格子目タタキの後、調整。口縁部近くに波状文 線文が施されている 内器面は同心円タタキが見られる
＊ 11	F－11 Pit 124	須恵	甕		密	良好	表、暗赤褐色 裏、暗灰色	叩きは表が格子文。裏は平行線文が主で、一部に同心円 文がみえる 表は釉の可能性
＊ 12	SB17 Pit101	須恵	甕		密	良好	褐灰色	表器面、格子状の叩き痕 裏は斜め方向の叩き痕 上下関係がよくわからない
＊ 13	F－11 Pit 130	須恵	甕		密	良好	裏は明赤褐色 表は裏よりやや暗い	表裏とも黒いもの（ススか 墨？）が付着している。 叩き目は表裏とも平行線文 胎土中に黒い砂粒を含む
＊ 14	SB17 Pit101	須恵	甕		密	良好	表はにぶい赤色 裏は灰黄褐色	叩き目は表は格子状のもので一部に非常に鮮明な部分あ り。 裏は平行線文であるが、別の叩き（同心円文？）が見え る。

第 15 表　土器観察一覧表

番号	出土遺構	層位	器種	法量	胎土	焼成	色調	特徴
No. 15	F－11 Pit 127	諸磯	鉢		密	良好	灰黄色	器壁は非常にうすい 表は格子状叩き痕に一部斜めの条痕（ひっかき傷）がみられる。この条痕が先に施されている。 表は横方向の叩き痕に黒っぽい黒色付着物がつまっている。
〃 16	SB 06 Pit 6 又は Pit 108	諸磯	鉢		密	良好	表は暗赤色と褐灰色	表は格子状、裏は平行線文を施した後同心円文を施したと思われる。 胎土中に浜礫の小粒を含む。
〃 17	SB 09 Pit 12	諸磯	鉢		密	良好	表、にぶい赤褐色 裏は褐色	叩き目は磨滅しているが、表に平行線文を施した後条痕が裏は同心円文であり、ススの付着がみられる。
〃 18	SB 01 Pit 5 柱痕跡内	諸磯	鉢		密	良好	表、にぶい褐色 裏は橙色	叩き目は、表は格子文 裏は同心円文で指による調整痕がみられる。
〃 19	D－6	諸磯	鉢		密	やや不良	表、にぶい赤褐色 裏は灰褐色	叩き目は表は格子文であり、左右両端に擦痕がみられる 裏は同心円文である。両上部は欠損
〃 20	SB 05 Pit 1	諸磯	鉢		密	やや不良	表はにぶい黄褐色 裏は黄よりやや明るい	叩きは、表は平行線文（表面に小砂が視われている）・ 裏は同心円文 胎土中に径1－2㎜の黒小砂を含む。
〃 21	SB 06 Pit 3 柱痕跡	諸磯	鉢		密	良好	灰色	裏は剥落が激しい 叩き目は表が平行線文裏が同心円文である。 なお、下部左方は欠損している。 胎土中に黒い小粒を含む。
〃 22	SB 06 Pit 3	諸磯	鉢		密	良好	表は灰色 裏は明褐灰色	胎土中に極めて小さい黒色粒を含む。 叩き目は表は平行線文裏は同心円文である。 表裏とも剥落がみられ、特に表がはげしい。
〃 23	SB 06 Pit 3 柱痕跡	諸磯	鉢		密 1－2㎜程度の小砂を含む	良好	表、褐灰色 裏はにぶい褐色	叩きは表が平行線文 裏は同心円文
〃 24	SB 09 Pit 17 柱抜取穴	諸磯	鉢		密	良好	表、灰赤色 裏は橙色	表に平行線文の叩き文が明らかに 裏、同心円状の叩き痕の後、指で調整したと思われる。
〃 25	SB 05 Pit 1	諸磯	鉢		密 かすかに砂を含む	良好	褐灰色	表器面は横方向の叩き痕 裏は同心円状の叩き痕
〃 26	SX01 堀土一括	諸磯	鉢		密	良好	表、褐灰色の粘 裏は灰白色	表、格子状、裏に同心円状の叩き痕が一部にみられる。
〃 27	C－5	諸磯	壺	口 径 8.4㎝	密	良好	灰色	ロクロ調整 器壁が非常にウスい。
〃 28	1 Pit 137	諸磯	壺		密	良好	表、にぶい褐色 裏は灰黄色	ロクロ仕上げ 底台がはずれた屈底器底部 内底部に同心円状の叩き痕
〃 29	表採	諸磯	円面硯？	高台口径17㎝	密	良好	表面、明赤褐色で中が黒灰色のサンドイッチ状をなす	ロクロ調整 鳥（？）・獣脚と足の部分と思われる透絵面がみられる欠けた部分にスカシと思われる部分がある。

第 16 表　土器観察一覧表

第 17 表　土錘一覧表

番号	出土地点	長さcm	直径cm	胎土	焼成	色調	備考
1	E－10 pit 105堆土内	4.5	1.4	密	良好	赤褐色	8.15g
2	SB 06 Pit 6 又はPit 108	3.3	0.9	〃	普	暗灰色	2.65g
3	住居跡内	3.0	1.1	〃	〃	〃	3.00g
4	SB 06 Pit 6 又はPit 108	5.5	1.5	〃	〃	黄灰色	表面に丹塗り？ 10.30g
5	SB06 pit 5内		1.3	密	〃	赤褐色	最大胴部部分を残して端部は欠損 4.45g
6	住居跡内		1.3	〃	良好	暗灰色	最大胴部部分で半折している 3.65g
7	E－10 pit 105堆土内	3.5	1.1	〃	普	黄灰色	3.35g
8	〃	3.4	1.0	〃	〃	〃	3.30g
9	〃	3.7	1.2	〃	〃	赤褐色	3.65g
10	〃	3.6	0.9	〃	〃	赤褐色 一部黄灰色	2.45g
11	〃	3.4	1.0	〃	〃	〃	2.65g
12	〃	3.3	1.0	〃	〃	黄灰色	2.85g
13	〃	3.5	1.0	〃	〃	〃	2.90g
14	〃	3.4	1.0	〃	〃	赤褐色	2.45g
15	〃	3.4	1.1	〃	〃	黄灰色 一部赤褐色	2.80g
16	〃	3.3	1.0	〃	〃	黄灰色	2.50g
17	〃	3.1	1.0	〃	〃	赤褐色 一部黄灰色	2.25g
18	〃	3.4	0.9	〃	〃	赤褐色	2.35g
19	〃	3.3.	0.9	〃	〃	黄灰色 一部赤褐色	2.70g
20	〃	3.7	1.1	〃	〃	〃	3.00g
21	〃	3.6	1.0	〃	〃	端部が赤褐色で他は黄灰色	表面にヒビが多い 2.80g
22	〃	3.6	1.0	〃	〃	黄灰色 一部赤褐色	2.70g
23	〃	3.5	1.0	〃	〃	赤褐色 一部黄灰色	端部一部欠損 2.40g
24	SX 02内 （方形周溝状遺構）	3.8	1.2	〃	〃	赤褐色	3.90g
25	住居跡内	3.4	1.1	緻密	良好	暗灰色	2.95g
26	〃		1.3	密	普	〃	最大胴部部分で半折している 2.90g
27	〃		1.2	〃	〃	〃	最大胴部部分で半折している 2.75g

第Ⅵ章　総　括

上鶴頭遺跡は、昭和57年度県営圃場整備事業に伴う発掘調査によって発見、調査された遺跡である。

本遺跡からは、**掘立柱建物跡**17棟、**竪穴式住居跡**1棟、**火葬蔵骨器**2基、**地鎮祭**に関係する小土坑3基、塚の伝承がある**方形の周溝状遺構**1基、多数の**墨書土器**が出土しているが、これら各遺構・遺物は、年代的にも極めて接近した時期に営まれたものであって、切り合い関係の少ない単純なあり方を示しているが、関連する文献資料や伝説等が皆無であるため、本遺跡の性格を明らかにすることはきわめて困難な状態である。

そこで、ここでは本遺跡の中心的遺構、掘立柱建物群を中心にして遺構の変遷について述べ、各遺構の性格、年代等について考えてみたい。なお、本遺跡の性格については、熊本大学工藤敬一教授がくわしく述べられているので、ここでは省略した。

掘立柱建物群の遺構期の設定　掘立柱建物群は、各建物の占地する地点によって次の3群に分けることができる。

A群は、約30m四方の広場をとり囲むようにして建つ建物群で、重複関係によってさらに次の2群に細分される。

A_1群　SB01・02・03・04・05－06（双堂型式と考え一棟とする）・08・09・11の8棟。

A_2群　A_1群中のSB05-06・SB09を切って建てられたSB17・10の2棟。

B群　A群のすぐ背後に建つ建物群で、SB07・12・13・14・15の5棟がある。

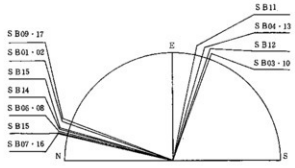
C群　A・B群の東北部に離れて建つ建物（群）でSB16の1棟を検出している。

次に、平面構成・桁行方向・柱穴の大きさ、柱痕跡の直径などを比較することによって、各群は以下のような特徴をもつことが知られる。(第52図・53図参照)

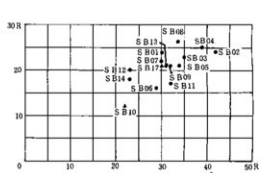
A_1群　広場の東・西・南・北にそれぞれ2棟づつの建物を配置し、SB01・11を除いた他の6棟は、広場に面した廂をつける。身舎の平面構成では桁行5間×梁行3間のものが多く、双堂とみられる建物（SB05-06）があるなど規模の大きな建物が集中する。建物の方向は、12°～20°Eをとり、特にSB01・02・03はN20°Eで、隣接する建物と正確に柱筋を揃えている。

A_2群　桁行方向がSB17でN20.5°E、SB10がN21°Eと近似している。身舎の平面構成は2棟とも桁行4間×梁行2間であるが、SB10は歪で、柱穴自体も貧弱である。SB17の廂は西面しており、広場側を意識してつけられている。

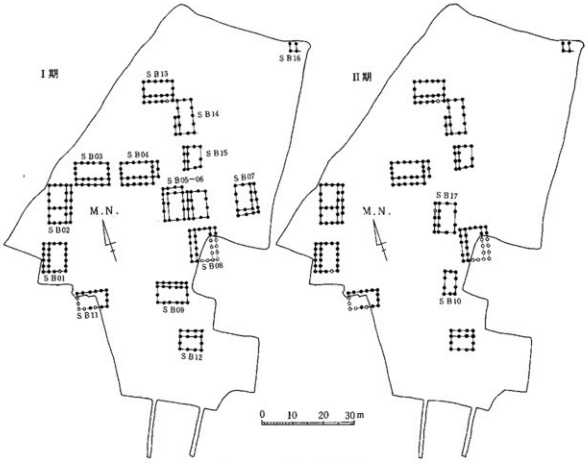
B群　この群中ではSB13が、平面構成（身舎が桁行5間×梁行3間）・柱穴からA群に近い比較的大型の建物である。しかし、ほかの4棟は、身舎の平面構成が桁行3間×梁行2間（SB07・12・14）



第52図　掘立柱建物跡桁行方向



第53図　掘立柱建物跡平面規模



第54図　掘立柱建物変遷図

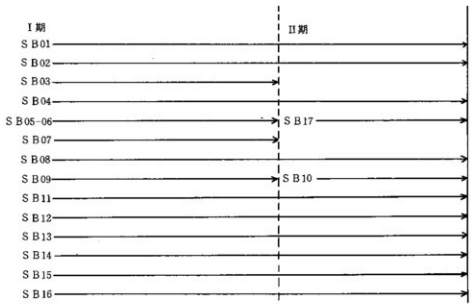
ないしは桁行４間×梁行２間（ＳＢ15）と規模がA₁群より一段階小さくなる。柱穴もやや小型で、浅くなる。建物の方向はN13°～15.5°Eで、ＳＢ14・15はA₁群のＳＢ06・08の棟方向の延長上に並び、ＳＢ07はA₁群のＳＢ05・06の妻方向の延長上に配置されている。廂はＳＢ07が東・南面廂であることを除けば、ほかの建物ではA₁群と同様に広場の方向を意識して取りつけられている。

Ｃ群　桁行方向・柱穴の規模は、Ｂ群のそれに類似する。

このように建物の占地する地点と重複関係によって４群に分けた。この４群は、出土遺物によれば大きな年代差がみられず、A₂群を除けば切り合うこともなく整然とした配置をとって建てられており、同時期に営まれていた建物群として考えることが可能である。さらに、柱を抜取られた痕跡をもつ建物（ＳＢ03・05・06・07・09）の中で、ＳＢ05・06とＳＢ09の占地していた地点に建てられているA₂群の２棟は、ＳＢ17が西面廂をつけて広場に面すること、建物の方向もA₁群のそれと近似することから、建て替えられた建物として考えることができる。

したがって、掘立柱建物跡に限った遺構変遷は、次の２期に大別して把握できる。（第54図 掘立柱建物変遷図 第55図掘立柱建物変遷模式図）すなわちⅠ期は、検出されたほとんどの建物が広場を中心として計画的に配置され、すでに整った様相を示していたとみられる。次のⅡ期になると、何らかの理由によってＳＢ03・05・06の並び堂・07・09の建物は撤去され、ＳＢ05・06に代りＳＢ17が、ＳＢ09に代りＳＢ10が建てられたものと考えられる。

なお、Ⅰ期の建物の方向には多少のバラツキがあるが、隣接する建物群では柱筋を揃えたり、近似した方向をもっている。これは、Ⅰ期の建物の造営に際して、一挙に全ての建物を建てたのではなく、隣接する３～４棟を１つのブロックとして建てていった結果ではないかと推定される。



第55図　掘立柱建物変遷模式図

次に、これらの建物群の柱痕跡内や掘方埋土内より出土する遺物によって遺構の年代を位置づけるならば、SB04、05－06、09、15内から出土した土師器坏、高台付埦は大宰府政庁跡SE400出土のものに類似し、[1]建物がSB09と重複するSB10からはSK1800[2]出土のものに類似する土師器坏が出土している。出土した遺物は少なく、断片的な遺物によって年代を位置づけることは早急すぎるが、おおむね9世紀前半代～後半代のものである。よって、建物群もこの時期の物と考えられる。

竪穴式住居跡　竪穴式住居跡は、長年の耕作等で上面が破壊されており保存状態は良くないが、埋土内より出土する遺物はSE400に類似する土師器の坏・皿・高台付埦のみである。住居跡はSB05－06の建物の西側で広場の中にあり、いかなる性格、用途の住居跡であるかは推測の域を出ないが、出土遺物によって、Ⅰ期掘立柱建物群建築の際に作られ、建物完成後まもなく廃棄、埋没した住居跡と考えられる。

地鎮具　17号掘立柱建物跡（Ⅱ期）の南側柱筋付近から、土地造成又は建物建設に伴って埋納されたと考えられる地鎮具が出土している。上記柱筋の2m四方内に親指の先大から小指の先大の小石が副とつまった小土坑が3基見つかり、この中の直径約60cm、深さ約20cmの土坑内から須恵器の壺、その肩口付近（東・西・南の三方）に各1枚づつの土師器の坏、壺胴部付近に1枚の皇朝十二銭（隆平永宝）が埋置されていた。上記土坑の北東約1mの土坑内からは、3枚の皇朝十二銭（同上）が重なりあった状態で出土している。本遺構は、壺、坏が出土した土坑を中心に北東（3枚の銅銭出土）と南東（小石のみ）側に土坑があり、三角形の形をしている。類似した遺構としては、胆沢城跡内で昭和30年の第2次調査と55年の第38次調査の結果、1辺約4.2mの方形の四隅とその中央から須恵器長頸瓶と坏を埋納した5基の小土坑が発見され、9世紀代の地鎮祭跡と考えられている。[3]また、兵庫県上原田遺跡では3m以内の4ヶ所の小土坑より、和同開珎と小壺が発見され、8世紀後半頃の地鎮具と考えられている。[4]本遺跡は3基と少ないが、土坑の作り（小石をつめる）や出土遺物、企画性を示す配置（距離）であることから、この3土坑は1セットの物と考えられる。出土した土師器坏はSE400に類似し、隆平永宝の鋳造年代（796年以降）等から、おそらくは9世紀前半、Ⅰ期建物群建設に関係して行なわれた地鎮祭の儀式に伴った遺構で、遺物はその鎮物と考えられる。

火葬蔵骨器　建物群の東、西側から出土した2基の火葬蔵骨器はいずれも須恵器壺である。第1号墳墓より出土した蔵骨器は、胴部上半が欠損して全体の器形が不明であるが、短頸壺形土器と思われる。短頸壺形

土器は、肩が張り強く「く」の字状に屈曲するものが古い形態といわれ、この流れを受ける短頸球胴壺は新しい形態である。短頸球胴壺は土器の形態変化から、短頸壺の特徴（肩が張り強く「く」の字状に屈曲する）をより強く有するもの→前者に近いもの→典型的な短頸球胴壺→前者でもやや短頸長胴壺に近いもの→典型的な短頸長胴壺へと変化していくことが知られている。これらの土器の年代は、古くは奈良時代前半からおそくとも平安時代前期頃と考えられている。[5] 第1号墳墓出土の蔵骨器は下半部しかなく、全体の器形が不明であるため年代推定が困難であるが、残存部より短頸長胴壺と考えられる。また、第2号墳墓より出土した須恵器長胴壺は、形態特徴から平安時代前半頃のものと考えられる。これら火葬蔵骨器は、当時火葬された人々の社会的階級（皇族、高級官人、僧侶、豪族層）から、おそらく本遺跡建物に関係した人の物と推定される。

方形周溝状遺構　この他、調査区の北側で塚の伝承がある一辺約8m四方の方形周溝状遺構が見つかっているが、中央部が撹乱されており、この結果、どの様な性格の遺構か不明である。

以上の個々の調査結果から、本遺跡は9世紀前半～後半の50～60年間という短期間に存在したものであって、約30m四方の中央広場を囲むかなり大規模な計画的建物配置（隣接する棟と柱筋を揃える。建物の方向の統一性が強い。遺構全体は南面する配置をとる。柱間寸法に長短のばらつきがある建物が多いが、整数尺によっている例がほとんどである。）の有廂建物群であり、単なる倉庫群とは考えにくく、また地鎮祭を行なった遺構や、出土遺物の土器類は供膳用の坏、埦、皿類がほとんどで、煮沸用、貯蔵用の器種が少なく、更には多量の墨書土器が含まれている事などの特徴から、本遺跡は全国各地の調査例からみて官衙（郡衙）跡と推測される。[6]

現在菊池郡となっている遺跡のある台地以南の地は、江戸時代以前は合志郡であった。このことから、本遺跡は平安時代前半の合志郡の郡衙と考えられる。我国では645年の大化の改新後、国・郡・里（郷）の行政単位がつくられ、肥後国は西海道の大国で玉名、山鹿、菊池、阿蘇、合志、飽田、託麻、益城、宇土、天草、八代、芦北、球磨の13郡が置かれ、のち貞観元年（859）に合志郡の西部が山本郡として独立し14郡となる。郡は国に次ぐ行政体で、郡衙と呼ばれる役所があり、税として取りたてた穀物や物品を収める郡倉がそれに付随していた。11世紀初頭の長元年間に記された上野国交替実録帳によれば、郡衙は郡行政の場である郡庁（庁屋、向屋、公文屋、副屋など）、郡司の居住の場であり、かつ中央と地方を往来する公使の宿泊の場でもあったと考えられる館（宿屋、向屋、副屋、厨屋、厩屋など）、食料倉庫であり炊事の場でもあった厨屋（酒屋、納屋、カマド屋、儲屋など）、郡内の貢納物を収納した正倉の4種の建物群からなっていた事がわかる。[7] 本遺跡の発掘調査では、倉庫（正倉）と思われる建物は検出されておらず、生活を匂わす遺構・遺物も無く、よって本建物群は郡衙の中心的建物、郡庁跡と考えられる。更に工事前の周囲の地形等から、遺跡の規模は約2町四方の面積が考えられ、このことから東西のいずれかに倉庫郡や館、厨屋の建物があったのではないかと推測されるが、本調査が圃場整備事業に伴うものであったため、調査と工事は同時進行の形で進み、重要な遺構（建物群）が発見された時は、調査区の周囲はすでに工事が終了している様な状態であった。このため、遺跡範囲の確認ができないのがおしまれる調査であった。

最後に、本遺跡から検出された17棟の掘立柱建物跡の内、ＳＢ05－06が他の建物とは異なる型を示している。そこで、ＳＢ05－06建物の特色について述べ、本報告書の最後としたい。

ＳＢ05・06建物について　広場の東側に建てられているＳＢ05とＳＢ06は、棟方向が前者がN16.5°E、後者でN14°Eと若干異なりながらも、身舎の平面構成（桁行3間×梁行2間）と柱間寸法は全く同一の建物である。さらに両棟は妻側の柱筋を揃えており、ちょうど中間には側柱と同じ柱間寸法の柱穴例がある。当初は、この2棟が接近しすぎているため時期的に異なる建物ではないかという疑問があったが、沢村　仁氏から双堂型式の建物の可能性があることを示唆された。2棟の柱穴は本遺跡では規模が大きい方に属し、他の建

物の柱間寸法が対応する柱列と異なる例が多いのに対して、SB05・06ではきちんと整えられている。これは双堂という特殊な建築様式に起因しているものかもしれないが、他の建物よりていねいな建造がなされていることは間違いない。なお、SB06の身舎内には直径60cm深さ12cmの焼土を埋土とした浅い土坑がある。遺物が供伴していないため建物と共存したのかどうか不明だが、SB05・06の西側は大量の土師器の坏・埦類が出土しており、さらにこの付近は本遺跡で唯一須恵器の大甕や土師器の甕の破片が出土し、南には地鎮のためとみられる土坑もあることから或いは、厨家的な機能を有する他の建物とは性格の異なる建物であろうと考えられる。

現存している双堂としては、東大寺法華堂や法隆寺の食堂・細堂がある（第58図）が、肥後国分僧寺跡で昭和56・57年に行なわれた発掘調査の結果、東西長35m南北長15mの掘込地業の前面に東西を揃えた南北長8mの掘込地業が検出され、双堂（屋）の可能性が示摘されている。[8]以上はいずれも礎石建物であるが、掘立柱建物としては山口県下関市の秋根遺跡[9]の双堂あるいは分棟型の建物と考えられるものが唯一のようである。

ところで、本遺跡の双堂型式建物の平面構成は、本遺跡の位置する菊池郡地方を中心に分布していた「平行型二棟造」と呼ばれる民家形式に類似しており注目される。（第56図）大田静六氏によると、[10]平行型二棟造とは、居住する本屋棟と炊事する釜屋棟とが軒を接しながら平行に並ぶ形式であり、二棟はともに梁間2間を標準とする細長い棟で、大きさや棟高はほぼ同じで、両棟の間の谷には樋がわたされるため、外観は同大同形の細長い寄棟屋根が2棟、平行に軒を接して並んだ格好になるという。従来、二棟造は南方の島嶼地域に祖形が求められ、南方系の民家形式とされていた。しかし、大田氏は同じ二棟造でも沖縄・鹿児島・宮崎県にみられる二棟造とは、2棟の並び方や釜屋の性格が大きく異なるため、少なくとも熊本県下の平行型二棟造の原流については南方系とは無関係であると考えた。そして、平行型二棟造の原流は、菊池郡付近を中心として奈良時代以前に形成された後、その周辺一帯に行なわれたとし、八幡造として知られる宇佐八幡宮本殿（第57図）の原流となっているのではないかと推定している。

菊池地方の二棟造については、寛永10年（1670）の肥後藩人畜改帳（旧合志郡と玉名郡内8ケ村が現存）の記載によって、そのほとんどの家屋が平行型二棟造であったと考えられることから、近世初頭まで遡上することが確実である。

さて、大田氏の平行型二棟造の原流についての説に従えば、SB05・06はその祖形ともいえる建築跡とみることが可能である。しかし、本遺跡に近く、同時代の集落遺跡である赤星福士・水溜遺跡[11]や伊坂上原遺跡[12]、寺迫遺跡[13]などでは竪穴住居が主体となっており、本例のような掘立柱建物は検出されておらず、奈良時代以前に当地方で民家の建築様式として成立していたかどうか疑わしい。やはり、付編で沢村　仁氏が述べられている見解のように、中央における官衙・寺院の双堂型式建物の影響下において地方官衙などに展開されていったと考えるのが妥当のように思われる。

註

(1)・(2)　福岡県立九州歴史資料館森田　勉氏の御教示による。

(3)　西野修「地鎮祭跡が発見された史跡熊沢城跡」第38次発掘調査概要（考古学ジャーナル）1981

(4)　播但連絡有料自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告II　兵庫県教育委員会　1980

(5)　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XX　福岡県教育委員会　1978

(6)　奈良文化財研究所山中敏史氏の御教示による。
中央に30～50mの空閑地を有する官衙遺跡の例として、岡山県宮尾遺跡、京都府正道遺跡、広島県下本谷遺跡、福岡県小郡遺跡、神奈川県長者原遺跡、静岡県御子ヶ谷遺跡、都府県十三宝塚遺跡等があるが、本遺跡はこれらと比べても有廂建物群の計画的配置などの点で特殊であるといわれる。

(7)　吉田晶　「日本古代村落史序説」　補論日本古代の首長制に関する若干の問題　32　3　都衙と郡雑任　塙書房

(8) 廣瀬正照 「肥後国分僧寺跡の調査」『九州史学会発表要旨』 1982

(9) 伊東照雄他「秋根遺跡」 下関市教育委員会 1977

(10) 大田静六 「熊本県の民家」大田静六編『九州のかたち』民家 西日本新聞社

(11) 野田拓治他 「赤星福土・水溜遺跡」 熊本県教育委員会 1977

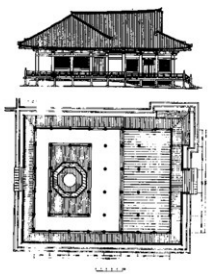
(12) 伊坂上原遺跡と寺迫遺跡は、菊池郡旭志村大字伊坂に所在する遺跡で、1982年度に熊本県教育委員会によって発掘調査された。

引用文献

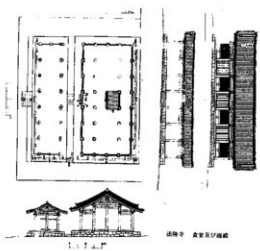
(1) 56図 大田静六 「熊本県の民家」 大田静六編『九州のかたち』民家 西日本新聞社 19

(2) 57図 日本建築学会編 「日本建築史図集」新訂版 彰国社 1980

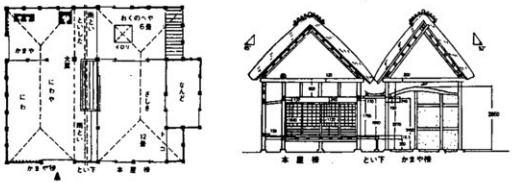
(3) 58図 日本建築学会編 「日本建築史基礎資料集成」 仏堂1 中央公論美術出版 1981



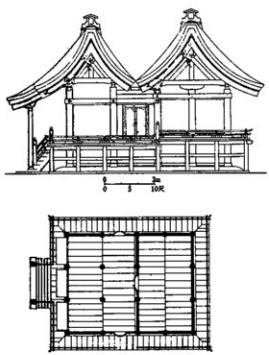
第56図 平行型二棟造民家



第57図 宇佐神宮本殿



第57図　平行型二棟造民家（谷泉氏宅、「九州のかたち」民家による）



第58図　宇佐神宮本殿立面・平面図
（「日本建築史図集」による）

付　論

上鶴頭遺跡の性格についての一推論

熊本大学教授　工藤敬一

本遺跡の性格を明らかにすることは、出土遺物が極端に少ないうえに、関連する文献資料が皆無であるためきわめて困難である。以下のべることも、文字通り情況證拠による手探りの推測にすぎず、さしたる意味をもち得るとも思われないが、今後のための手がかりとして記しておきたい。

発掘調査によって、本遺跡が9世紀前半おそくとも第3四半期を降るものでないこと、しかも5～60年間というごく短期間存在したものであること、台地上にあるものの、約30m四方の中央広場を囲むかなり大規模な有廂建物群であり、単なる倉庫群とは考えられないこと、などが指摘されている。従って想定されるのは郡・郷の官衙、荘衙、豪族館などであるが、他地域の調査例[1]などからみて官衙跡とみるのがもっとも妥当かと思われる。私はこれを合志郡西部の発展によって設けられ、貞観元年（859）5月、合志郡の西部を分けて山本郡を置いたことに伴ない廃棄されるにいたった、一時的におかれた官衙跡とみたい。以下この推定の理由をのべよう。

この遺跡のすぐ北部、台地の下を菊池川が西行し、旧藩時代までは菊池郡と合志郡の境をなしていた（ただし9～10Cの段階では台地の中央部―現在の泗水町と七城町の境界―が郡境であった可能性もある）。この流域には条里制が施行され夜関（夜開）、子養（五海）、辛家（加恵）、上甘（蟹穴）などの菊池郡に属する倭名抄郷が集中している。また台地の南には口益（久米）・佐野・殖生（上生）の合志郡の郷名、そして西部には山鹿郡の伊智郷がみられる[2]。このようにこの台地の縁辺部には倭名抄郷が集中しており、これは10世紀当時この地域にかなりの人口の集中＝増加がみられたことを示すものであろう。それは本来の合志郡衙の所在（泗水町住吉に比定されている）を東に片寄ったものにしていったのではなかろうか（この点台地北部が菊池郡であったとすれば、西寺にあった郡家が限府に移ったこととの関係を考えるべきかもしれない）。いずれにしても台地西部の縁辺部全体をカヴァーする官衙や院倉の設置が必要となったのであろう。8世紀末から9世紀にかけ政府は度々次のごとき院倉分置の格を出した。

応建置倉院事

右、被右大臣宣偁。奉勅。如聞諸国建郡倉元置一処。百姓之居去郡僻遠、跋渉山川有労納貢。加以倉舎比近営宇相接、一倉失火百倉共焼。言念其弊、有損公私。宜須毎郷更置一院以済百姓兼絶火祥。始自今年所輸租税収納新院。但前所納郡家不動物者、依旧莫動、其用尽倉者漸遷新院。置倉之法一依延暦十年符、各相去十丈、量便置之。　延暦十四年閏七月十五日　（類聚三代格）

この背景には開発定住域の拡大変化とともに、当時頻々と起った郡倉の火災があった。これは神火と称され、旧郡司勢力の没落、新興勢力の台頭にともなう現象であった。肥後でも神護景雲元年（768）の八代郡倉の蝦虫大群出現をはじめとして、9世紀後半にかけて郡倉に関する怪異が屢々記録されている。天安2（853）には菊池城不動倉11字が焼失し、貞観17年（875）には玉名・菊池の両郡倉で大鳥群鳥の怪が記録されている。上鶴頭の官衙の成立にもこの地域における新興勢力の台頭がその背景に考えられるであろう。つまり台地西部における新勢力の台頭にひきつけられる形でこの官衙が設けられたであろうし、おそらくこの近くには正税を納める院倉も分置されたものと思われる。その点で注目されるのが墨書土器である。特にそれぞれ20個以上出土している「正」・「大正」および「西正」の文字は正倉（院）・西正倉（院）と見るのがもっとも可能性が高いのではなかろうか。すなわち合志郡（あるいは菊池郡）の西部の正院と見るのである。そして一点だけ見られる「坂上」の墨書は、この官衙の役人名であろうか。この遺跡の北方6～700米の梶迫からは8

世紀末頃の「目代」の墨書をもつ土器が出土している。この目代はもちろん平安末期の国司代官（一人目代）ではなく、国衙の諸部局（所）の長官に相当するもので、数人ないし10人ほどの存在が考えられる。[3] 彼等は地方豪族から国衙に出仕していたのであり、平安後期には在庁官人と呼ばれるにいたり、在地領主化していくのであるが、坂上氏はこのような在地勢力の一つではなかったろうか。ただ、いまひとつ多数出土している「生」の墨書については今のところ何の手がかりもあげることができない。

ところでこれに加えて考えるべき条件として、官道の変更がある。本遺跡の東北方、菊池川と迫間川の流域の底平地をはさむ米原台地には、鞠智城が白村江の敗戦（663）以降に築かれていた。そしてこの城との関連で大宰府と肥後国衙を結ぶ官道（車道）が米原台地の南麓を東行し、西寺の菊池郡家近くを通り、住吉の合志郡家の西方を南西に花房台地をつききって詫磨国府に通じていたことが、鶴島俊彦によって主張されている。[4]ところがこの鞠智城（菊池城院）は９世紀になると危機を迎える。「兵庫が自ら鳴る」などの怪異記事が相次ぐのは、その終末を告げる前提であろう。９～10世紀には対外危機が遠のき、大宰府から遠く離れた鞠智城は維持の必要が感じられなくなった。この過程はさきに述べたような、合志郡西部の開発の展開に応じて、合志郡を分割して山本郡をたて（貞観元年）、郡家（植木町正院）の近くを通る新たな官道（延喜式の官道）が設けられることと対応しているものと思われる。大木駅（南関町）―江田駅（菊水町）―高原駅（植木町）から鮎田国衙（９世紀半ば国衙は鮎田郡二本木に移った）にいたる最短距離の官道が車路に代ったものであろう。[5] そしてこの官道の変更、山本郡衙と院倉の設置によって、台地西部に設けられていた上鶴頭の官衙や院倉はその必要性がうすくなり、放棄されるにいたったものと見れないであろうか。上鶴頭遺跡が９世紀第２四半期を中心とする、50～60年間のものであったということは、以上のような情況から説明できるのではなかろうか。

さいごにふれておかねばならぬのは、本遺跡の南方1,500米の台地南端近くにある田島の坂口廃寺についてである。これは松本雅明の調査[6]によると法起寺式の規格をもつ、平安後期初の寺院跡であり、松本は郡寺と推定し附近に郡家も存在したものとみている。この附近（口益郷であろう）が交通の要衝で水田も多く生産力にとんでいたところから郡寺・郡家が東の住吉からここに移ったものと見るのである。もしこの説がなりたつならば、上鶴頭の官衙から田島の官衙への移動が考えられるかもしれない。しかし坂口廃寺を11世紀半ば以後とみるならば大宰府安楽寺領田島荘と関連する遺跡とみることも可能となろう。11世紀後半になると府官系豪族の菊池氏の婚居により合志郡にも田島荘・富荘・佐野荘など安楽寺領荘園が立てられていったと考えられるからである。いずれにしても今は可能性を指摘するに止めるほかはない。

註

(1) 中央に30～50米の空閑地を有する官衙遺跡の例として、岡山県宮尾遺跡、京都府正道遺跡、広島県下本谷遺跡、福岡県小郡遺跡、神奈川県長者原遺跡、静岡県御子ヶ谷遺跡、群馬県十三宝塚遺跡などがあるが、本遺跡はこれらと比べても有廊遺物群の計画的配置などの点で特殊であるといわれる。以上奈良文化財研究山中敏史氏のご教示による。

(2) 伊智郷については、今日の植木町伊知坊が山鹿郡にしては南にすぎ山鹿郡が広くなりすぎるとして、伊智郷を伊智田として、内田（鹿本郡菊鹿町）に比定する説もある（吉田東伍『大日本地名辞書』・熊本県文化財調査報告25『熊本県の条里』中の日野尚志稿）。しかし条里の方向性などからみて山鹿郡の最南部を伊知坊にもって来ることは必ずしも不可能ではあるまい。

(3) 目代については米田雄介『郡司の研究』参照。肥後については12世紀なかば、木原広実によって目代二人が国庁の路頭で頓死の重傷を負わされた例がある（拙稿「鳥羽院政下肥後の在地情勢」『熊本史学』50号参照）。

(4) 「古代肥後国の交通路についての考察」（『駒沢大学大学院地理研究』９号）

(5) 延喜式の駅路については、木下良「肥後の駅路」（藤岡謙二郎編『古代日本の交通路』Ⅳによる。）

(6) 泗水町教委『田島廃寺調査報告』による。

上鶴頭遺跡の建築について

九州芸術工科大学教授　沢村　仁

本遺跡は遺跡そのものの性格について興味深い問題をもっている。と同時にその構成要素である建築についても重要な新資料を発見したものと評価できる。この点を述べておきたい。

1．遺跡全般について

建築は掘立柱建物が主で、竪穴住居一棟をふくむ。建物は中央広場を囲む型式で整然と配置され、自然集落とは異なる性格を予想させる。また、個別にみると身舎梁間三間の建物は造営時期が第Ⅰ期に集中していると思われ、配置も最も整然としていることに注目される。このことはこの一郭の造営当初において、配置上も一棟ごとの建築もきわめて計画性の高いものであったことを思わせるものである。

中央の広場は約100尺角の正方形に近い形になっており、何等かの使用目的のための計画があったと考えられる。

また、建物には廂が付せられているものが多いが、廂の梁間が短かく、空間としての「廂」なのか、縁のようなものなのか判断できない。一例を除いては広場に面した側に廂がついているので、土廂または吹放しの広縁型式のものであったかともみられる。

床が張ってあったか、どうかについては、掘立柱による床束は検出されていないが、地表面が失われているので小さい束石があったかどうかを決められない。床張りであった可能性もあるようにみられる。

個々の例として類似の平面をもつものには大野城（大宰府）などの古代山城の礎石つき建物に側面三間の例が多い。但し、これらは総柱で高床だったかと思われるので、構造は異なっているであろう。柱間も当遺跡のものの方が短かいし、柱径も細い。ＳＢ０２などは内部に間仕切が設けられ、柱間が比較的小さく、柱径がやや細いことと考え合わせると住宅建築的なもののようにみえるが、出土土器器種の内容や、計画的配置、ファイヤプレイスがないようにみえることなど、建築の形態は住宅風で、用途は別と考えた方がよいようである。

○　分棟型か、並び堂型か、

特に問題なのはＳＢＯ５とＳＢＯ６の関係である。柱筋の通り方、方位の揃え方などに少々の誤差があるが、同型同大の身舎を平行にならべた形は古代社寺の並び堂型とまったく同様である。

並び堂というのは、古代建築で特別に奥行の深いものを造る必要がある時、梁の長さに限度があるため、類似の建物を前後に接続して建て、両方の軒先のつなぎ目に樋をかけて二棟で一つの空間をつくるものである。

奥行の特に深いものの必要なのは

⑴　大面積を要するとき

実例として、現存建物では法隆寺食堂と細殿（天平19年・747年以前）。遺跡では、興福寺食堂（720年前後）、平城宮第二次内裏ＳＢ163と164などがある。

⑵　機能の違う二つの空間を組合せるとき

ａ：仏の神聖な空間と僧や信者の人間のための空間の接続。実例として東大寺法華堂（747年頃）。

ｂ：夜の御殿と昼の御座。実例として宇佐八幡宮本殿（成立は奈良時代後期？）

以上の様に奈良時代の宮殿・寺院・神社本殿にみえるようなものを双び堂といい、おそらく、中国に先例

があったとみられる。極端に大規模なものは長安大明宮麟徳殿も同一の考え方で建てられた例とすることができる。

平安時代になると現存例はないが、遺跡で類似のものが知られている。すなわち、山口県下関市で調査された新幹線新下関駅前遺跡である秋根遺跡の実例である。

秋根では主として平安初期～室町時代の掘立柱建物数百棟が検出され、平安時代にはやや特殊な、官衙に関係ある一郭だったが、次第に農村に変貌してゆく様子が示されていた。平安初～中期の性格・名称の確認できない官衙的なもの、という点も上鶴頭遺跡に似ている。

秋根遺跡のＬＢ100とＬＢ100Ｂとの組合せは平安初期のもので、ＬＢ066と068の組合せ、ＬＢ062と070の組合せ、といずれも二棟の軒先をつなぎ合わせた形をもち、次第に年代が下ると簡略になっていくようにみえる。

同じ秋根遺跡でも遺跡の中心から外れた台地縁辺のＬＢ004と006とは年代も室町時代と推定され、二棟の組合せ方も一方の妻に他方の平を合わせる形で、建築の性格も農家であろうとみられている。

このように、二棟の建物を桶を仲介にして連結して使用するのにも、平の軒先同志をつなぐ平行形と、妻と平とを結びつけるものとがある。

近世の民家をみると、座敷・次の間など格式的接客用の「おもて」棟と土間・家族居間・家事労働の「なかえ」棟とをつなぐ分棟型民家が南西諸島・九州中南部・東海地方・房総に分布している。

これらのなかで、平行形は熊本から筑後にかけてあり、妻と平をむすぶのは他の太平洋沿岸全地区にある。遺跡では後者が下関にも中世にはあったことを認められる。

この平行分棟型民家は、熊本では近世初頭には一般的であったことが、「肥後藩人畜改帳」で知られている。

このことと上鶴頭遺跡の双び堂型式の建物遺跡とはどのようにか、関連があるのであろうか。

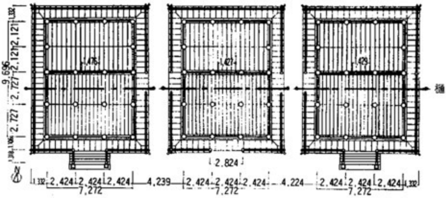
上鶴頭のものは平安初期の官衙又は荘家で、平行分棟型の民家は近世農村の上層農家や農村内寺院の庫裡である。直接関係はない。

恐らく、古代の双び堂は宮殿・官衙・邸宅などの一部で実用化され、地方の官衙や荘園政所などにも構造を利用されたのではなかろうか。これが、一方では宇佐八幡宮のような或る種の人格神の神殿にも建築形式として利用され、荘園や地方官衙を通じて中世の上層農家にも形が伝わったと考えられるであろう。

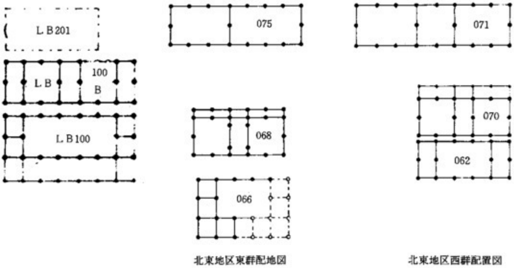
これは間にミッシングリンクが多くて推測の域を出ない。しかし、両者が同様な機能と構造上の理由から別々に発生し、実際は無関係と考えるより、今回発見されたものや秋根遺跡など、平安時代の実例を間に入れて考えてみると双び堂型式官衙と平行分棟型民家とは存外、直接の血縁があってもおかしくないと考えることができるのである。

文　献

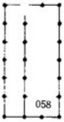
- ○『興福寺食堂発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報　1959。
- ○『大分県史　美術編』大分県　昭和56年。
- ○『秋根遺跡』下関市教委　1977。
- ○『南西諸島の民家』野村孝文　昭和36年　相模書房。
- ○『鹿児島県の民家』鹿児島県教委　1975。
- ○『熊本県の民家』熊本県教委　昭和46年。
- ○「近世初期における熊本地方の分棟型民家」吉田靖（『文化財論叢』奈良国立文化財研究所　1983）



挿図1
宇佐八幡宮第一～三殿
(『大分県史美術編』より)



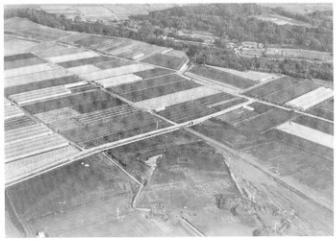
挿図2
秋根遺跡の双び常型式
官衙（『秋根遺跡』下関市）



挿図3　秋根遺跡の分棟型農家 平面と推定復原
(『秋根遺跡』より)

図　版

（南から）

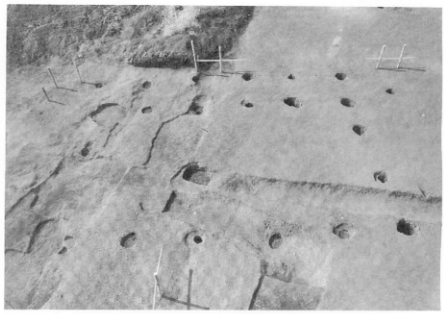


（真上）

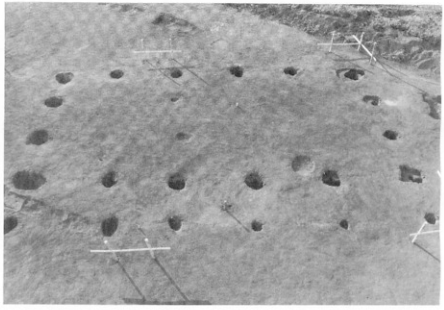
（北東から）

上鶴頭遺跡全景航空写真

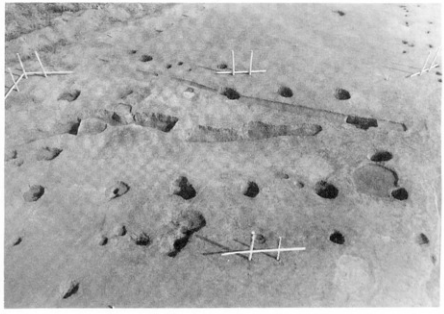
図版 2



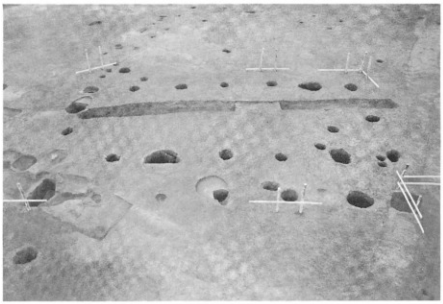
第 1 号掘立柱建物跡
（S B01）



第 2 号掘立柱建物跡
（S B02）

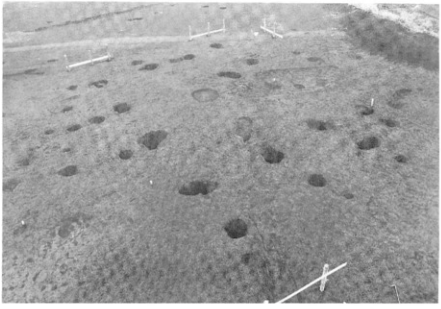


第 3 号掘立柱建物跡
（S B03）



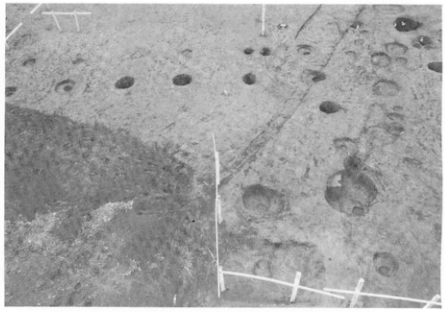
第 4 号掘立柱建物跡
（S B04）

第 5・6・17号掘立柱建物跡
（S B05-06・17）



第 7 号掘立柱建物跡
（S B07）

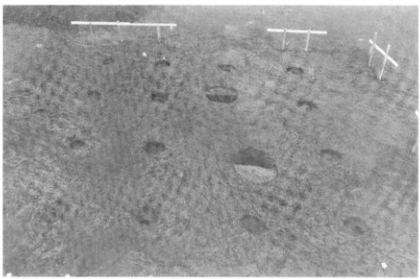
図版 4



第 8 号掘立柱建物跡
（S B08）

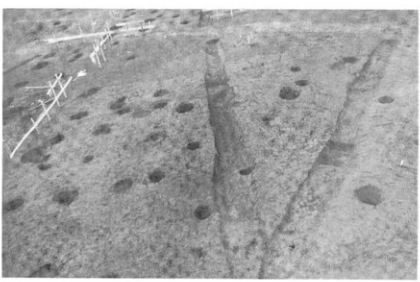
第 9・10号掘立柱建物跡
（S B09・10）

第11号掘立柱建物跡
（S B11）



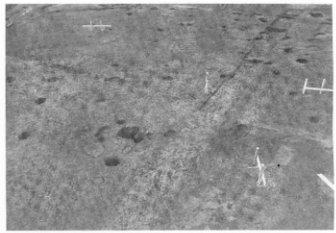
第12号掘立柱建物跡
（ＳＢ12）

第13号掘立柱建物跡
（ＳＢ13）



第14号掘立柱建物跡
（ＳＢ14）

図版 6

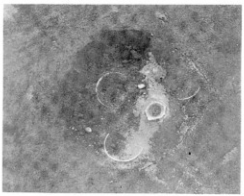


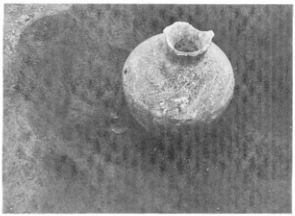
第15号掘立柱建物跡
（ＳＢ15）

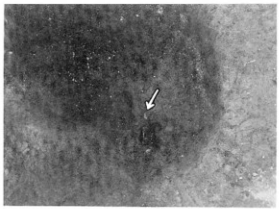
第16号掘立柱建物跡
（ＳＢ16）

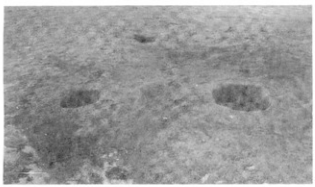
第１号墳墓出土状況（上）

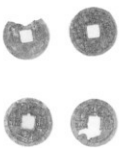
第２号墳墓出土状況（下）





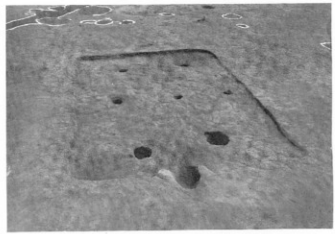




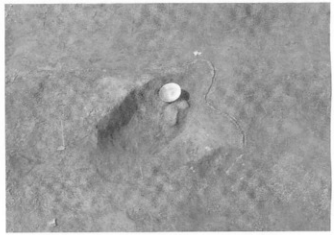


地鎮具及び出土状況

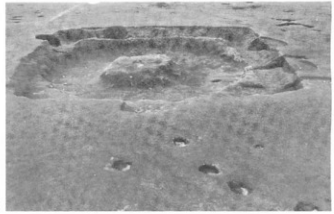
図版 8



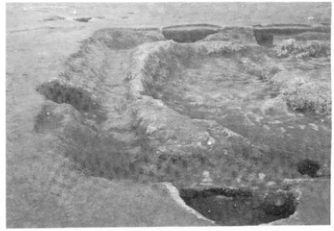
竪穴式住居跡（西から）



竪穴式住居跡カマド部分



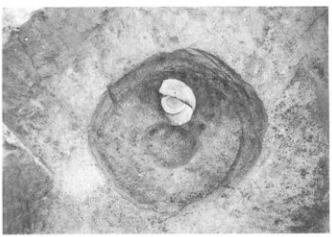
方形周構状遺構（北から）



方形周構状遺構（東から）

S B06 Pit10

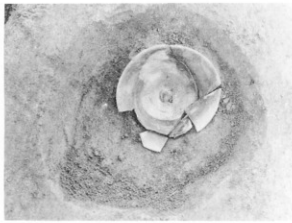
S B04 Pit9



S B04 Pit7

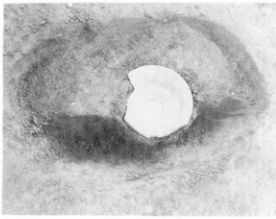
I Pit137

土器出土状況及び柱穴状況

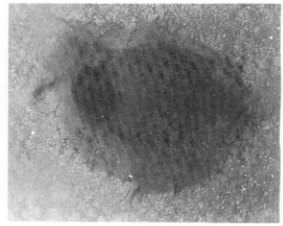


S B06

S B09　Pit 7



S B05

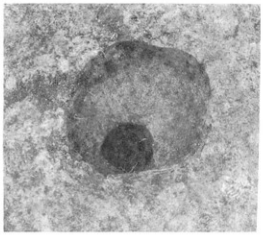


S B01　Pit 9

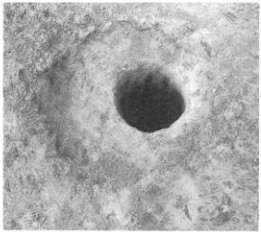
S B02　Pit 11

S B03　Pit 5

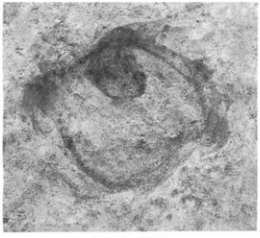
土器出土状況及び柱穴状況



S B12　Pit8



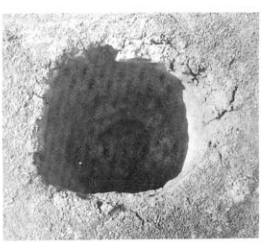
S B01　Pit7



S B14　Pit7

S B10　Pit4

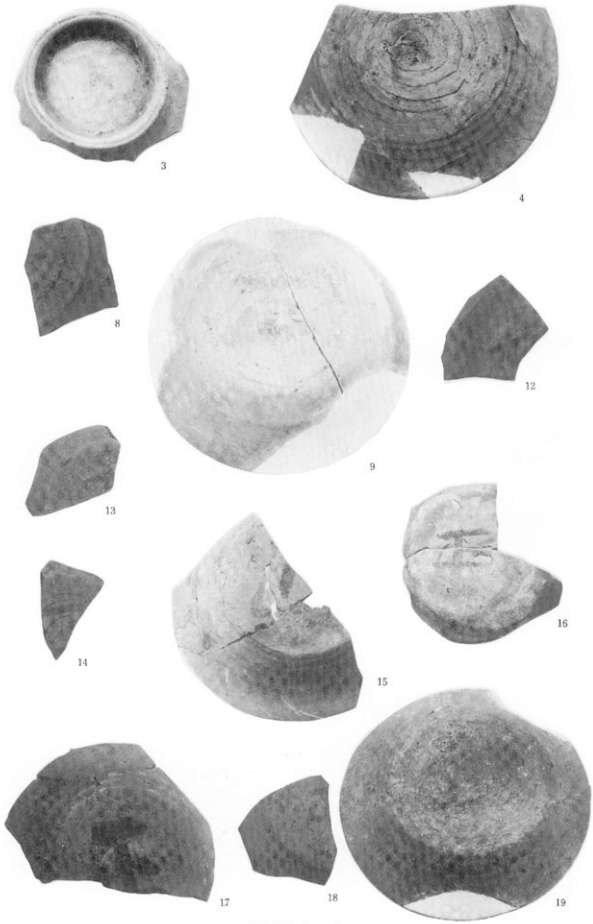
S B12　Pit3



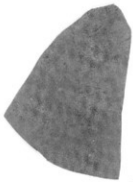
S B01　Pit4

柱穴状況

図版12



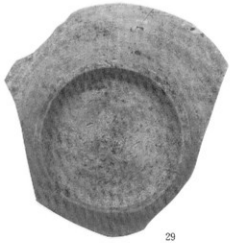
墨書土器（1/2）


21

24

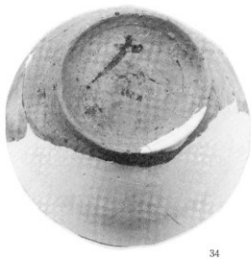
25

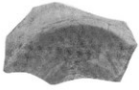
28

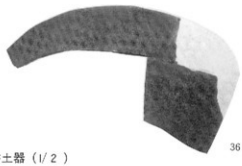

29

30

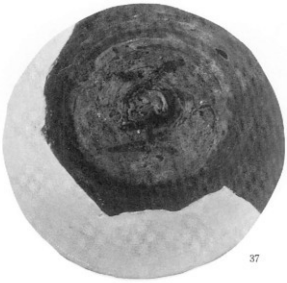
33


34


35

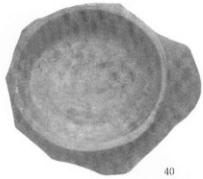

36

墨書土器（1/2）


37

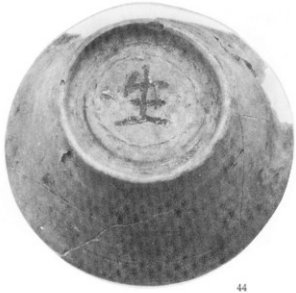
38

39

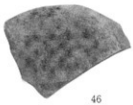

40

42

43


44

墨書土器（1/2）

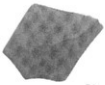

46

49

47

51

52


54

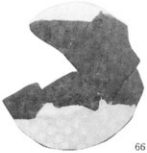
58

59

61

63

65


66

67

墨書土器（1/2）

熊本県文化財調査報告　第63集

上鶴頭遺跡

昭和58年３月31日

編集
発行　熊本県教育委員会
〒862 熊本市水前寺６－18－１

印刷　コロニー印刷
〒860 熊本市二本木3丁目12-37

上鶴頭遺跡　正誤表

誤			正
挿図目次	第56図	……81	挿図目次　第56図……82
〃	第57図	……81	〃　第57図……82
〃	第58図	……82	〃　第58図……81
15頁	21行目	方形の周溝遺構も	方形の周溝状遺構も
17頁	10行目	方形周溝状、火葬墳墓、	方形周溝状遺構、火葬墳墓、
37頁	図説明文	第25図住居址カマド実測図	第25図住居跡カマド実測図
69頁	No.72	C－5住居址内	C－5住居跡内
76頁	第53図の単位	30R　50R	30尺　50尺
79頁	30行目	東西のいずれかに倉庫郡や舘、	東西のいずれかに倉庫群や舘、
81頁	第56図	平行型二棟造民家	トル
	第57図	宇佐神宮本殿	第58図　東大寺法華堂 法隆寺の食堂及び細殿
82頁	第57図		第56図
	第58図		第57図
図版7	最下段右側	銅銭の写真	印刷　天地逆

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 63 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：上鶴頭遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日